
機動戦士ガンダム 英雄黙示録

京勇樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム 英雄黙示録

【EZコード】

N7601V

【作者名】

京勇樹

【あらすじ】

新太陽暦73年人類は未だに争い続けていた。

この物語は激動の時代を生きる少年少女達の物語である。

すいません多少題名を変更しました

プロローグ2年前の戦い（前書き）

えー、此度は私京勇樹の拙い作品を読んでいただきありがとうございました

多少の無茶は眼を瞑つてください。

今後のためにホールサインを変更しました

プロローグ2年前の戦い

新太陽暦73年

人類が宇宙に進出しコロニーが建造されて住むようになつてから半世紀以上が経過していた。

そんな新太陽暦73年もあと数日で新しい年を迎えるとしているある日。

人間同士の争いがここく初音島^{モビルスーツ}へでも繰り広げられようとしている時人型機動兵器MSのコクピットの中でとある少年は2年前のことを思い出していた。

?「あの時の俺は無力だった、だけど今は・・・」

コクピット内に電子音が鳴り響いた、どうやら通信のようだ

柏木「こちらレー・ヴァ・ティン4柏木機、土見聞こえる?」

稟「こちらレー・ヴァ・ティン3土見機聞こえる、感度良好」

柏木「なに怖い顔してんの?リラックスリラックス!」

稟「お前ね少しは緊張しどけって、2年前の戦争を思い出してた」

柏木「あー、タイタン戦争か・・・」

そう今から2年前の新太陽暦70年～71年

今は全滅したと言われてる20mを超す巨人達、国際呼称くタイタ

ン[→]との戦争があつた。

今でも目を瞑れば思い出す、あの時の無力感、絶望感を稟は一生忘れないだろう。

新太陽暦70年8月某日、突然そいつらは現れた。

突如現れた巨大な門、その門から大拳として現れる頭に四角い兜を被つた6眼の巨人達。

巨人達は世界中に対して侵攻を開始した、当初各国の軍隊は戦線を維持、優勢だつた。

しかし約3ヶ月後、タイタン側に航空生物兵器ドラゴンが出現。ドラゴンの出現により各国の戦線は崩壊、各國は後退しつつ戦線を構築したが長くは持たなかつた。

この時の世界各国の主力装備は多脚戦車と空軍の戦闘機、海軍の戦艦だつた。

タイタンの装備は最初大剣に、腕に直接付いてる大砲に巨大な弓矢だつた。

しかしドラゴン出現と同時期に盾を持つ各種タイタンや、巨大な盾を持つタイタンが出現したことにより、砲弾の効果は著しく低下し、意味を成さなくなつた。

そこで世界各国は新兵器の開発を急務とされた。

戦車以上の火力と戦闘機並みの機動力を持ち尚且つ3次元機動を併せ持つ兵器を。

しかし開発は難航した、戦車の主砲以上となると、更なる大口径化かビーム兵器しかないからだ。

当時ビーム兵器は戦艦クラスにしか搭載されておらず、ビーム兵器の小型化は困難を極めていた。

もし小型化できたとしてもエネルギー量の問題もあつた。

新太陽暦71年1月某日、しかしそこに一筋の光明が見えた。

海洋中立都市国家「初音島」の天枷研究所が新概念の機動兵器を世界に向けて発表した。

それが人型の汎用機動兵器MS「モビルスーザ」だつた。

天枷研究所は世界でも名の知られたロボット研究の最先端だつた。しかし、世界は最初天枷研究所が発表したMSに対して懷疑的だつた。

そこで天枷研究所は提案した、今から我らが開発したMSの威力を御見せしましょうと、

天枷研究所はMS隊を日本に派遣した。

天枷研究所がMS隊を派遣を決定して1週間後とある町が紅蓮の炎に包まれていた。

その炎に包まれてる町を3人の少年少女が走っていた。

? 「はあはあ・・・・楓、桜急げ！」

楓「はあはあ、・・・・待つてください、・・・・稟くん！」

桜「楓ちゃん早く！」

3人は炎の中を兵士に誘導されながら走っていた。

1番先を走っている少年は身長170cmくらいで顔立ちは丹精で髪は耳を隠すくらい名前は土見 稟

真ん中に居るのは黒髪で腰に届くほどで更に左右にリボンで纏められてる髪が印象的な大和撫子と言う言葉が似合つ少女名前は八重 桜 少し遅れて走っているのは明るい茶色の髪で肩まで届くくらいで赤いリボンを結んだおとなしい印象の少女名前は芙蓉 楓

少年達は炎を避けながら兵士の居る方向へと走っていた。

稟「楓、桜！ 急げ後少しだ！」

その時だつた

稟「うお！」

桜「きやー！」

ものすごい轟音と共に衝撃が走りまともに立つことすらできなかつた。

稟「いてて、楓、桜大丈夫か？」

桜「私は平気、楓ちゃんは？」

しかし楓からの返事は無い。

稟「まさか・・・・・」

稟は恐る恐る振り向いて楓が居た辺りを見たが、そこにあったのは巨大な足があった。

桜「そんな・・・楓ちゃん・・・」

巨大な足元には楓の髪に結んであつた赤いリボンと千切れた腕が転がっていた。

稟「楓……そんな……楓————！」

すると目の前に居たタイタンが手に持っていた大剣を振り上げた。

稟（俺ここで死ぬのかな、でもせめて桜だけでも！）

稟は後ろに居た桜を突き飛ばした。

そして稟は死を覚悟して眼を瞑つた。

銃声の様な轟音が響いた、稟は何時までたつてもこない痛みを不思議に思い眼を開いた。

目の前には大剣を振り上げた状態で固まつて居たタイタンが居たが、そのタイタンもゆっくりと倒れた。

稟は呆然としていた、一体誰が助けてくれたのか。

その時戦闘機の様な音が聞こえた、稟は音のした方向を振り向いた。その方向から人型の巨大なシルエットがこちらに飛んでくるのが見えた。

桜「稟くん大丈夫ですか！？」

どうやら桜が駆け寄つてきたらしい。

稟「ああ、俺は大丈夫だ」

桜は泣きながら稟に抱きついている。

そして稟たちの前に人型の機体が着地した、目の前に着地した機体は赤青白の3色が印象的な機体だった。

? 「そこの君達生きてるな！？」

どうやら目の前の機体から発しているらしい声を稟は聞いた。若い声だった、自分達と同年代くらいではないかとすら思えた

稟「はい、大丈夫です！」

? 「よし！では少し待つてくれ！今桜武の高機動車と歩兵部隊を

呼んだから

稟は驚いた。

稟（桜武だつて！？あのMSを発表した初音島の軍隊！）

桜武は初音島が日本から独立した際に組織された軍隊で正式名称は初音島統合防衛軍である。

確かに機体の右肩には桜武の証の桜の花の上に盾と日本刀が斜めに

重なったマークがペイントされている。

稟（これがMS・・・人類の新たな力！）

稟は目の前の機体を見上げ、視線を下げながら拳を握った。

稟（俺は力が欲しい！大切な人を守れる力が！！）

稟は改めて目の前の機体を見つめた。

これが英雄と呼ばれる少年と土見稟の出会いだつた。

この戦いの後、初音島の派遣した部隊は約2週間で日本からタイタンを駆逐した、その性能を見た各国の軍関係はMSの本格的導入を決定した。

ここから人類の反撃が始まるのだつた。

そして新太陽暦71年12月末日タイタンは世界から駆逐された。

プロローグ2年前の戦い（後書き）

はい、始まりました英雄黙示録ですが、一応誤字脱字は気をつけて
ますがなにがあつたら一報ください

2年前の戦い sides Y (前書き)

遅くなりました

2年前の戦い sides Y

? 「もうすぐ人間同士の殺し合いが始まる・・・」
暗い部屋の中、1人の男がベッドに腰掛け両手で顔を覆いながら咳いた

? 「義之、大丈夫？」

何時のために起きたのか、背後に体にシーツを巻きながら眼鏡をかけた女性が優しく声をかけてきた。

義之「ああ・・・正直少し怖いかな、ありがとう麻耶」

桜内義之は最愛の恋人の沢井麻耶にそう返事した

麻耶「ううん、それで良いと思う、今回は人の命を奪つてしまふんだから」

そう、今回の戦いは自分と同じ生きた人間だ、前大戦の『タイタン』じゃない。

義之はそう思いながら目を閉じて、今でもはっきり覚えている2年前のタイタン戦争を思い出した

今から2年前、新太陽暦71年8月末日、場所は初音島

義之「はああ、これで何体倒した？」

義之は愛機の武装15・78m対艦刀シユベルト・ゲベルルをタイタンの死骸から抜きながら呟いた

パイロットスーツのヘルメットの無線からは、味方の怒号や悲鳴、救援要請の声がひつきりなしに響いている

義之「どうどう、俺だけか」

最初は義之の駆るストライクを含めて16機居たが、今は義之のGAT-X105ストライクだけが砂浜に立っていた。

その証拠に周囲にはM1アストレイの残骸が散乱していて、しかしそれ以上にタイタンの死骸が砂浜を埋め尽くしている。

電子音が響くとサブモニターに顔が映った

麻耶「こちらHQ^{ヘッドクオーター}！ストライク、義之大尉聞こえますか？」

義之「こちら義之聞こえる、こつちは俺以外全滅した、繰り返す俺以外全滅した」

麻耶「HQ^{ヘッドクオーター}解、先ほどそちらの地区に向かつ移動熱源及び震源検知、規模は連隊規模よ」

義之「おいおい、そんな数俺1人じゃ対処しきれない！」

麻耶「大丈夫、そつちに援軍が向かつたから」

義之「援軍？一体誰が・・・」

そう言つた瞬間コクピット内に警告音の大合唱が鳴り響いた！

義之は慌てて機体を右にステップさせた

先ほどまでストライクが居た場所に光弾が当たり、クレーターが出来た

義之は上を見た

義之「ドラゴンか！？」

上空に10数体のドラゴンが居た、しかもその内の1体が今までに攻撃を放とうとしている

義之「やばい！」

ストライクは着地したばかりで動けない、万事休すかと義之は思つた、その時だつた

？「ほらほら弟くん油断しないの！」

その声と同時に攻撃を放とうとしたドラゴンにレールガンとミサイルが命中し、ドラゴンは墜落した。
アサルトショット

義之「この攻撃はデュエルAS！まゆき先輩！」

まゆき「やつほー！弟くん無事みたいだね」

その声と同時にストライクの右側にベースジャバーに乗つたデュエルASが着地した

まゆき「こつちに来たのはあたしだけじゃないよ」

？「同志桜内は無事か」

声が聞こえたと思ったら海中から現れたタイタンに3本の槍みたいな攻撃が刺さつた

義之「今の攻撃はブリッツの！ 杉並か！？」

杉並「ふむ無事で何よりだ、同志桜内」

杉並の操るブリッツもベースジャバーに乗つて現れた

？「ほらほら、油断しちゃ駄目だよ？ 義之君」

大量のミサイルがドラゴンの群れに飛来していくと同時に声が聞こえた

義之「今のミサイルはバスター！ つてことは菊理さん！」

後ろには、今まさにミサイルを放つた証拠であるランチャーから煙が出ているバスターの姿が有つた

菊理「間に合つて良かつた、流石にこの数は1人だと厳しいからね」

菊理はそう言つてウインクした。

？「ふむ、全機集合したみたいだな」

そして上にはベースジャバーに乗つたイージスが居た

義之「伊隅隊長！」

伊隅「さてここは我々が防衛するぞ！ タイタン共を1匹たりとて通すな！！」

全員「」「」「了解！」

無線に仲間達の声が響く、義之は気合を入れ直して操縦桿を握りなおした

杉並「同志桜内！ 捣まれ！」

ストライクの上にブリッツの乗るベースジャバーが来た

義之「ああ！」

ストライクはベースジャバーの下にある取っ手を掴んだ
ベースジャバーはその強力な推力で2機まで運べるから、こういう運用も可能だ

杉並はベースジャバーをドラゴンの上まで飛ばした

義之はドラゴンの上まで来たのを確認して、ストライクの手をベースジャバーの取っ手から離してドラゴンの上に着地した

義之「はあああ！」

義之は雄たけびを上げながら対艦刀をドラゴンの首めがけて振り下

ろした

振り下ろした対艦刀はドラゴンの首を簡単に切り落とした
ドラゴンの翼が止まり自由落下に入る前に、義之は近くのドラゴン
に飛び移り、また首を切り落とした

今度は左手に装備されてる、小型の盾に装着されてるワイヤーアン
カーブパンツアーアイゼン>を上に伸ばして上に居るドラゴンの足
の様な部位に噛ませた

義之「よつと！」

義之はワイヤーを巻き上げて、勢いを利用してドラゴンの上にスト
ライクを乗せた

義之「は！」

義之は、ストライクの右肩に装備されてるビームブーメラン^くマイ
ダスマッシュサー>を左に投げた

左に居たドラゴンの翼の付け根を切り裂いた、ドラゴンは飛べなく
なり落ちていく

マイダスマッシュサーはビーコンにより元の位置に戻った

義之は足元に居るドラゴンの背中にシコベルト・ゲベルルを突き刺
し、刺した状態から切り裂いた

ドラゴンは落ちていく、ドラゴンは近くには居ない、どうやら今の
で最後だつたらしい

杉並「同志桜内こっちだ！」

義之は後ろを見た、ブリッツが乗つたベースジャバーが飛んでくる

杉並「同志桜内、機体をビーコンに同調せろ！」

義之は反射的にコンソールに手を伸ばしパネルを操作した

ストライクは難なくベースジャバーに着地した

杉並「やれやれ、キリが無いな」

義之「ぼやくな杉並」

義之はエネルギーゲージを見た

義之「やばいな」

エネルギーゲージはもうすぐレッドゾーンに入る

通信が入りサブモニターに2人の女性の顔が映った

? 「義之君！ エールとランチャーストライカー持ってきたわよ！」

義之は砂浜を見た、そこには青いアストレイと赤いアストレイが居た
そして2機の間にトレーラーが2台停まっていて中に予備のエール
とランチャーストライカーが収まっている

義之「更識大尉！ 織斑中佐！ ありがとうございます！」

更識楯無大尉は青いアストレイとブルーフレームに搭乗している

女性で、ちょっと不思議な頬れるお姉さん

赤いアストレイとレッドフレームに搭乗しているのが織斑千冬中
佐で、織斑中佐は黒髪が腰に届くほど長く、厳しいが面倒見が良い
義之「杉並！」

杉並「うむ！」

杉並はベースジャバーを砂浜の方向に飛ばした

砂浜に着くと義之はソードストライカーをパージした

ストライクがソードストライカーを外すと色が鮮やかなトリコロールから鉄灰色に変わった、どうやらフェイズシフトがダウンしたようだ

フェイズシフト装甲は一定の電圧を通電することで無重力下で精製した合金が相転移して実弾及び実体剣に対して絶大な防御力を発揮する画期的な装甲で通電する電圧で色が変わる、ストライクの場合

は赤青白の所謂トリコロールである

そして義之はランチャーストライカーを装備した

そうすると装甲がまたトリコロールに戻った

各種ストライカーパックには小型の予備バッテリーが内臓されてい
る、その為にストライカーパックを装着すれば戦闘可能時間が延長
でき、尚且つストライクのバッテリーが切れても戦闘が可能になる
のだ

ストライクのエネルギーゲージが安全域まで回復したのを確認した
義之は左背中に装備されてる巨大な火砲、対艦砲「アグニ」を構えた
左前方では橘菊理の搭乗したスターが、350mmガンランチャ

ーと94mm高エネルギー収束火線ライフルを直結させたビーム砲、
超高インパルス長距離狙撃ライフルを構えて連射している
義之「菊理大尉！援護します！」

そういうと義之はアグニを構えて連射して、上空や遠くにいるドラ
ゴンを撃墜していく

そうやって撃ち続ければ、レーダーに巨大な反応が現れた

菊理「あれは！」

伊隅「くつ！<ギガントス>か！」

ギガントスとはタイタンの中で一番大きいサイズで最大で80メー
トルを超える

菊理「義之君！」

義之「はい！合わせます！」

義之は菊理の考えに気づいてギガントスの頭に狙いを定めた

義之&菊理「いつけ————！」

2門の火砲が同時に放たれ、2本の火線はギガントスの頭を貫いた
ギガントスはゆっくりと倒れて、でかい水柱があがつた
と同時にストライクの右側に10数体のタイタンが海中から現れた
義之「間に合え！」

義之はストライクをタイタン達の方向に向かせ右肩に装備されてる
120mm対艦バルカンと350mmガンランチャーを撃つた

義之「ギリギリ間に合つた・・・」

現れたタイタンはただの肉塊に変わっていた

伊隅「各機状況を報告しろ！」

杉並「バッテリーがもう持たんな・・・」

まゆき「あたしもバッテリーも無いし、ミサイルにグレネード、レ
ールガンの弾も無い・・・」

菊理「すいません、私もです・・・」

伊隅「くつ！私もバッテリーが無いな・・・」

義之「俺はエールストライカーが残つてるのでまだ行けます！」

更識「あたしはまだ行けるわよ！」

千冬「私もだ！」

それを聞いた義之は1つの決断をした
義之「伊隅隊長！まゆき先輩に菊理大尉、杉並は補給に戻つてください！ここは俺達が引き受けますから！」

全員「「「！」」」

義之「ここは俺と更識大尉に織斑中佐で抑えます！ですから早く！」
まゆき「無理だよ弟くん！5機でようやく抑えられたんだよ！？」
機だけなんて！！」

千冬「大丈夫だ、既に頼りになる援軍を要請してある」と同時にレーダーに反応が現れた、方向は真後ろ軍事式に立つて時の方角から高速で接近する反が2機有った

伊隅「援軍か！」

伊隅は振り返つて確認した、現れた機影は黄金色のアストレイと紅いストライクだった。

義之「神宮司中佐！それに草壁大尉！」

黄金色のアストレイことゴールドフレームに搭乗しているのは神宮司まりも中佐で、厳しくも優しい頼れる人物

紅いストライクことストライク・ルージュに搭乗しているのは草壁美鈴^{くわさか}大尉で、リーダーシップがありカリスマ性溢れる女性つまりも「待たせてすまん！」

美鈴「皆待たせた！」

千冬「伊隅少佐ここは我らが引き受ける！義之大尉の言つ通り補給に向かえ！」

伊隅「しかし！」

千冬「いいから行け！これは上官命令だ！」

伊隅「了解しました、御武運を・・・！」

伊隅みちる少佐達は後ろ髪を引かれる思いで戦線を後にした

千冬「さて、義之大尉あれ程の事を言つたんだ、貴様の活躍見せて貰うぞ？」

義之「了解！して織斑中佐その刀は？」

義之はレッドフレームの腰に装備されてる刀を聞いた

千冬「ん？ああ、これは私が頼んで作ってもらつた対艦刀ガーベラ・ストレートだ」

義之「直訳すると菊一文字ですか、かつての名刀の名前ですね」

千冬「私は刀のほうが慣れてるのでな」

義之「なるほど」

千冬「さてと、無駄話はここまでだ来るぞ！」

義之は愛機ストライクの向きを海の方向に向けた、海中から次々に現れるタイタンに、空を飛ぶ数10体のドラゴンがメインモニターに映った

まりも「織斑中佐どう対処しますか？」

千冬「私と義之大尉でドラゴンを処理する、神宮司中佐は草壁大尉と更識大尉を率いてタイタン共を」

全員「――了解！」

義之「桜内義之、ストライク行きます！」

そう言うと義之はストライクのスラスターを全開にしてドラゴンの群れに突撃した

尚この戦いは1昼夜続き、その戦闘の激しさから後に「初音島攻防戦」と呼ばれるようになり、この時の戦闘データはシユミレーターに使われパイロットの育成に大いに貢献したのである。

そしてこの戦いから約4ヶ月後の新太陽暦71年12月末世界中でタイタンの全滅を確認、タイタン戦争は多大な犠牲を払い終結したのであった。

これは、1年中桜^{しゃく}が咲く不思議な島^く初音島^{はつねじま}への少年少女達の、交錯する思いと道標^{じみ}、そして戦争と言つ非日常と日常が入り乱れるなかで強く逞しく生きていく物語である。

2年前の戦い sides Y（後書き）

もう一回言いますが、遅くなってしまい大変申し訳ありませんでした！（土下座慣行）言いますと書いてたのを間違つて消してしまったのが原因ですばい

さてようやく義之が登場しました、因みに沢井麻耶が恋人なのは作者の好みです！
異論は認めん！！

それぞれの始まり前編（前書き）

駄作者の第3話で「」や「」

それぞれの始まり前編

? 「はあはあはあ」

広大なグラウンドを走る一つの人影

身長は約180cm、髪は耳が見えるあたりで切ってあり、顔立ちはかなり丹精でイケメンと言える

青年はどうやら目標周を走り終えたのか、ゆっくりとペースを落としいき立ち止まり膝に手を置いた

? 「はあはあはあはあ・・・」

青年は汗を拭きながら乱れた息を整えてから空を見上げた
空には満天の星空と三日月が見えた

? 「む？ そこに居るのは土見か？」

土見稟は後ろに振り返ると、そこに居たのは膝まで届く髪を後ろで纏めてポニーtailしている長身の少女が居た

稟「ん？ ああ、御剣か」

その少女の名前は御剣冥夜みつるぎめいやと言い、凛という言葉が似合う少女だ

稟「今日は晚かつたなどうした？」

冥夜「・・・・・武たけるにすっぽかされた」

冥夜は不機嫌そうに言つた

武と言うのは冥夜と同じ207訓練部隊に所属する訓練生だ。名前は、白銀武しろがねたけると言う

因みに御剣冥夜と白銀武は恋人である

そして稟は206訓練部隊だ

稟「はは、それはご愁傷様」

冥夜「土見はあがりか？」

稟「ああ、ノルマはクリアしたからな」

そつ言うと稟は星空を見上げて

稟「もうすぐだ」

冥夜「なにがだ土見？」

稟「ああ、総合戦闘技術演習がさ」

冥夜「ああ、そうだな」

?「む？そこには稟に冥夜か」

稟「ああ、ほつわ 篠か」

篠とは208訓練部隊に所属している女の子で、冥夜と同じように凛と言う表現が似合う子で名前は、篠ノ之篠しののむらわ と言う、膝辺りまで伸びてゐる綺麗な黒髪を後ろでリボンでポニー テールにしているのが特徴だ

稟「一夏はどうした？」

一夏とは篠と同じ208訓練部隊に所属している訓練生で名前は織おり 斑いも 一夏らいしゃ と書つ

篠「一夏ならもうすぐ来るはずだが・・・」
と宿舎のほうから

?「おわ――――――――!？」

稟「この声は一夏？」

宿舎の方向を見ると、件の一夏を逆さづりの状態で見つけた

?「ふつ！その程度では私の嫁になれんぞ一夏！」

そして逆さづりの一夏の前に身長150cmくらいの銀髪が腰に届くくらいで左目に眼帯を着けた小柄な少女が居た

一夏「ラウラ！だから嫁じゃなくて婿だ！つか降ろせ！――」

どうやら、同訓練部隊のラウラ・ボーデヴィッヒが仕掛けた罠に一夏が引っかかつたらしい

まあ、ラウラは元J-EI軍の特殊部隊の隊長だから仕方ないかもしがれないと

稟「ラウラが来てもう3ヶ月か、だいぶ馴染めたみたいだな」

篠「ああ、最初は緊迫した雰囲気だったがな、今では大切な仲間であり友だ」

冥夜「しかし、最初来た時は驚いた、なぜ現役の隊長が来たのかとな」

稟「ヨーラシア連合がJ-EIを攻め落としたんだったな・・・」

J E Iとは、日本帝国とE Iの軍事同盟の名前である

? 「ちょっと！？一夏の悲鳴が聞こえたけどって、一夏！？」

一夏「シャルか！？助けてくれ！！」

見ると逆さづりの一夏とラウラの近くに金髪をショートカットで纏めた、エメラルドの瞳に中性的な顔立ちの美少年とも言える美少女が居る、名前はシャルロット・デュノアと言つ

シャル「ちょっと、ラウラ一夏を降ろしてあげて！」

どんどん騒がしくなつてきている

稟「やれやれ、助けてやりますか？」

稟は両隣に居る人物に聞いた

冥夜「うむ」

第「そうだな」

稟の言葉に冥夜と篝は苦笑いしながら従い、騒いでいる一夏達の方向えと走った

稟 side END

? ? ? side

ここは軍施設の地下にある、とある人物の執務室だ

その部屋には一通りの応接セットと木製のそれなりに大きい机があつた

しかし、木製の机の上には書類が山の様に積まれていて処理済よりも処理待ちのほうが圧倒的に多い

そしてその机に一人の男が突っ伏していた

と書類の間にあつた電話が鳴つた

男はうつ伏せのまま受話器を取つて

? 「はい、どうした麻耶？」

どうやら相手は専属秘書であり恋人の沢井麻耶らしい

麻耶「義之、伊隅中佐と高坂中佐が来たわよ」

義之はそれを聞くと体を起こし、片手で髪を軽く整えながら

義之「通してくれ」

と言い受話器を戻したら空気が抜ける様な音がしながらドアが開くと、そこには2人の女性が立っていた

伊隅＆まゆき「失礼します！伊隅みちる及び高坂まゆき両中佐出頭しました！」

と2人はドア付近で敬礼しながら言つて、部屋に入ってきた
義之「はい、ご苦労様です、と言つか敬礼はしないでいいって言いましたよね？」

伊隅「やはり軍人としては当然ですから」

まゆき「そういうことだよ弟くん」

と言いながら一人は応接セットの近くまで歩く

義之も二人とは反対側のソファーアに座つてから、二人にも座るよう
に促した

義之「で今年はどうかな？」

伊隅「今年は大漁ですよ、大佐」

まゆき「選別に手間取っちゃったよー」

と言いながら一人は脇に挟んでいたファイルを取り机に置いてから
開いた

そこには30名ばかりの顔写真とプロフィールと成績が書かれた書
類があつた

伊隅「それでは我々が選んだ候補です」

まゆき「じゃあ名前を言つね、まずは206訓練部隊隊長の、涼宮
茜、次に同部隊副長の」

すずみや
あかね

伊隅「そして最後に210訓練部隊のライラ・フリードリヒで以上です」

義之は机の上に広げられた書類を一枚ずつ見ながら

義之「ふむ、今年は本当に大漁だな」

まゆき「まあ、210は元JEUの特殊部隊だから当たり前だけどね」

伊隅「そして、神宮司及び織斑両教官の推薦人物も高い成績を保持しています」

義之「どれどれ？・・・なるほど高いな」

まゆき「207の各員は各分野に別れて高いけど、とくに白銀訓練生がズバ抜けて高いねー」

伊隅「208はコンビネーションがズバ抜けてますね」

義之「ふむ、流石は2大教官が育てただけあって、他の訓練生よりは高い成績だな、ん？」

伊隅「どうしました？大佐」

義之「この御剣つてあの？」

まゆき「そ、あの御剣財閥の子だよ、しかも直系の、備考見てみなよ」

義之「あの御剣財閥の令嬢がなんで居るのか知らないけど、まあ優秀ならば選ぶぞ」

伊隅「たしかに、そうですね今我々には早急に戦力が必要ですからまゆき「で、意外なのが、神崎教官長が推薦を出してるのよ」

義之「え？あの神崎教官長が？」

神崎とは本名神崎恭一郎^{かんざききょういちろう}といふ。一郎と言い、昔は傭兵として世界中の戦場を渡り歩いた豪傑で、歳は40後半で髪型はオールバック、ヒゲを生やしていて常にサングラスをかけている見た目は所謂ダンディーなオッサンなのだが、性格に難があるそれは、「他人の不幸ほど楽しい事はないね！」と笑って言う人物で、彼を良く知るK氏は度々こう

三つ「いつペん殴りたい」と

閑話休題

伊隅「それがこの訓練生です」

義之「206の土見訓練生か、・・・・あれ？」

まゆき「どうしたの？弟くん？」

義之「なんか見覚えがあるなーと、どこだったかな？」

伊隅「?、そうですか、しかしこの訓練生平均して成績はA判定ですね」

義之「ほんじゃま、俺達で試しますか？」

伊隅「試すって、格闘技能ですか？」

義之「決まってるでしょ？俺達に最も必要な技能だよ

義之はそのままいながら口端をあげた。

それぞれの始まり前編（後書き）

まず先に、遅れてしまい申し訳ありませんでした！！orz

ちょっとPCの調子が悪くてなかなか上げられませんでした！！
次回も少し遅れるかと思います、会社の書類がヤバイ・・・・。
だけど挫けません！！

皆さん何かアドバイスなどがありましたら教えてくださいーーー！

それぞれの始まり後編（前書き）

懐が寒いです、出費が痛いぜ！

理由は自転車が誰かにパンクさせまくられてるからです！

既に2回チューブを交換しましたよ・・・・・

犯人見つけたら、無事で済むと思うつなよ！（怒）

それぞれの始まり後編

? side

? 「はあはあはあ・・・、く！」

狭いコクピットの中1人の少女が悪態を吐くのを堪えながら操縦桿を握っている

目の前のモニターには6眼の醜い巨人達の死骸が横たわっている

? 「何体倒せば終わるのよ！」

そう少女が叫んだ瞬間だった

? 「え！？なに！？」

コクピット内に警告音の大合唱が鳴り響いた

? 「どこから！？」

と田の前にあつた死骸の山が突如膨れて吹き飛び、その下から手負いの巨人が手に大剣を持って現れた

? 「しまった！仕留め損ねてた！！」

突然のことには少女の反応は遅れたが

? 「く！この――――！」

少女は機体の右手に保持していたビームサーベルで反撃しようと振り回したが

突然目の前に居た巨人の振り下ろしていた大剣がピタリと止まり、モニターと室内灯が消えてコクピット内が赤くなり、モニターには、致命的損傷により戦闘不能・・・シユミレーター終了の文字が映った

? 「だ――！もう！―また負けた！――！」

少女はヘルメットごと頭を抱えて叫びながら、シユミレーターから出た

少女は出るとヘルメットを脱いだ、その途端に腰より少し長い位まで伸ばしてあるツインテールが現れて、その少女のトレードマークでもある髪留めの鈴が鳴った

? 「うーん、あれは反撃じゃなくて回避するべきだったかな？」

と呴くと空氣が抜ける様な音が聞こえて

? 「あ——！こんなとこにおつた、モーアスナ！！」

とアスナと呼ばれた少女、本名、神樂坂明日菜は声のした方向に振り向くとそこには2人の少女が居た

明日菜「あれー？木乃香に、刹那さんじやんどうしたの？」

こちらに駆け寄つてくる人物のは1人は髪は黒く腰位まで伸びて、ほんわか雰囲気の大和撫子と呼べる少女で名前は、近衛木乃香と言つ

もう1人は右肩に担ぐ様に竹刀袋を持った少女で前髪は右側だけあり後ろの髪は左側に纏めた少女で、木乃香とは違つた印象の凛とした大和撫子と言える少女と言える、名前は、桜咲刹那と言つ

刹那「どうしたの？ではありますよ明日菜さん」

木乃香「ネギくんが捜しとつたで」

明日菜「ネギが？なんで？」

因みにネギとは彼女達の教官の1人の本名ネギ・スプリングフィールドのことである、詳細はまた別の機会に記す

刹那「明日菜さんだけ、今日の模擬戦のレポート出してないんですよ」

明日菜「ヤツバ！忘れてた……今何時！？」

木乃香「もうすぐ7時やよ」

明日菜「急いで戻らないと！ご飯も食べられないじゃん！？」

食欲が先にでる辺りは、やはり花の10代乙女だからか・・・

先にレポート書いてやれよ・・・、ネギ君泣くぞ？（作者）

刹那「だから呼びに来たんですよ、急いでください！」

明日菜「ちょっと待つて！今シユミレーターの電源をスタンバイモードに切り替えるから…」

そう言つて明日菜はシユミレーターのコンソール画面のキーボードを叩いてシユミレーターの電源をスタンバイモードに切り替えた

木乃香「ほら！アスナ急がんと間に合わへんよ！」

刹那「書類書くのも手伝えますから急いでください！」

明日菜「ありがとう刹那さん！」

いいのかなそれ・・・（作者）

明日菜「ん？」

木乃香「どしたんアスナ?」

明曰「菜々今誰かにツバキをねたぬいな……？」

「いいから行きまよ！ 急いでください！！」

田村喜久子著『カーネギーが教える成功の法則』

明田菜「うらん」

明日菜は走りながら、唸つていた

刹那「どうしました、明日菜さん？」

明日菜「ニヤー、やつぱりちゃんとまさに精通した教官が居ないと

厳しいなーつて

刹那「そうですね、いくらネギ先生でもMSは無理みたいでしょ」

明日葉へ「ん詰か良い教育居なしかな?」

三人はそれを証したがて走っていく

3 時間かかってノートを書き上げた

? 「はい、確かに受け取りました」

明日菜「良かつたー、間に合つた上

そう言つて明日菜は田の前の椅子に座つてゐる10歳くらい

い眼鏡をかけステッツを着た少年に謝つた、その少年が明日菜達の教

官の1人である、ネギ・スプリングフィールドだ

未だ・してして
たに

田中某 な なに

第三回

明日菜はついで誰にも言わないでショーナーター訓練をしていた

九二

明日菜「うーんー、で話は変わるナビネギ?」「

ネギ「はい、なんですか、明日菜さん？」

明日菜「MSの訓練なんだけど、やっぱり教官が必要だと思つたんですよ」

明日菜「え？ 月詠さんと？」

ネギ「はい、そうしたら手配してくれると言つてくれました、ついでにMSもどうにかすると」

明日菜「本当に！？ やつた！ 私のリーオーもうボロボロだったから助かるわ！」

明日菜達のMSは前大戦終結後に各戦場跡から回収したジャンク機体をレストア《再生》した機体の為に安定稼動できず尚且つ機種もバラバラなのだ、最低でも中古機体でも機種を統一したいところだ尚、明日菜が搭乗しているリーオーは前大戦時にN・A・U《ネオアメリカ連邦》が開発した機体で操縦性は高い機体で、今尚、N・A・Uでは改修した機体のリーオーMK？《リーオーマークツー》が運用されている

ネギ「それで、僕が選んだ場所はここの人には頼もうかと打診しました」

そう言ってネギが一枚の写真を出した、そこには桜色染まったの三日月型の島が写っていた

明日菜「ここって初音島？」

ネギ「はい！ ここは世界で初めてMSを作り投入した国ですから、優秀な教官か軍人さんが居るはずです！」

明日菜「私の印象に残つてるのはストライクかな？」

ネギ「初音島の英雄の守護神さんですね？ なんでも明日菜さん達と年齢はそう変わらないみたいですよ？」

明日菜「ええ！？ それ本当なの！？」

ネギ「はい、一度会つてみたいですよねー」

ネギが眼を輝かせながら喋つたのを見た明日菜は微笑みながら

明日菜「もしかしたら会えるかもね？」

そう言つて教室を退出した・・・

明日菜 side END

? ? ? side

? 「いつてきまーす」

そう言いながら私は玄関のドアを閉めた

朝7時45分、空は快晴

私の名前は、八重 桜風見総合学園普通科高等部2年C組に通っています

ここ初音島に来て約2年、最初は1年中桜が咲いていたことに驚いてました

私が住んでるのは複数あるメガフロート島『人工島』の1つの通称「居住島」にある光陽町です、と言つてもこの光陽町は2番目の光陽町で、本物の光陽町は2年前の「タイタン戦争」で滅んでしまいました、その後で初音島の大統領さんが私達、光陽町の住民を受け入れて引越ししました、初音島の大統領さんの名前は、芳野さくら『よしのさくら』さんとります、見た目は10代くらいなんですが、幾つもの博士号を持つ優しい人で、優しい金色の髪をサイドアップテールにしていて碧眼が特徴の人物で、なんと私の通う風見総合学園の学園長でもあります。

? 「ああ、八重おはよう！」

桜「おはよう、美夏ちゃん！」

私に挨拶してきたのはクラスメイトの、天枷美夏ちゃんです。

いつも牛柄の帽子をかぶっているのが特徴で、今は風紀委員長をやつっていて、気が強いんですけど素直で優しい、いい子です

美夏「一緒に学校に行こう」

桜「はい」

そう言つて私達は、モノレールの駅に向かつて歩きだしました。私達は他愛無い会話をしながら駅に着いて、モノレールに乗り3駅乗つたら駅から降りて、次は電動無人バスに乗つて15分後に目的地に着いたので降りるとバス停の田の前にあるのが風見総合学園です、なんと全生徒数が、初等部、中等部、高等部、大学部合わせて合計1万人超えという超マンモス学校です

私達は門の所に居る守衛さんに挨拶して、下駄箱で上履きに履き替えながら

桜「そういえば、美夏ちゃんと由夢ちゃんは桜武おうぶに所属してるんだよね？」

美夏「ああ、詳しい所属は機密だから言えんが、美夏はMSパイロットで由夢は衛生班だな」

ちなみに由夢ちゃんとは、クラスメイトの朝倉由夢ちゃんのことです。髪型はショートカットで頭の両側でお団子、所謂シニヨンが2つある子でクラスでも保健委員に所属しています
そして教室の前に着いて私が教室のドアを開けようと手を出そうとしたら

美夏「待て八重！」

美夏ちゃんが私の腕を掴みました

桜「？」

私が振り向くと、美夏ちゃんがジェスチャーでドアから離れるというので、離れたら美夏ちゃんがドアに近づいて

美夏「す——は——」

と深く深呼吸してからドアを一気に開けました、その瞬間

?「おはよう！桜ちゃん！よし！」そ俺様の

美夏「ふん！」

と美夏ちゃんは教室の中から飛び出してきた眼鏡をかけた男子に対しても見事に腰の入った右パンチ、所謂右ストレートを放ちました

?「ぐふ！！」

美夏ちゃんの右ストレートは教室から飛び出してきた眼鏡をかけた

男子、緑葉 樹君の腹部に凄い音と共に直撃しました

美夏「相変わらず懲りないな緑葉、それならば・・・麻弓ーー」

と美夏ちゃんが教室の中に向けて呼ぶと

? 「委細合点承知なのですよー！」

と教室内から聞こえたので教室を覗くと、そこには右目が赤で、左目が青のオッドアイが特徴の子が居ました、その子が本名、麻弓＝

タイム『まゆみ』たいむ』ちゃんです

そして麻弓ちゃんは何処からか縄を取り出して

美夏「ふん！」

樹「げふ！」

美夏ちゃんは緑葉君を蹴り上げて

美夏「はーー！」

樹「ハはー！」

更に、麻弓ちゃんに向けて蹴り飛ばすと

麻弓「麻弓ちゃん流縄縛術！ 第27弾！ー！」

と叫ぶと緑葉君が一瞬にして縄でぐるぐる巻きになりました

樹「新しい世界が見えるーー！」

そのまま縛った状態で吊るすと

麻弓「エリカちゃんーー！」

と後ろ、要するに窓の方向を向き叫ぶと、窓際にスタイルの良い腰位まで伸びた金髪と碧眼が特徴の子が居ました

この子の名前はエリカ・ムラサキちゃんと言い、なんでも東欧生まれのお姫様なんだと聞きました

エリカ「準備OKですわーー！」

といつの間にか窓が全開になつていて

麻弓「美夏ちゃん！」

と麻弓ちゃんが呼ぶと

美夏「うむー！」

と2人同時に飛び上ると

「クラスメイト一同」「「「「麻弓に美夏ちゃんにぶちかませ……」「」」

とクラスの皆（私に麻弓ちゃん、美夏ちゃんとエリカちゃんを除く）
が叫ぶと

美夏＆麻弓「必殺！ライジング・インパクト！…！」

2人で緑葉君を窓の方向に蹴りました

樹「「ふあ…！」

という声を残して緑葉君が窓の外に蹴り飛ばされたら

エリカ「ゴミ掃除完了ですわ！」

と言いながら窓をピシャリと閉めました（外では緑葉君が下に消えました）

桜「流石にやりすぎなんじゃ……」「

と私が苦笑いしながら言つと

美夏「何を言つ八重！」

麻弓「あれくらいやらないと緑葉君は止まらないのですよ…！」

エリカ「その通りですわ…！」

と3人が力説しました

桜「あははは…」

私は苦笑いしながら自分の席に座ると

麻弓「そういえば、さつちゃんこのクラスに転校生が来るらしいのですよ、しかも3人も！」

桜「ふーーん、転校生ですか…」

私はその麻弓ちゃんの言葉を聴き、窓の外を見ると

桜（稟くん、稟くんは今何処に居るんですか…？）

1年以上音沙汰もなく、会つていな幼馴染であり、想い人である人物を思いました

それぞれの始まり後編（後書き）

皆様駄作による続編です

悲しい事に未だにコメント数〇です！

誰でも構いませんから、何卒コメントや指摘、

レクチャー等々あり

ましたらお願いします！（下座敢行中）

おまけ1～10大騒動（前書き）

とりあえず思いついたので書きました

おまけ1 VIP大騒動

? side

? 「なんでこうなった……」

俺、桜内義之は現在起きている現象に情けない声しか出せずに居た

? 「誰にもこんなこと予想できないわよ、義之……」

そう言つてくれたのは隣に居る俺の副官であり恋人である、沢井麻耶である

義之は目の前に居る人たちを見る

? 「おいこら！さくらんぼ！なにがどうやつたらこうなるー？」

叫んでいる人物は見た目は自分と同い年くらいの青年だが着ている服は軍服で襟についてる階級証は大總統を示している

? 「うにゃーーー、そう言われたつて……」

そつ言つてるのは金髪ツインテールで碧眼が特徴で見た目はあいかわらず10代前半の人物にしか見えない芳野さくらだ

? 「そ、う、よ、さくらちゃん！なんで皆若返つてるのよー！」

そつさくらに詰め寄つてる人物は見た目は、由夢に似ているが首に猫がつけるような鈴が着いている、見た目は同年代の女性だ

義之「まあまあ、落ち着いてくださいよ、純一さんに、音夢さん」

そう曰の前に居る俺と見た目同年代の人物は、
と朝倉由夢の祖父と祖母にあたる人物である、朝倉純一さんとその奥さんである、朝倉音夢なのだ

義之「はあ・・・・」

俺はため息を吐きながらこうなつた理由を思い出してみた

回想今から數十分前

始まりは今日の仕事が終わりたまたま帰りが純一さんと同じになつたところからだ

純一
なんだ、
義之が上

義之「おや純一さん、仕事ぢやんと終わらせましたか？」

純一「お前ワシをなんだと思つてゐる?」

義之「かつたるいが口癖の我らが上官です」

純一「かつたるい・・・・・」

言つたそばから言つたよこの人・・・・

義之がそう呆れていると

麻耶「義之、車が用意できたわよ、つて純一大總統閣下！」

と麻耶は慌てて純一さんに敬礼した

純一「だから、敬礼はいらないと言つただろ・・・

純一さんは呆れながら言った、そうこの人物はかつたるいからと儀

式や祭典以外はあまり敬礼や敬語をさせないのである

義之「純一さんも車に乗りますか?」

純一「おじいちゃんが」と

心の声一 おじいさんが微笑みながらの声の

政治小説の歴史

卷之三

卷之三

麻郎は無人島にいた

廣島に無電氣の街が出来たので、不

ノルマニヤ

義之たちは守衛に挨拶して、受付係りにさくらさんの居所を聞いて

確認して廊下を進んだ

トニーが見えた

詩經卷之三

アントニオ・ダ・コッリ

卷之三

「タメ！ タメ！ タメ！」

とさくらさんが叫ぶ声が聞こえた途端だつた

カツ！！ともに凄い光が溢れ

麻耶「眩しい！」

義之「麻耶！」

俺は反射的に麻耶を庇つた瞬間

ボン！！と爆発がした

義之「ゲホ！一体なにが？」

と俺は研究室のほうを見た

さくら「ケホケホ・・・、みんな大丈夫？」

義之「俺と麻耶は大丈夫です！」

俺は腕の中で真つ赤になつて固まつている麻耶の無事を確認してから言つた

義之「純一さん！大丈夫ですか！？」

さくら「お兄ちゃん、大丈夫？！」

と先ほどまで純一さんが居た場所を見る、最初は煙で全然見えなかつたけど少しすると晴れて、そこに居たのは・・・。
？「げほげほ・・・、義之お前俺じやなくて恋人を守つたな？」

義之「・・・・え？」

麻耶「・・・・・はい？」

自分と同い年くらいの青年だつた

義之「えつと・・・・・どなた？」

とりあえず俺は聞いてみた

？「え、誰つて俺は朝倉純一だが・・・・・つてなんだこれ？」

目の前に居る青年は自分の体をみて驚いている

さくら「けほけほ・・・えらい目に・・・つてお兄ちゃん！？」

さくらさんは目の前に居る青年を見て驚いたように言つた

麻耶「お兄ちゃんつて・・・ええ！？まさか純一大總統閣下！？」

義之「なに！？」

流石の俺でも驚いた、だつて目の前に居るのはどう見ても同じ年にしか見えないからだ、とその時だつた

? 「ミステリー……………！」

と叫びながら天井の通風孔から1人の若い男性が逆さづりで現れた
純一「杉並！？お前どこから現れてるんだよ！？」

杉並だと！？そう言わると確かに杉並に見えるが、少し違和感が…

麻耶「ねえあの人って情報省の代表の杉並中将じや？」

義之「ああ、あの飄々として掴みどころがない爺さんの…え？」

そう言わると確かにあの服は情報省を現している襟が黄色だ（軍
は黒）

としているうちに旧杉並が通風孔から綺麗に着地して

旧杉並「ふ、ミステリー有る所に、この俺アリだ！！」

ああ、杉並は何処まで行つても杉並だと納得してしまつ言葉だ、と
次に

後ろのドアが開いた

? 「朝倉君！これはどうなつてるんですか！？」

と現れたのは赤い髪が膝くらいまで伸びている若い女性

純一「ことりまでか！？」

ことりだと？まさか…

麻耶「ことりって、あの白河プロモーションの白河ことり社長！？」
やつぱりね……と俺が半ば思考停止しかけた時

? 「朝倉！これはどういうことだ！？」

と現れたのは和服を着た髪がショートカットの和式美人だった
ことり「叶ちゃん！？」

叶だと？

麻耶「今度は内務省の工藤叶大臣！？」
もうどうにでもなれ……と思つたら

? 「朝倉！これはどういう事よ！」

とショートカットの勝気な女性と

? 「朝倉君！？どうなつてるんですかー？」

とちょっとオットリした女性が現れた

純一「眞子に萌先輩！？」

今度は誰よ

麻耶「水越総合病院の水越萌院長に水越眞子副院長まで…」
VIPばかりだな…

？「朝倉様！これは一体！？」

と今度は巫女服の女性が来た！？

純一「環！？」

その名前は確か…

麻耶「今度は、湖ノ宮神社の代表さんまで…」

若干一般人寄りだな…（かなり失礼）

？「朝倉さん！なんなんですかこれは…？」

？「なんで若返ってるんですか！？」

と清楚な服を着た頭にリボンを着けた女性とメイド服を着た女性が
さくら「うにゃ！？美咲ちゃんに、明日美ちゃんまで！？」

その2人は確か…

麻耶「鷺沢輸送会社の会長にその侍従長さんまで…」

と次に

？「朝倉先輩！何が起きたんですか！？」

と犬を連装する元気な人物が

純一「うお！？わんこ！？」

わんこ？

さくら「うにゃ！？美春ちゃん！？」

その名前は…

麻耶「天枷研究所の副所長まで…」

こここの副所長かよ…

？「あわわわ！？朝倉君なんですかこれは…？」

と眼鏡をかけた、ちょっと落ち着きのない女性

純一「うをう！？ななこか！？」

ななこつてたしか…

麻耶「初音島最大の雑誌社の桜花講談社の社長さん…？」

あー、あの元作者さんか

? 「先輩・・・・・! ?」

と今度は小柄な人形みたいにかわいい人が

純一「アリスか! ?」

もう驚かないよ・・・

麻耶「月城財閥の代表さん・・・・かわいい（ボソリ）」

ん? 麻耶? 今なんて言いました?

そして、最後に

? 「兄さん! どうなつてるんですか! ?」

と現れた人物を見て俺は

義之「え! ? 由夢! ? ・・・・じやない?」

見た目は由夢に似ているが、お団子頭じやないし何より首に鈴が着
いてる

純一「音夢! ?」

さくら「音夢ちゃん! ?」

なんですか?

麻耶「国境なき医師団代表の、朝倉音夢さん! ?」

どうやつて来たんだ?

純一「お前確かにパキスタンに行つてたんじゃー! ?」

音夢「仲間に頼んでジェット機で送つてもらつたんです! ー・
ああ、脇に抱えてるパラシユートがそつか

麻耶「なんで全員若返つてるの・・・・?」

そんなの俺が1番知りたいよ

で始まりにいたるわけで

さくら「うにゃー、とりあえず! 」「じゃなんだし家に行こつか?」

とさくらさんが言つたので

芳野家に全員集合したら

義之「流石に狭いな」

いくじら広い芳野家とはいって、10数人は狭い

純一「で、なんでこうなったのか説明しろ、さくら」「うそ……それはね僕が作った魔法薬が原因なんだ……」

全員「…………魔法薬?」「…………」

なんじやそりや?

さくら「簡単に説明すると魔法の力を強める薬なんだ」

音夢「なるほど……」

さくら「で、あの時僕は昔を思い出して、懐かしいって思つてたから、多分だけど魔法の桜が願いを叶えて」

純一「それを、その魔法薬が強くしたってことか?」

さくら「うん……」

うーーむ、これぞ

旧杉並「摩訶不思議だな」

音夢「で、何時戻るの?」

確かに気になるなそれは

さくら「うにゃ——、それがね……わからないんだ」

全員「…………なに――――――!」「…………」

鼓膜が破ける!

さくら「だつて、こうなるなんて予想してなかつたんだよ―――。まあ出来てたら凄いな

麻耶「では、どうするんですか?」

さくら「とりあえず、戻れるよひまじしてみるねばど、今日は眞家こ

泊まつてね?」

純一「ま、仕方ないな」

音夢「こんな姿じゃ戻れないしね」

全員「…………お世話になりますー」「…………」

さくら「それじゃあ、ご飯にしようか

そう、さくらさんが言つたので

義之「そんじやま」

「私達が作つてきますから、待つてください」

母子體一編

で2人で作つて

全員「 「 「 「 「 いただきま す」 「 「 「 「 「

ご飯を食べて

順繰りに風呂に入つて

部屋に布団を敷き

卷之三

「今田は彼へ」

麻耶「そうね・・・」

俺達も寝ました

三

義之「足跡さん起きてください」

俺は驚いた、だつて

麻耶一元に戻る・・・・

そへ全員もとの姿は房へてゐんたよ

— もぐらー もぐらー、 過性だつたみたいだね。 良かつた——

全員元の職場や家に戻りました

E
N
D

おまけ1▽IP大騒動（後書き）

つてことで、思いつきで書きました、因みに紫和泉子と霧生香澄は都合により出せませんでした。

2人のファンの方は申し訳ありません！（土下座敢行）
だって幽靈と星に帰った宇宙人なんてどないセーと…？
ではここからは

あとがき「一ナーダゼ！」

作者「はい、始まりました、あとがき「一ナーナーです、司会は俺、作者の京勇樹と」

雪音「田原雪音でお送りいたします」

作者「この「一ナーナー」は皆さんからお送りいただいた、要望に答えます！」

雪音「まだ1通も着てないけどね」

作者「ぐはー？それは言わないで！悲しいからー！？」

雪音「では本日のゲストはこの方ー！」

さくら「どうもー 芳野さくらでーすー！」

作者「なんか無視されたけど、どうせやつらが、これを読んでください」と

さくら「うにゃ？」これと言ひの？

雪音「はい、お願ひします」

さくら「わかった ではではー」

と深呼吸するさくらさん

さくら「全力！全壊！（誤字では無い）ディバイン・スター！！」

カツ！

作者「マジで！？」

背後についた壁に穴が開いた！？

雪音「本当にににににが出たわね・・・・」
セクハラ「いやほほほほほほほほほほほほほほ

作者「まあ、次回までに直せばこいや」
「

雪音「直るのこれ?」

多分

作者「では、本日はここまで」

セクハラ「みなさん、また次回まで」

雪音「さよーならー」

要望がある方は言わせたいセツフ（番組名や本の名前も書いて）、
言わせたいキャラ名を書いてください
感想も待っていますー！

運命の分岐點～上田軍（前書き）

なんとか早く書を上げました
わざわざいつなるのか

「こゝはある軍施設の地下にある会議室
義之、さて推薦された人物についてだが」

と義之が発言した時

書類が詰まれた机の上に備え付けられた電話が鳴った

麻耶一義之外線よ？しかも直通

麻耶が電話の光てる部分を見て言った

義之一、直接とは珍しくない。

軍施設では外部の電話は一度オペレーターに繋がり、そこから各部署の各人に繋がる仕組みになつてゐる

しかも、今義之達が居る施設は特殊部

セキュリティが高い

従つてこの軍施設に直接外部から電話をかけられるのは僅か一握りしか居ない

義之は吸話器を取り耳に当てた
あくらーこ

「はい、桜内です、…………あ、さくらさんですか」「さくらとは本名、芳野さくらといい年齢不詳の金髪ツインテール、碧眼が特徴の義之の保護者で、現在は初音島の大統領だ」

「いつ」とですか！？」

義之は成績とプロフィールが書かれた書類を見てから驚いた声を上げた

室内に居る人達、ワルキューレ隊の隊員は全員頭上に？マークが出

ている
義之「はい・・・・はい、これから直接をちらに向かいます、はい

「では、」

と義之が吸話器を庚したら

? 「弟くんどうしたの？」

と聞いてきたのは腰まで伸びた髪を後頭部のあたりで大きなリボンで纏めた女性だ、名前は朝倉音姫あさくらねみと言い、なんで弟くんと呼ぶのかと言つと、昔一時期あくまでもおもかが忙しかった時期に朝倉家に預けられた為に、音姫やその妹の由夢ゆめと兄妹同然で育つたからだ、因みに由夢は兄さんと呼ぶ

因みに高坂まゆきの義之の呼称の仕方は音姫の影響である
義之「いや、それがさ、音姫おとねえよく要領がわからないから、今からさくらさんの所に行つて来る」

義之はそう言いながらハンガーフックに引っ掛けでおいた仕官服を羽織ると

義之「麻耶、悪いけど一緒に来てくれ、それと会議は中止で朝倉大佐に伊隅中佐、高坂中佐はそこ書類の処理を頼みます」

音姫「わかったよ、お姉ちゃんにお任せ！」

と音姫は胸を張りながら言い

伊隅「は！お任せください」

とみちるは敬礼しながら言い

まゆき「任せてよ弟くん」

まゆきは右手の親指を立てながら言つた

そして3人以外の隊員は解散して通常シフトに戻つた

空気が抜けるような音がしてドアが開き義之と麻耶は廊下ろうかに出て歩き出した

麻耶「それにしても、さくらさんから直接電話なんて珍しいわね？
で用件はなんだつたの？」

義之「いや～、それがさ、ほれ候補の訓練生に土見稟つみのぶつて居たろ？」

麻耶「ええ、居たわね、その訓練生がどうしたの？」

義之「それがさ、採用しても実戦部隊には入れるなって

麻耶「え！？なんで！？」

義之「そんなん俺が知りたいよ、それにくらさんもなんか困つてた様な言い方だつたし」

麻耶「困つてた？」

2人は長い廊下を歩きエレベーターに乗った

義之「ああ、だから今からさくらさんの所に向かうのさ」

麻耶「なるほどね」

エレベーターが止まりドアが開いたので2人は降りて、玄関の自動ドアを超えると

?「御2人も車は回しておきました」

そう敬礼しながら言つてきたのは、眼鏡をかけていかにも出来ます的な雰囲気の女性だった

義之「ありがとうございます、のほとけ布仏技術大尉」

その女性の名前は、のほとけつは布仏虚のほとけと言いワルキューレ隊の整備班の副主任をしている、因みに主任は麻耶だ

虚「行き先は既に入力済みですから、後は自動操縦で行きますよ」

麻耶「ありがとうございます、本当なら私の仕事なんですけど」

麻耶は申し訳無さそうに言つた

虚「いいえ、好きでやつてることですから」

虚さんは微笑みながら言つと

虚「では、お気をつけて！」

と敬礼で見送った

麻耶と義之は軍用電氣自動車に乗つて出発した

義之「あの戦いからもう2年か、大分復興したな」

義之は窓の外を見ながら言つた、あの戦いとは「タイタン戦争」のことだ

麻耶「ええ、そうね」

麻耶もそれに同意した

そして車は橋を渡り始めた

初音島は三日月型の島の周囲に9個の、メガフロート巨大人工島を浮かべている、義之達が居たのは1番端の9番島で通称「軍艦島」と呼ばれている島で、名前で分かると思うが軍事関係の施設が集中しているそして橋を渡ると義之達の視界に閑静な住宅街が入つた

麻耶「だいぶ、神族や魔族の人たちが増えてきたわね」

麻耶は窓の外を見ながらそう言った

義之「ああ、確かにそうだな」

義之も窓の外を見ながらそう返事をした

窓の外住宅街を色んな人達が歩いている、だがしかしその人達の中に耳が長い人達がちらほら居るのが見えた

麻耶「く開門事件」からもう10年たつのね・・・・・

義之「ああ、そうだね」

く開門事件」とは、今から10年前に太平洋上に存在していたとする島の遺跡に突如巨大な門が出現して、門から神族と魔族と呼ばれる人達が現れ、更に神界と魔界が存在して、その2つの世界に繋がった事件だ

しかも、その事件により今まで絵空事だと言っていた魔法の存在が実証されたのである

義之「（ボソリ）まあ、俺達は大して驚かないけどなぜ義之達は魔法に驚かないのかは後で記す

そして車はまた橋を渡つた

麻耶「もうすぐく本島」ね

義之「ああ」

初音島のく本島」とは三日月型の島をさす

周囲に2重に展開しているメガフロートは外側に軍関係と湾口が集中していく

内側のメガフロートには民間用が集中している

そして中央にある本島には初音島の政府関係と統合軍司令部、更に天枷研究所が存在している

その本島にさくらの居る大統領執務室のある施設がある

義之「純一さんはちゃんと仕事してるだろうな？」

義之は普段から「かつたるい」が口癖の自分の上官を思い出した

麻耶「大丈夫よ、やよいさんがついている筈だから」

やよいとは本名、伊隅やよい『いすみやよい』と言つて伊隅みちるの

姉だ

義之「まあ、やよいさんが居るなら平気かな・・・」

そういうしている間に目的地に到着したようで、車のドアが開いた

義之「さてと入りますか」

と義之は咳き建物に入った

受付嬢「本日はどういつたご用件ですか?」

受付カウンターに座っていた女性が聞いてきた

義之「統合軍特務隊桜内義之大佐と秘書官の沢井麻耶少佐です、芳野さくら大統領に呼ばれたのできました」

受付嬢「はい、かしこまりました、確認しますので少々お待ちください」

そう言つて受付嬢は受話器を取つて電話をかけ始めたので、少し待つと

受付嬢「はい、確認しました、そちらのエレベーターへどうぞ」

と受付嬢は右手にあるエレベーターを示した

義之「ありがとうございます」

と言つて義之が受付から離れる後ろから

「ねえ、今のつてあの英雄よね?」とか「間違いないわよ、あの守護神よ!」やら聞こえる

麻耶「相変わらずの人気者ね義之?」

と麻耶がからかう様に言つた

義之「英雄なんてガラじやないんだけどなー」と義之はため息をついた

エレベーターに乗り地下8階のスイッチを押す

エレベーターがゆっくりと地下に下りていく

そして地下8階についてドアが開くと、目の前を自身より高く書類を持ってフラフラ歩いてくる小柄な銀髪の女性が居た

義之「よつと、大丈夫かアイシア?」

?「え!?.あ、ありがとう義之くん!」

そう言つたのは見た目10代の銀髪赤目の中柄な女性だ、名前はアイシアと書く、因みにさくらと同様年齢不詳である、だが少なくとも

も純一やさくら、音夢と同い年くらいの筈だが・・・若い

義之「さくらさんの補佐ありがとうな」

アイシア「ううん、これくらいやらないと、だつて私副大統領だもん！」

そななんとアイシアは副大統領なのだ

義之「そうだつたな」

アイシア「そういうば、義之くんはどうしてここに？」

義之「さくらさんに呼ばれてきたんだよ」

アイシア「さくらに？」

義之「ああ、さくらさんはいつもの部屋か？」

アイシア「うん、そうだよ」

義之「じゃあついでに運ぶか」

麻耶「そうね」

アイシア「ええ！？悪いよ！」

義之「道すがらだし、どうせ隣の部屋なんだし、構わないさ」

そうアイシアの部屋はさくらの部屋の隣なのだ

と、その時

？「桜内さん、アイシアさんの荷物は私が持ちますよ」

と優しい声が聞こえた、声の聞こえた方向を見るとそこにはメイド服を着た物腰の柔らかい女性が居た

麻耶「あら、^{みふゅ}美冬調子はどう？」

美冬「はい、オールグリーンです」

どうしてこんな言い方かと「うと」美冬はロボットなのだ

正式名称はH M - A 0 8型 美冬^{みふゅ}といい現在初音島で広く普及しているロボット『みゅー』のオリジナルなのだ、ただしこちらは普及しているのとは違い感情モーションのリミッターが外されているので普通の人間と対応などがほとんど変わらないのである

義之「美冬さん、ありがとう」

美冬「いえいえ、それより早くさくらさんのところに行つて下せご、

大分お困りの様子でしたよ？」

義之「はい、わかりました」

麻耶「それでは」

アイシア「義之くん、麻耶ちゃん、またね」

義之達はアイシアを美冬に任せて先に進んだ
そしてしばらく歩くと田の前に木製の立派な扉が見えて扉の上には
<大統領執務室>と書いてある

義之「相変わらず立派な扉で」

義之はそう言いながらノックをすると中から

? 「あ、義之くん? 入つて入つてー」

と言ひ声が聞こえたので、義之は扉を開けて

義之「失礼します! 初音島統合防衛軍特務隊ワルキュー隊隊長桜
内義之大佐!」

麻耶「及び副官沢井麻耶少佐出頭しました!」

と2人そろつて敬礼しながら名乗つた

すると

? 「もう硬いよー2人共? いつもどおりでいいのにー」

と2人の前に金髪でツインテールそして碧眼が特徴の小柄な女性が
走ってきた

義之「これは礼儀みたいなものですよ」

麻耶「そうですよ? さくらさん」

そうなにを隠そうこの10代前半の子供にしか見えない人物こそ初
音島大統領芳野さくらその人なのだ

義之「で、あれはどういうことですか? 土見訓練生を採用しても実
戦部隊に入れるなってのは」

さくら「うにやー、それは・・・・

とさくらがしゃべりにくそうにしていると

? 「それは

? 「俺達から説明させろや」

義之は声のした方向を見ると2人の男性が居た、ただしそれは人族

ではなく

麻耶「神族と魔族？」

そうその2人は神族と魔族なのだ

義之（この2人どこかで見たような？）

義之がそう内心首を傾げていたら

？「おつと自己紹介が遅れたね、私はフォーベシイ魔界で王をやらせてもらっているよ」

と黒い服を着た、耳が異様に長く全体的に線が細い男性が言つ？「俺はユーストマだ、神界で王をやつてる、まあよろしくな」と着流し（和服の1種）を着たガタイのいい魔族ほどではないが耳の長い男性が名乗った

義之「自分は初音島統合防衛軍特務隊ワルキュー隊隊長桜内義之大佐であります！・・・・・え？」

麻耶「私は同部隊の副官沢井麻耶少佐であります！・・・・・え？」

義之＆麻耶「えええ――――――――――？」

2人は敬礼した状態で驚いた

義之（そうかこの2人資料で見たんだつた！）

麻耶「王様でありましたか！失礼しました！！」

魔王「いやいや、私達も自己紹介していなかつたからね

神王「気にするな嬢ちゃん」

そう2人は笑いながら言つた

義之「で御2人が居ることが先ほど言つてらした説明に繋がるんですね？」

神王「おう！その通りでい！」

魔王「察しが良くて助かるよ

さくら「まあとにかく座ろうか？」

そうさくらに促されたので全員ソファに座つた

因みに席順は右側に義之・さくら・麻耶で左側に神王・魔王だ

義之「で、御2人も土見訓練生を実戦部隊に入れるなつていうのはどうしてですか？」

神王「あ――」

魔王「それはだね・・・」

と2人が喋りにくそうにしていると

義之「そもそも、わかっているんですか！？貴方達、御2人がやろうとしているのは条約違反ですよ！？」

条約とは今から8年前に人族・魔族・神族の交流都市を世界中に作つた際に制定されたもので、その内の1つにく魔法の軍事転用は禁止（医療は別）♪とありそれに付随する形でく神族と魔族は如何なる理由があろうとも軍に介入することを禁ずる♪とあるのだ

神王「まあ、そうなんだがな・・・」

魔王「これには訳があつてね・・・」

義之「訳ですか・・・お聞かせください」

神王「うむ、実はうちの娘のシアと」

魔王「私の娘のネリネちゃんがね」

神王＆魔王「土見稟ちゃん（殿）のことを好きになつてね（なつちまつててな）」

麻耶「それって、つまり・・・」

神王＆魔王「次期王様候補さ（だ）！」

義之＆さくら＆麻耶「なに――――――！？」

部屋が揺れるくらいに3人の叫びが響いた

流石に3人揃つて驚いたようだ

義之「確かに、それは出しにくいですね・・・」

義之も流石に唸るしかなかつた

魔王「頼む！」

神王「たつた1人の娘の願いを叶えてやつてくれ！！」

なんと2人の王は義之に対して土下座までしてきた

義之「ちょ！？頭を上げてください！王がそんな簡単に頭を下げないでください！」

義之も流石に慌てて2人に頭を上げるように促した

魔王「じゃあ、聞いてくれるのかい！？」

2人の王は嬉しそうに頭を上げて義之を見た

義之「いえ、流石にそれは・・・それにせつかく見つけた新人で
すし、なにより・・・」

神王「なにより？」

義之「これは彼の人生です、彼が望んで訓練生に、軍人になると決
めたんです、我々にとやかく言つ権利はありません」
それを聞いた神王と魔王は、ハッとしたようだ

神王「すまねえ・・・」

魔王「少し焦りすぎたようだね・・・」

義之「いえ、御2人のお気持ちもわかります」と義之が言い全員が悩んでいると

麻耶「そうよ！ 義之！ 総戦技演習よーーー！」

義之「そうか！ その手が有つた！」

義之は麻耶の言葉を聞いて思い出すように手を打った

魔王「なんだい？」

神王「その総戦技演習つてのは？」

義之「正確には、総合戦闘技術演習と言います」

麻耶「総合戦闘技術演習は簡単に言つと、訓練生の卒業試験でして」
義之「その最終日に面接があるんです、その時に自分が直接言いま
す」

魔王「ネリネちゃん達のことをかい？」

義之「はい、それで土見訓練生に直接選んでもらうなら、御2人も
文句は無いですね？」

魔王「そうだね」

神王「ああ、ねえな」

義之「よかつた、じゃあ麻耶頼んだ」

麻耶「ええ」

麻耶は返事をすると携帯端末を操作した

魔王「なにをしたんだい？」

義之「データを書き換えて自分が面接官というふうに変更しました」

神王「おいおい、それはいくらなんでもやり過ぎじゃあないんか？」

魔王「なにをしたんだい？」

くへり「ついにやー、そうでもないんだよ、ワルキュー隊は表向き
大總統直轄つてなつてるけど」

魔王「けど？」

さくら「じつは僕の直轄部隊でもあるんだよね、にしても義之くん、
やるなら言つてよね？」

『氣付くとさくらの手元には球状のフルカスタマイズの空中投影式キ
ーボードと空中投影式モニターが展開していた

義之「すいません、さくらさん」

どうやら義之がやつた事をさくらが許可したらしく

魔王「つまり君達には大統領並みの権限があるってことかい？」

義之「まあ、そうですね、あまり使いませんが」

と言つと義之と麻耶はソファから立ち上がり

義之「では我々は職務がありますので、失礼しますー。」

と敬礼して部屋を退出した

神王「若いのにいい眼をしてるじゃねえか」

魔王「そうだね、優しく、力強い意思、何より覚悟を持つている者
の眼だね」

さくら「いやほほ、それは当たり前だよ、義之くんはく初音島の
守護神なんだから」

はい、親ばかズとのファーストコンタクト完了です！
ようやくここまで来たぜ、長かった
ってわけで

「」からは後書き「コーナーダゼー！」

作者「はい、始まりましたー」のコーナー司会は私、京勇樹と
たばるさきね

雪音「アシスタントの、田原雪音でお送りします」
因みに前回壊れた穴は補修済み

作者「では、本日のゲストはこの2人だ！」
さくらいよしゆき

義之「呼ばれたから来ました、
桜内義之です」

麻耶「ここに来たのは初めてね、沢井麻耶です」

作者：はい、主人公とその恋人です！！

雪音「狭くてこめんね？」

麻耶「どうして？

作者「はい！御2人にこれを読んでいただきたくて」

とゲストに細を渡す作者

麻耶「読むの？」

雷音「ええ」

作者一では、どうぞ。」

麻耶「お願い、無事に帰ってきて・・・」

義之「つぬ――――」

作者通信役「米国宇宙総軍よりハイヴ攻撃中の全部隊へ通達、至急
退避せよ、繰り返す、至急退避せよ、米国宇宙総軍は新型の対ハイ
ヴ兵器の使用を決定した、攻撃範囲内より至急退避せよ」

義之「もう……」の町で、誰も、誰も死なせたくないんだ——

作者「はい、おつかれさん」

義之&麻耶……（顏真卿）」

著者「刃マーク」

ジマニ

三
七
上
二

作者「あれ? なに銚抜してゐるの? しかも38□径の拳銃を」

義之「」の野郎は!!

卷之三

作者「甘いわ！」

トリックスのオヤジは、ソント並に遅ける作者

講義の
たまご

作者「ふはははー！命中率85%回避率99%、Nタイプ評価Aを舐めるな！」

雲龍「これは作者が乙がンタムで書
義之「はい、出雲田は回避率！」

雪音「また壁が壊れた・・・・」

作者「まあ次回には直ってるよ、ってな訳で」

全員「…………またね…………」

作者「引き続き要望、アドバイス等お待ちしています！相変わらず
1通も来ないからさびしいです・・・」

運命の分岐点 s.t.d. 学校（前書き）

今回は難産でした、時間が掛かってすいませんでした

運命の分岐点 side school

? side
? 「みんな、おはよ・・・」

今日、私、八重桜^{やえざくら}は今日いつもの様に学校に登校して教室に入つて驚きました、だって

? 「ここは、何時から女子高になつたのだ？」

そうなんです、教室に居るのは女子だけで男子は誰一人として居なかつたのです

あ、因みに先ほど私の代わりに言つてくれたのは、いつもの様に一緒に登校した天枷美夏ちゃんです

? 「おはよーなのですよ、さつちやんに美夏ちゃん」

そう挨拶しながら近づいてきたのは右目が赤で左目が青のオッドアイが特徴でクラスメイトの麻弓^{まゆみ}タイムちゃんです

美夏「で、麻弓^{まゆみ}はどうしてこうなつたのだ? しかもあの変態メガネまで居ないとは」

と美夏ちゃんは麻弓^{まゆみ}に質問しました、因みに美夏ちゃんが言った変態メガネとはクラスメイトの緑葉樹君^{みどりばじゅき}のことです

麻弓「あのね今日転校生が来るつて皆職員室に行つちゃつたのですよ」

と言いました

美夏「ふむ、確かに風紀委員会でも話題になつてたな」と美夏ちゃんが言いました

桜「へー、そういうば前に麻弓^{まゆみ}ちゃんが教えてくれたよね」

私は以前登校した際に麻弓^{まゆみ}ちゃんが言つた言葉を思い出しました

美夏「だからといって、男子全員が居なくなるとは・・・」

麻弓「それがね美夏ちゃん、その転校生凄い極上なのですよ! しかもさつちやんクラスの! -!」

と麻弓^{まゆみ}ちゃんは私を指差しながら言いました、麻弓^{まゆみ}ちゃん人を指差

すのは・・・・つて！－

桜「私はそんな極上じやないよー！」

私は必死に反論しましたが

美夏「何を言う八重、八重は十分極上だぞ」「麻弓」「そうなのですよーさつちゃんは知らないだらけだ」「ラブまであるんだから…」

うつ、噂には聞いてましたが本当に存在したなんて・・・

桜「それを言うなら美夏ちゃんや麻弓ちゃんだけ十分極上ですよー！」

と私は必死の反抗を試みましたが

美夏「いや、八重には負ける」

麻弓「さつちゃんには負けるのですよー」

と一蹴されました、うつ・・・

とその時チャイムが鳴ると同時に教室のドアが開き

?「いやー、世の中は広いね、まさか桜ちゃんクラスの極上がまだ居たとは…！」

と眼鏡をかけた男子、緑葉樹君が言いました、うつ・・・また言わ
れた・・・

?「たくーー今回は見逃してやらんでもないが、お前ら次やつたら問
答無用でタイヤ引きグラウンド50周させるからなー！」

と言いながら入ってきたのは腰まで伸びた綺麗な黒髪にスタイル抜
群の担任の、紅薔薇撫子先生の通称、紅女史です

?「あははは、皆さん席に着いてくださいね？」

と次に入つて来たのはサイズが合つてないのかダボダボの大きい服
と、同じようにサイズが合つてないのかすぐにズレル眼鏡をかけた
女性で副担任の、山田真耶先生です

因みに学校のグラウンドは平均して1キロあり、最大だと陸上競技
が練習できるようになると5キロまであります

紅薔薇「さて！、既に知っている者も多いと思つが今日からこのク
ラスに新しい仲間が加わる！」

と撫子先生が行つたら男子が全員クラッカーを出しました、何処からだしたんでしょうか？

紅薔薇「さて、では入れ！」

撫子先生が行つたらドアが開きました、その瞬間男子が一斉にクラッカーを鳴らしました

? 「おう、なかなか面白いクラスみたいじゃねえか、なあまー坊？」

? 「そうだね、神ちゃん『しんちゃん』このクラスなら楽しく過ごせそうだね？」

入つて来たのは2人の男性でした・・・・あれ？

桜「麻弓ちゃん、この2人が転校生？個性的って意味では確かに極上だけど・・・」

私は後ろの席の麻弓ちゃんに聞きました

麻弓「ぶんぶんぶんぶん！違う違う違う違うーー！」

と麻弓ちゃんは高速で首を振りました

桜「縁葉君？」

私は次に右斜め前に座っている縁葉君に聞きましたが

樹「そ、そんなわけないって！？」

と縁葉君は即答しました

真耶「な、なんで御2人が来るんですかー！？」

山田先生は混乱しながら聞きました（まるで子犬みたいです）

? 「いや、なにな、シア達が過ごすクラスがどういうクラスか気になつてな」

? 「うん、ついでに釘を刺そうかと思つてね？」

真耶「釘ですか？」

なんでしょうか？

? 「いいかお前らー！シアとネリつーには婚約者が決まってるー！」

と言つたのは着流しを着たガタイの良い神族の男性でした、もう婚約者が決まってるんだー

? 「もし、その仲を引き裂こうなんて考えたら、分かつてるよね？」

そう言つたのは魔族の男性の顔は笑つてましたが・・・・

クラス男子一同「「「「「 サー・イエッサー……」「」」

と男子全員が一糸乱れずに返事しました、気持ちは分かるよ、だつて・・・・怖いんだもん

? 「お・と・う・さ・ん！」

? 「お~」!~?」

ド、ゴ~!

という音とともに神族の男性の頭が横にズレました、なんで?

? 「シア、椅子はやり過ぎだつて教えただろ? が?」

神族の男性が後ろを向きながら言いました

え? 椅子?

? 「普段血の気が多いからこのくらいがちょうどいいんです!!」

と両手にパイプイスを持った腰まで髪が伸びた神族の女の子が居ました、まさかあれで殴つたのかな?

? 「お父様もやり過ぎです、クラスの方々が怖がつて居るではありますか?」

と魔族の男性の横に腰まで伸びた髪と胸の大きい魔族の女の子が居ました、・・・・かわいいです

? 「いやー、ごめんねネリナちゃん、ネリネちゃんの恋を応援したくてつい」

娘さん思いのお父さんです

? 「おい、そういうやあ嬢ちゃんはどうした?」

あ、そういえば3人つて話でしたね、3人全員このクラスに入れる

つてのはやり過ぎなんじゃ

? 「そうだね、このクラスに知り合いが居るつて言つから入れてもらつたけど

へー、知り合いでですか、誰でしょうか?

? 「あれ? そういえばカエちゃん?」

と神族の子が周囲を見回しました

? 「あら? カエデさんは?」

え? かえで? そんな・・・・ただの偶然のはず・・・・

美夏「む？どうしたハ重？そんな顔して」

麻弓「そうなのですよ、まるで幽霊でも見たような顔しちゃって
だって、楓ちゃんは2年前に死んだはずなのに・・・

？「ほーら！カエちゃん、早く入るの！」

と神族の子がドアの所から1人の手を引っ張つてます

？「あ、あの！シアちゃん！？まだ心の準備が！？？」

え・・・・？この声は・・・

クラスに入つて来たのは明るい茶髪を肩のあたりで切りそろえた赤いリボンがトレードマークの女の子でした・・・

紅薔薇「それで、そろそろよろしいでしょうか？」

撫子先生の顔は笑顔でしたがプレッシャーが凄いです・・・

5人「」「」「」「」「はい・・・・」「」

閑話休題

シア「リシアンサスです、少し長いのでシアって呼んでほしいっす！」

クラスの男子のボルテージが高いです

ネリネ「ネリネと申します、ようしければリンとお呼びください」

礼儀正しい子です

神王「俺の名前はコーストマだ！シアの父親でもあるし神界の王をやつてる、よろしく頼むぜ？」

え？

魔王「私の名前はフォーベシイ、ネリネちゃんの父親であり魔王でもある、見知つておいてくれたまえ」

はい？

紅薔薇「御2人は結構です、それにまだ1人終わつてしません！！」

撫子先生ご苦労様です

楓「芙蓉楓と申します、よろしくお願ひします」

ガタン！！

美夏「どうしたのだ、八重？」

麻弓「どうしたのですよさつちゃん？」

美夏ちゃん達がなんか聞いていましたが、今の私の耳には聞こえてませんでした

楓
—
桜ちゃん、・・・お久しぶりです」

楓ちゃんは優しく微笑みながら言いました

桜一楓ちゃん！」

和に極めて人の驕に寄り扱うべきものだ。

神王「あー、止めるなよ先生わんよ?」

紅薔薇「どうごいりとですか?」

五
五
五
五
五

クラス一同「「「「「えーーー?」」」

神玉一まあ詳しくは娘をやん達に聞かね

卷之三

麻弓「ちょっと待つて欲しいのですよ！？先ほど御2人の口からな

トドケない発言があるが、たゞかのうで

紅薔薇「え」、まあ……、せう二

・じやなくて、非常に嘆かわしい・・・・でもなくて」

江壽徵「三當時」の「三當時」は、三當時の「三當時」である。

それぞれ神界と魔界の王の立場にあるお方だ。そして転校生はその

娘さんと友人・・・私の言いたい事は分かるな?緑葉?』

撫子先生は樹君を見ました

樹「もちろん。大丈夫ですよ。俺様が必ず幸せにしますからーー！」
と樹君は右手の親指を立てながら言いました

紅薔薇「お前は一切近づくなと言つてるんだよーーー！」

撫子先生から凄い殺氣を感じました

紅薔薇「あー、次の時間だが自習にする、麻弓、後は頼んだ」と撫子先生は教室から神王と魔王の2人を押し出しながら去り、山田先生はその後を着いていきました

そこからは質問攻めでした

そして昼休みです

私達は屋上でお弁当を食べながら話してました、すると

？「楓が生きてたって本当！？」

そう言つてドアを凄い勢いで開けたのは緑の髪をショートカットで切りそろえて左前に一房だけある前髪をリボンで纏めた女子の先輩です（制服のリボンの色が違うので分かります）

楓「お久しぶりです、亜沙先輩」

そう楓ちゃんが挨拶すると

亜沙「楓ー！」

と亜沙先輩こと、時雨亜沙先輩は楓ちゃんに抱きつきました

楓「すいません、ご心配をおかけしました」

亜沙「本當だよー！なんで連絡の1つもくれなかつたの！？」

楓「すいません、怪我の治療とリハビリに時間が掛かりまして

亜沙「怪我つて・・・」

？「それについては私から説明します」

と現れたのは膝まで届きそうな金色の髪に青紫の瞳が印象的な神族の女子の先輩でした

桜「あなたは確か生徒会長の」

瑠璃「瑠璃＝マツリと申します、楓さんは2年前のタイタン戦争の時に左手を肘の辺りから失つており、気絶しているのを私が発見し

保護しました」

私達は驚きました、だって

桜「え！？でも左手普通に有るよ！？」

そうなんですか左手が普通にあって、しかもちゃんと動いてます

? 「それは神界の医療技術のなせる業ですわね」

と声が聞こえたので見るとドアの辺りに輝く程の金色の髪が腰の辺りまで伸びていて右前に亜沙先輩と同じようにリボンで髪を纏めている緑色の瞳が印象的な神族の女子の先輩が居ました

亜沙「あ、そういうばカレハも居たっけ

あー、お料理部の双璧の

瑠璃「発見した後、神王様に頼んで治療を施していただきました」

楓「それで、リハビリに1年近く掛かっちゃいました」

瑠璃「しかも、人間界の日本では楓さんは死んだことになっていて、更に桜さんや稟殿は初音島に移住なさつてましたから探すのに苦労しました」

桜「え!? 稟君を知ってるんですか! ?」

瑠璃「はい、私は光陽学園の出身です」

桜「あ、じゃあ、・・・あの噂も?」

私は恐る恐る聞きました

瑠璃「はい、存じてますが、楓さんから全て聞いてますので、『安
心ください』

良かつた』

瑠璃「それで楓さんはリシャンサス殿下と一緒に人間界に来たんですね、私はすぐに初音島に移住しましたが」

なるほど

亜沙「でも稟ちゃんはこの学園には居ないよ?」

桜「そうなんです、私ですら1年以上会つてすらいないですし・・・

亜沙「え? そうなの?」

ネリネ「それなら大丈夫です」

桜「え? どうして?」

シア「稟君の居場所なら知ってるつす!」

桜「え! ? 本当ですか! ?」

ネリネ「稟様は訓練校に居ます」

訓練校?

樹「それって、統合軍の訓練校のことかい?」

桜「え!/?稟君、軍隊に居るの!/?」

ネリネ「はい、以前お父様が交渉に行つてました」

桜「交渉?」

シア「うん、でも確か特務隊の隊長さんと話し合つて終わつたって
言つてたつす」

美夏「なに!/?」

エリカ「隊長と!/?」

由夢「兄さんと!/?」

桜「え!/?3人とも知つてるんですか!/?」

美夏「む・・・」

エリカ「え、えーと・・・」

由夢「そ、その・・・」

ジ――――×複数

由夢「仕方ないですね、このことは口外無用でお願いします
やつた根勝ち!」

由夢「まず特務隊隊長は私の兄さんの、さくわいこよしおき桜内義之兄さんです」

桜「え!/?由夢ちゃんのお兄さんって隊長さんだつたんだ!/しかも
あの英雄!/?」

まさかく初音島の守護神しゆごしんへさんがお兄さんとはビックリです!

由夢「ええ、しかも私達はその特務隊に所属しています」

軍隊に所属してるのは知つてたけど、まさか特務隊とは・・・

由夢「それで、先ほど言つてた、土見訓練生ですが、兄さん達が目
をつけてまして」

亜沙「つてことは特務隊に入れるつてこと?」

由夢「はい」

桜「早く会いに行かないと!」

美夏「待て!今は無理だ!」

桜「なんですか？」

エリカ「今、訓練生は総戦技演習真っ最中なんです」

亜沙「総戦技演習？」

なんでしょうかそれ？

由夢「正確には総合戦闘技術演習と言いまして、訓練生の卒業式みたいなものなんです」

なるほど

美夏「総戦技演習は1週間かけて行われるんだが、今はちょうどその期間中なんだ」

桜「なるほど、だから今行つても会えなーってことなんですね」

由夢「それに期間が終わつても会えるかどうか……」

桜「どうしてですか？」

由夢「特務隊ですから、秘匿性が高いので、情報漏洩を防ぐために面会もかなり制限されてるんです」

桜「そんな……」

由夢「私の名前を使えば面会できるかもしれないんですけど……」

美夏「まあ、奥の手で同じ部隊に所属するといふ考えもあるな」

楓「そんなことが可能なんですか？」

由夢「まあ短期課程を優秀な単位で卒業すれば可能ですが……」

桜「なるほど……」

私は楓ちゃんのほうを見ました、どうやら楓ちゃんも同じ並んで立つたようで眼が合いました……

楓&桜（裏くん待つててくださいね？）

私達は青空を見上げました……

運命の分岐点～side school（後書き）

今回は長かった・・・

はい後書き「一ナードですよ！」

作者「はい、どうも作者の京勇樹です」
雪音「アシスタントの田原雪音です」
前回穴だらけになつた壁は補修済みです

作者「今回のゲストはこちりー。」

冥夜「御剣冥夜だ」

まゆき「高坂まゆき《ひづかまゆき》でーす！」

音姫「朝倉音姫です」

作者「いやー綺麗な花ばかりで」

雪音「本当に」

音姫「あはは、綺麗だなんてお世辞でも嬉しいなー」

作者「いえ、お世辞ではありますよ、では今日はこれをお願ひします！」

まゆき「なになにこれ読むの？」

雪音「はい頼みます」

ではスタート！

音姫「およしなさい、イルフリーデ！もう間に合わないよ・・・」

まゆき「そんなのやつてみなくちゃわからないーー！」

冥夜「馬鹿者ーこの様な・・・力押しなぞーー！」

まゆき「お願い行かせてヘルガー人類はまだ戦つている、諦めるなんて絶対に出来ないーー！」

作者「はい、おつかれさま」

雪音「どうでした?」

音姫「うん、たのしいね」「ううの」

まゆき「うん、なんか新鮮だね」

冥夜「……のだ」

作者「うん?なぜに刀を皆瑠神威を抜くのかな?」

冥夜「なぜ私が上官を馬鹿者呼ばわりせねばならんのだ!…」

作者「あぶね!」

壁が切り裂かれて刃が作者に向かう

冥夜「なに! ? 真剣白刃取りだと! ?」

作者「ふはははは!俺は格闘家でもあるのだよ!」

雪音「これは事実です、作者は空手にテコンドーにムエタイに八極

拳に合氣道に柔道に八卦掌を使います」

まゆき「なにその1人多国籍軍は! ?」

音姫「ワルキユーレでも十分隊長格で行けるね……」

作者「また壁が壊れたよ……」

雪音「まあいつものように直るでしょう、では今回まじめで!」

全員「…………また次回まで、たよーならーーー」「…………」

引き続き要望や、「」意見感想などを待ちしております、相変わらず一通も来ないので寂しいです……

設定

(新しく追加につきネタバレ注意) (前書き)

設定ですよ
まずはキャラで

新しく数人追加しています、ネタバレ注意です

設定

(新しく追加につきネタバレ注意)

桜内義之、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の現隊長、コールサインはオーディーン1、階級は大佐、現在の搭乗機はGAT-X105ストライク、副官の、沢井麻耶とは恋人同士である、元は空軍の戦闘機パイロット候補生で優秀な生徒だったが、タイタン戦争数ヶ月前にMSパイロットに転科した

沢井麻耶、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、コールサインはオーディーンマム、階級は少佐、主には、CP^{コマンドポスト}こと通信を担当、指揮官適正も高いため現在艦長育成コースも勉強中メカニックも兼任しており整備班の班長でもある

朝倉音姫、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、階級は大佐、特装艦アーケンジエルの艦長を勤める、柔軟な指揮に定評がある、容姿端麗、成績優秀であるが、義之にはとことん甘いのである、高坂まゆきとは友人関係

伊隅みちる、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊のMS隊副隊長を勤める才女、コールサインはオーディーン2、階級は中佐、搭乗機はGAT-X303イージス、何より努力することを怠らず、今之力も彼女の努力によるものである、結構完璧主義である

4人姉妹で、みちるは次女、姉の伊隅やよいは大總統の朝倉純一の秘書官を務めていて、3女の伊隅まりかは統合防衛軍の参謀本部に勤めていて4女の伊隅あきらは統合軍の即応MS部隊に所属している

高坂まゆき、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、コールサインはオーディーン3、階級は中佐、搭乗機はGAT-X102AS^{アサルトシュラウド}ことデュエル AS、アーケンジエル艦長である朝倉音姫

とは旧知の間柄であり、義之や音姫の妹である、朝倉由夢とも友人である、運動神経は抜群で、訓練生時代は男子女子問わず高い人気を誇っていて、非公式にファンクラブまで存在している

杉並、すぎなみ初音島統合防衛軍所属であり、以前はGAT-X207ブリツツのパイロットであつたが、く初音島防衛戦』で機体が被弾しほぼ大破状態になりその際に負傷しパイロットを引退した。階級は少佐、現在は諜報部に所属していて滅多に姿を見せない

橘菊理、たちばなくくり初音島統合防衛軍特務部隊フルキュー隊所属、階級は中佐、搭乗機はGAT-X103バスター、コールサインはオーディーン4、長い黒髪に大きな目にちょっと広い額が特徴である、物腰が柔らかく、いつも柔らかい微笑みを絶やさない、ラウンズ隊に所属している、さつきかげる皐月駆と付き合っている

土見稟、現在訓練生で、206訓練部隊に所属している、2年前の「タイタン戦争」で幼馴染である、ふようかえで芙蓉楓が死んだと思い込み、無力な自分が許せなくて、初音島統合防衛軍に志願した、八重桜とも幼馴染である、右手首に楓が結んでいた赤いリボンを巻いている

芙蓉楓、ふようかえで2年前のタイタン戦争で左手を失う重傷を負い氣絶していいた所を、瑠璃るりマツリに保護される、その後は神界にて治療を受け、リハビリを兼ねて神王に仕えていたため家事スキルに磨きがかかり、もはや一流である

八重桜、やえさくら現在は初音島総合学園高等部普通科2年C組に所属している、クラスメイトの天枷美夏あまかせみなつとは仲がよく、登校するさいは何時も一緒に登校する、2年前に楓が死んだと思い込んでいたため、再会した時は泣いていた、趣味は人形作りで、スタミナが異様に高く、陸上競技の持久走ではいつも上位にランクインしている、家事スキ

ルは高い、稟のことが好きだがなかなか告白できないでいる

朝倉由夢あさくらゆめ、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、普段はアーケンジエルの衛生班に所属しているが、予備MSパイロットでもある、階級は准尉、朝倉音姫は姉であり、桜内義之とは兄妹同然に育つたため、義之のことを兄さんと呼ぶ、総合学園では八重桜と芙蓉楓とクラスメイトで、天枷美夏、エリカ・ムラサキとはクラスメイトであり、訓練部隊の同期もある

搭乗機はアストレイ3型スナイパー・カスタムが多いが基本オールレンジ対応のオールラウンダー

出撃する際のコールサインはアテナ4もしくはウルド3

天枷美夏あまかせみなつ、初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属、階級は中尉、普段は風見総合学園に通っている、MSパイロットを務めている

コールサインはウルド1、搭乗機は前大戦時に大破したGAT-X207ブリッツと中破したMBF-P03ガンダムアストレイ・ゴールドフレームを合わせて改修強化した機体の、ガンダムアストレイ・ゴールドフレーム天アマツを神宮司よりもから引き継いでいる、朝倉由夢とエリカ・ムラサキとは訓練生時代からの同期で、八重桜と芙蓉楓ふようかえでとはクラスメイトである、本当は今から50年前に作られたロボットで沢井麻耶とちょっととイザコザがあつたが義之の活躍で問題は解決されている、その会があり沢井麻耶とは親友同士だ、今一般に普及している『ミュー』のプロトタイプであるHM-A07美秋みあきやHM-A08美冬みふゆの更にプロトタイプ、麻耶のお父さんは美夏を参考に美秋や美冬を開発したようだ

エリカ・ムラサキ初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属、階級は少尉、普段は風見総合学園に通っている、MSパイロットでコールサインはウルド2、搭乗機は中距離を中心にカスタムしたアストレイ3型、どうやら東欧のある小さな国の王族の一族とかで教養

は十分

皐月駆、初音島統合防衛軍特務ワルキューレ隊所属、階級は大尉、普段は風見総合学園に通っている、学年は3年生で同クラスに同ワルキューレ隊の田島賢久と天見修、照屋匡、奈月香央里、吾妻汐音、紅野澪、百野栄、水奈瀬ゆかが所属している、過去に両親に姉の皐月菊理と共に捨てられそれ以降は孤児院に居てそこで水奈瀬ゆかと出会った、そしてそこで起こった事件により3人以外殺された、そして孤児院が閉鎖になる際にゆかは引き取り手が見つかってたが皐月姉弟は見つからず結果2人だけマンションに住んでいたが姉の菊理が謎の自殺をしてしまってからは無気力に怠惰に生きていたが訓練生のある日姉そっくりの橘菊理と出会った、それからはお互いに惹かれ合い、菊理が訓練生を卒業する際に恋人になつた、コールサンはラウンズ2で機体は近接格闘戦重視の機動近距離万能型にカスタムされたアストレイ3型

草壁美鈴、初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属階級は少佐、尚、草壁家は昔からの法師陰陽師で本人も術式だけでなく草壁流剣術の達人で免許皆伝の腕前を持つ、副官の皐月駆は美鈴が手すから草壁流剣術を教えた、その会があつて駆は流石に美鈴ほどではないが剣は達人クラスの腕前を持っている、愛刀は童子切安綱、駆の恋人である橘菊理とは訓練校の同期で義之や杉並とも同期、コールサンはラウンズ1で機体は前大戦時はMBF-02ストライク・ルイジュだったが今は織斑千冬が乗っていたMBF-P01のガンダムアストレイ・レッドフレームを引き継いで乗っている

設定

（新しく追加につきネタバレ注意）（後書き）

今回は設定を書きましたが、今後ちょくちょく追加で書く予定です
今回都合により後書き「一ナーナーはお休みいたします

新しく追加しました

設定その2（前書き）

設定その2ですよ

今回は世界の状況をお送りします

設定その2

海洋中立独立国家初音島

新太陽暦20年に日本帝国から独立した中立国家、当初は三日月型の島の初音島のみだったが、月城財閥の出資によりメガフロートを建設して国土を広げた

最初の代表者は工藤叶の祖母だった、しかし一族の世襲式だと歪みが発生してしまうと判断して次代からは選挙式になった
なお初音島統合防衛軍は志願式の為、脱走者は滅多に出ない
主な主力機体は現在M1アストレイの後継機のアストレイ2型

JEU

日本帝国とEJこと歐州連合が同盟を結んで誕生した
しかし新太陽暦73年3月にヨーラシア連合が武力により制圧
1部の者達は脱出して現在逃走している、そのうちの1部が初音島に亡命している

ラウラ・ボーデヴィッヒは祖国を守れなかつた自分の無力さが許せなくて志願したもよう

日本帝国は徵兵式だが脱走者は無し、EJは志願式の為脱走者は無し
日本の主力機は一般は、烈空れっくうと近衛軍は烈空の改良機の、蒼空そうくうと、
新型機の、龍閃りゅうせん

EUの主力機はコロニーにて生産されたZGMF-1017ジンを改良して空戦能力と火力を強化したジン・トーナードとAMF-101デインの強化機のデイン・ラファールをライセンス生産している

ヨーラシア連合

人口が爆発的に増えすぎた為、経済が破綻した中国をロシアが吸収した形で生まれた巨大国家

しかし、貧富の差が激しく国家内では凶悪犯罪が多発しており、治

安は最悪

軍は徴兵性になつてゐるが、脱走兵が多い、更には1部で強化人間計画も持ち上がつてゐるようだ

主な主力機は前大戦期のストライクダガーの後継機のダガーレと現在ウインダムが続々とロールアウトしてゐる

N・A・U ネオアメリカ連邦

アメリカ合衆国を中心となり、カナダ、南アメリカ大陸の各国が1つになつて生まれた

治安は良好で、貧富の差は大してない
軍は志願式で脱走は無し、優秀ならば黒人だろうと重用するため人種差別は1部はないが、未だ根強い

主力機は前大戦のリー オー の強化改修のリー オー Mk?と同じく強化改修したエアリーズMk?

アフリカ共同機構

アフリカ大陸の国家が集まつてできた

砂漠の緑化計画により砂漠は減少したが未だに残つてゐる
スラム街があるため治安は悪い

軍は徴兵式だが脱走兵は少ない

主力機はジンの砂漠対応型のTMF/S-3ジン・オーカーとTMF/A-802バクウとバクウの技術を流用したティエレンタイプと最近ロールアウトしたバクウの改良機のTMF/A 802W2バクウ・ケルベロスハウンド

赤道連合

赤道下にあつた島国が合併して生まれた
各島に自警団がいるため治安はそれなり
軍は志願式の為脱走兵は無し、しかし他の国に比べると数は少ない
中立國家

主力機はヨーラシア連合の払い下げのストライクダガーを改良して使っている

オーストラリア合衆国

オーストラリア諸島が合併して生まれた国家

治安はかなり良い、経済的にもかなり潤っている

軍隊は少なく、非常時には国民皆兵制度により徴兵され義勇軍として機能する

主力機はVMS-15リアルドと最近ロールアウトしたSVMS-01フラッグである

後はどこの国家にも所属していない独立国が多数存在する
主力機は様々

設定その2（後書き）

今回も後書きはカットします

設定その3（前書き）

設定その3です

今回は作者オリジナルMSの紹介です

設定その3

MBF-M1 TYPE2 アストレイ2型

17・54m

53・6t

固定武装

頭部75mm対空自動バルカン砲システム イーグルシユテルン
腰部70式改ビームサーベル

主な違いは背部に準ストライカーシステムを搭載して色々な戦局に
対応が可能になつております、今存在しているストライカーパックは

強襲撃パック
アサルト
スナイパー

超遠距離狙撃パック

遠距離支援砲撃パック
キヤノン
ライト

空戦パック

となつてゐる、更に装甲も新しい発泡金属になつております重さは大し
て変わらず防御力は向上してゐる

更にOSも、とある人物が考案した新型の物に交換してあり即応性
が3割上昇してゐる

更にビームライフルをエネルギーパック式と従来の機体からのパイ
プ式を用意してパイロットが任意で選べるようにした、エネルギー
パック式はアストレイ3型やGATシリーズも使用可能

現在の初音島統合防衛軍の主力機

MBF-M1 TYPE3 アストレイ3型

17・53m

53・2t

固定武装

手首装甲収納式72式ビームサーベル

頭部バルカン砲を固定式にせずにオプション式に変更した（イメージ的にはΖガンダムのガンダムMK-2）更にビームサーベルを手首の装甲に収納式に変更して取り出し時間を短縮する目的で考案された（イメージ的にはΖΖコーンガンダムのRGZ-95リゼル）更に背部だけだったストライカーパックシステムを全身にした、その際に装甲と腕部の肘と肩部及び頭部、両脚部の膝部分をブロック式にして整備性の向上も成功した、ストライカーパックは2型と共通で使用可能でパイロット1人1人に合わせて更に装備を変更可能になつていて個人専用機にもなる

現在試験評価中で配備されているのはワルキューレ隊のみで
MVF-M11Cムラサメと一緒に評価試験されている

ZGMF-1017/T ジン・トーナード

21.41m

85t

固定武装

背部フライトユニット兼用多目的ミサイルランチャー

腰部 折りたたみ式ハルバート

選択式武装

MMI-M8A3C80mm重突撃機銃

MK-71 120mm突撃長距離支援砲

脚部取り付け式 3連装ミサイルランチャー

380mm無反動バズーカ

L4コロニー群で生産されたMS ZGMF-1017ジンをEUが独自改良強化してライセンス生産している機体、新太陽暦72年11月に近代化改修した、主な改良は頭部のセンサーユニットを新型の小型の高性能のものに換装して頭頂部のトサカを小さくして故障率を低減、更に大気圏内で空戦能力が無かつたのを、背中に取り

付けられてた大型スラスターをミサイルランチャー兼用のフライトイニットに換装した（イメージ的にはザクウォーリアのブレイズユニットにM1アストレイのシュライクユニットを合体させた物）、更に腰に装備されていたMA-M3重斬刀を折りたたみ式のハルバー（重斧槍）に交換したことにより格闘攻撃力の向上を図った、それに合わせてマニピュレーターの関節強度を4割程上げた、更に支援能力を得る為に120mm突撃長距離支援砲を新規生産して、部隊運用性を向上させた

最近は強化機のレーダーと通信機能、スラスター推力が強化されたジン・トーナード^{アドヴァンスト}ADVがロールアウトされている

AMF-101/D-R デイン・ラファール

19.33m

37.9t

固定武装

胸部多目的6連装ミサイルランチャー

選択式武装

MMI-M8A3C80mm重突撃機銃

95mm対空散弾銃

380mm反動バズーカ

MK-71 120mm突撃長距離支援砲

L4コロニー群で生産されたAMF-101デインをEUのフランスの軍需産業デュノア社が改修強化してライセンス生産している主な改修点は全身のスラスターを強力な低燃費のものに換装して推力を強化し、それに合わせて機体に内蔵されていたプロペラントタンクを大型化した

速度はデインよりも約2割強化、航続距離は飛躍的に強化されたスラスターが強化されたことに合わせて武装も強力なものを持続出来るようになった

MSJ-06?AICティエレン無限軌道型

18.3m

122t

固定武装 30mm機銃

両肩部固定シールド

選択式武装

200mm×25口径長滑空砲

バッテリー内蔵式 380mm単装レールガン

大型カーボンブレイド

バッテリー式ビームサーベル

新太陽暦71年に製造されたティエレンに「4」「ロニー群で製造されたバクウの技術のレールガンとビームサーベルを追加武装で作った更に大きな変更として歩行式だったため遅かったのを早くするため脚部にバクウの無限軌道を採用して砂漠での機動力の強化を図つた更にティエレンの地上バリエーションシリーズの脚部も無限軌道式に換装して機動力を強化した

なお選択式武装はティエレンシリーズの共通武装である

JMS-TYPE71(日本以外での表示) 71式MS 烈空

18.5m

固定武装

頭部 70mm対空自動バルカン砲

腰部 日本刀型近接格闘兵装 斬鉄刀

左腕部 小型A B シールド
アンチヒート

右手 71式ビームライフル

日本帝国が初音島からの技術提供により開発した国産MS、主に近接戦闘を重視しており、肩周りの装甲は他の国に比べるとスマートになっている、全体的に鎧武者をイメージさせる造形になっている

カラーリングはダークグレーで統一されている、背部に飛行ユニット

トの、飛鳥ユニットを装着することにより空戦能力を得ている、翼の下にドロップタンクを装着することにより航続距離を延長できる、更に無誘導式8連装ミサイルランチャーと対艦大型ミサイルも装着可能

JMS-TYPE71C（日本以外での表示） 71式改MS 蒼空そらくう

20・5m

81t

固定武装は烈空と共に
飛鳥ユニットも装着可能

71式烈空を元にして作った帝国近衛軍専用機体
烈空より大きくなつた理由はスラスターの強化や、内蔵式プロペラ
ントタンクの大型化などが要因である

なお烈空よりも全体的に性能は高く、出自と階級によつて色分けと
機体性能が異なる

一般武家の出身は機体色は烈空と同じくダークグレーが基本色で烈
空より推力は3割ほど高い

白は一般より少し階級が高い所謂、豪族生まれの機体で一般機より
推力は2割ほど強化されていて、センサーも多少高性能なものを作
備している、更に関節強度が2割増しになつていてより格闘戦を重
視しているのがわかる

山吹色は中階級の生まれの機体で推力は白より1割高い程度である、
関節強度は白より3割増しになつていてセンサーもより高性能なものになつている

赤は御3家に仕える者しか使うことを許されておらず、表示は蒼空
高機動型と表示されるほどである、そのため推力は山吹色の3割り
増しになつており関節強度も2割増しになつていて、センサーは更
に高性能のものを装備している

青は御3家しか搭乗できず機体の起動方式も網膜認証であるため完
全に個人専用機である

推力は赤の2割増しで関節強度は3割増しなつておりセンサーも最早別物と言つていいいほど高性能なものを装備している

紫は征夷大将軍専用機で機体の起動方式は音声認証に網膜認証とかなりのセキュリティーになつている

機体性能は最早完璧別物で限界までチョーンナップされている

これらの性能から分かると思うが生産性と整備性は度外視されている

JMS - TYPE 73 (日本以外での表示) 73式MS 龍門

22m

82.8t

武装は全て烈空と共通

専用武装として72式ビームサーべル 春雷しゅんらいが新規生産された

飛鳥・改が専用ユニットとして用意されている

機体性能は蒼空の一般機よりも全体的に3割り増しになつており

機体色の色分け及び性能の高低差はすべて蒼空に準じる

これまた生産性及び整備性は度外視して作られており、近衛軍専用機体として作られた

OZ - 06MS/Mk? リーオーMk?

17.5m

8.3t

武装

110mmマシンガン

ビームライフル

500mm無反動バズーカ

ドーバーガンTYPE2

ビームサーベル×2

N・A・U『ネオアメリカ連邦』が前大戦期に生産した機体、OZ - 06MSリーオーを強化改修した機体、主な改修点は装甲及びフレームに使用されていたチタニウム合金が新しくなり、重さは大

して変わらず防御力が向上している、更にスラスターも強力なものに換装されており、それにあわせて内蔵式プロペラントタンクを大きくしている、更にバッテリーも新型のものに換装されているために、以前より戦闘時間は長くなり、ビームライフルも多少強化されている

武装は対して変更されていないが、大きく変わったのはドーバーガンだろう、ドーバーガンTYPE2はスイッチ一つで実弾とビームの両方が撃てるようになっている

パイロットや地形により様々なバリエーションが存在している

ON - 07AMS / Mk? エアリーズMk?

18 . 3 m

9 . 2 t

武装

100mmチューンライフル

ビームライフル

ミサイルポッド

N・A・Uが前大戦期に生産したON - 07AMSエアリーズを強化改修した機体

主な変更はリーオーMk2と一緒に、武装で新たにビームライフルが追加された為、改修前で指摘されていた攻撃力の貧弱さは多少改善された

設定その3（後書き）

オリジナルMSを考えるのって大変ですね・・・
作者の頭脳フル回転1歩手前まで行って少し頭痛がします
後書きコーナーは今回も割愛させていただきます

激動の予感（前書き）

激動の予感

? side

? 「きらり桜雪の舞う愛に包まれたら」

俺、桜内義之は歌いながら愛機ストライクの操縦桿を握っていた
義之「おっと」

俺は機体を一気に噴射下降させると先ほどまで愛機の居た位置をビームが走った

義之「風間か流石いい腕してるじゃないか」

俺はそう言いながら更に機体を左にずらした

また、ビームが駆け抜ける

義之「ふむ、大体この位置かな？」

俺はそう言ひながら右手に保持していたビームライフルをとある地点に3連射した

数秒後、着弾したのかモニターに爆煙を確認した

義之「ビンゴ！」

俺はそう言ひと機体の高度を下げて旧市街地の廃ビルの間を飛んだ

義之 side END

? side

? 「風間が落とされた！？しかもロックもせずに撃つたですって！」

私、速瀬水月は自機のアストレイ3型のコクピットの中で驚愕する
しかなかつた

? 「大佐は本当に化け物ですね・・・・、距離1万離れた禱子に気付くとは・・・」

そう言つたのはサブモニターに映つていた僚機のパイロットの宗像美冴だった

水月「それには深く同意するわ、まったく相変わらず化け物染みた反応してくれるわね！！」

風間はロックを機体に任せずにマニュアルでやつたのに避けられた、つまり警告音は一切出てなかつたのだ、それなのに義之は避けただけで終わらずに、風間の居た位置にビームを撃ち込んだのだ、恐らくビームの角度で位置を割り出したのだろう

? 「あはは、こちらアテナマム、オーディーンーは現在アテナ1の2時方向位置5000をアテナ隊に向けて高速移動中」

そう言つたのはサブモニターに映つた仕官服を着た少しウェーブが入つた髪を腰まで伸びていて少しオットリした雰囲気が特徴の女性だ、私の幼馴染の涼宮遙すずみやはるかだ

水月「わかつた、・・・アテナ2は右に移動して待機してて」

美冴「了解」

水月「今日こそ負けるもんか！負けたら大台に到達してしまつ！私はそう言つて機体を隠した

水月 side END

第3者 side

義之が機体を廃ビルの間を飛行させるとレーダーに反応が現れた
義之「ん？ ようやく反応が出たか、距離は5000か」

義之はレーダーを見て呟いた

義之「反応はアテナ2つてことは宗像か・・・」

義之はそう呟くと機体を加速させた

そして数秒後

義之「おっと！ やっぱり出てきたか！」

義之は飛来してきた閃光を機体をバレルロールして回避し、その後になぜか後ろ回し蹴りを前に居る機体にではなく後ろに放つた

水月「うきや！」

なんと後ろにビームサーベルを振りかぶった黒いアストレイ3型が

居たのだ

美冴「少佐！」

前に居た宗像機は水月機に当たることを恐れて右に跳躍しながらビームライフルを撃つた

義之「甘い！！」

義之は左手で保持していたシールドで防ぐと右手で下腿部に収納していたアーマーシュナナイダーを抜いて投擲した

美冴「しまった！？」

アーマーシュナナイダーはコクピットに刺さり宗像の搭乗していたアストレイ3型は機能停止した

水月「このーーー！」

水月のアストレイ3型は盾を前にしながら突撃してきた

義之「はい、残念賞！」

義之は機体を宙返りさせながら水月機に踵落としを当てる

水月「がは！」

水月機はうつ伏せに倒れた

義之「はい、終了！」

義之は倒れた水月機にビームライフルを撃ち込んだ

第3章 side END

水月 side

水月「ちくしょう・・・」

私は目の前のモニターを睨みながら呟いた

モニターにはコクピット直撃によりパイロット即死、戦闘不能、シ

ュミレーター終了の文字が点滅していた

水月「大台に行つた・・・」

私は呟きながらシュミレーターから出た

第3者（時々キャラ） side

空気が抜けるような音がしてショミレーターから4人現れた
？「300戦1勝299敗だな、速瀬？」

そう言つたのは外に居た伊隅みちる中佐だ

水月「言わないでください・・・」

私はヘルメットを脱ぎながら言つた、ヘルメット内から腰まで伸ばした髪が出た

それに私的には300敗だ・・・・最初の1勝は義之がわざと負けたからだ

遙「あはは、訓練生時代から義之くんの方が強かつたからね」
そう言いながら来たのは先ほどCP将校をやつていた涼宮遙だ

義之「今回は作戦は良かつたが、まだまだ甘い」

義之はヘルメットを脱ぎながらそう言つた

水月「むきー！その余裕な態度がむかつくなーーーーー！」

水月そう叫ぶ様に言うと義之に飛び掛つた

義之「あー、それは痛そだから勘弁な？」

義之はそう言いながら水月の突進を軽く避けた

水月「避けるなーーーーー！」

水月は再び突撃を敢行した、水泳で鍛えられた身体能力をフルで活かしている

だが義之は次々とくる突進を軽く避けていく

みちる「やめとけ、速瀬では桜内大佐には勝てんぞ？」

みちるは腕組みしながら速瀬を嗜めた

水月「止めないでください！！この異常は1発殴らないと気がすまない！！」

義之「異常つて随分な言い方で」

水月「なによ！文句あるつての！？」

義之「俺は至つて普通のMSパイロットだが？」

水月「あれの何処が普通だつての！？ステルス機の奇襲を見もせずに蹴り飛ばすなんて！？」

そう水月の使用していたアストレイ3型はステルス使用だったので、レーダーには反応しにくく事実、義之のストライクのレーダーにも反応してなかつたのだ

義之「ん？ 勘でわかつた」

水月「勘だと！？ それが異常だつてのよ！？ なんで勘でわからんのよ！？」

水月は頭を抱えながら叫んだ

義之「で？ どうだつた新型のアストレイ3型は？」

そう今回は新型機の試験評価だつたのだ

水月「・・・ 流石新型だけあつて反応もいいですし、V・I・S ≪

音声入力システム≫ も2型より良いですね」

義之が聞いたことに水月はパイロットとして真剣に答えた

先ほどまでのふざけた感じは一切無くなつていた

？「ええ、スナイパー・パックの最大レーダー範囲も格段に上がつてましたね」

そう答えたのは綺麗な黒髪が腰まで伸びた優しそうな雰囲気な女性

だった、名前は、風間禱子かざまとうじと言う

美冴「ただ、まだ動きが硬い部分が幾つか有りましたね」

義之「ふむ、まあそれに關しては追々直させるとして、次は・・・」

？「同志桜内」

義之と麻耶と伊隅以外「「「「うわあ！？」」」

いつの間にか天井の通風孔から1人の男が宙吊りの状態で居た（あれデジヤヴュ？）その男の名前は・・・

麻耶「杉並すぎなみあんたね・・・」

義之「もう少しまともな登場の仕方できんのか？ それに大分その登場の仕方読めてきたからな？」

遙「つて今は諜報部所属の杉並くんか～、あーびっくりした」

そうこの不審者としか言えない男が杉並である

杉並「ふむ、次からはもう少し趣向を凝らしてみよう」

杉並以外「「「いや普通で良いから」「」「」「」「」

全員で突っ込んだ

そして一拍おいて義之は杉並に聞いた

義之「で、諜報部外務2課所属の杉並少佐殿、なにか話があるんじやないか？」

杉並「うむ、3つほどな」

麻耶「3つ？」

義之「で1つ目は？」

杉並「同志桜内よ、最近ストライクに不満があるんじゃないかな？」

義之「・・・どうしてそう思った？」

杉並「ふ、同志桜内がシユミリーダーから出た際に顔を見たんだが

な、少し考える様子だったからな違つか？」

義之「・・・誤魔化せたと思つたんだがな・・・」

みちる「つてことは大佐？」

麻耶「義之？」

義之「ああ、確かに最近ストライクの動きが以前より遅く感じる」

水月「あらり、もしかしてOSの設定ミスつたんじゃないの？」

水月が近づきながら言った

義之「いやそれはないな、OSはずつといじつてないし」

麻耶「ええ、それは間違いないわ、機就き整備長の私が月に1回は

総確認するけどOSのパラメーターは変わらないわね」

水月「となると・・・」

杉並「ストライクが最早同志桜内の操縦に追いついてないんだな、まあストライクも最早2年前の機体だから仕方あるまい、だが喜べ、今、天枷研究所で新型機が作られている」

杉並以外「「「新型?」「」「」」

義之「新型つて、3型やムラサメじゃなくてか?」

杉並「ふん、その何処が新型だ、今お前の部隊に配備されているではないか」

麻耶「いや、十分新型なんだけど・・・」

麻耶は呆れながら呟いた

杉並「それに新型はGタイプだ、しかも3機も」

義之「ガンダムタイプが3機もだと！？」

義之は純粋に驚いた

杉並「ただ、何時完成するかはわからん」

義之「なるほどな、他には？」

義之は先を促した

杉並「うむ、コーラシア連合に怪しい動きがあるのと、コーラシア連合がGATシリーズの開発に成功したようだ」

みちる「なんだと！？」

義之「コーラシア連合がついにガンダムタイプの開発に成功したか・

・・・

義之は口元を左手で覆いながら呟き、みちるは驚いた

杉並「流石に詳しいスペックなどは分からなかつた、俺より先に入つた奴からの連絡が途絶えたからな」

杉並の言つた”連絡が途絶えた”の言葉が指示示すのは・・・

義之「そうか・・・・、遺族には遺書や手当金は？」

杉並「先日既にな・・・・、しかしやはり仲間が死ぬのはなかなか慣れんな・・・・・」

杉並は俯きながら言った

義之「慣れたくないな、本当は・・・」

それは全員同じだった、しかし慣れないと心が死んでしまい人として壊れてしまう

杉並「このUSBに機体の名前と特徴が書かれている、仲間が送つてくれたのを纏めたものだ」

そう言って杉並は懐から1個のUSBメモリを義之に渡した

義之「確かに受け取つた、それで、最後の情報は？」

義之は再び杉並に聞いた

杉並「うむ、宇宙なんだがな、L4コロニー群でどうも怪しい動きがある」

みちる「L4コロニーで？」

麻耶「L4コロニーは確か、コーラシア連合の管轄ね」

義之「L4コロニー・・・、コーラシア連合・・・、つ！ダル

クスか！」

杉並「ふ、流石は同志桜内だな、正解だ」

遙「コロニー・ダルクスがどうしたの？」

遙は首を傾げながら聞いてきた

義之「これは俺の予想だが、武装蜂起を行そとをしているのか？」

麻耶「え！？あのダルクス人が！？」

杉並「ああ、間違いない、新型機も確認したし、あれは明らかに軍の練習だった」

義之「まあ、それも仕方ないだろうな、それだけの理由があるからな・・・」

義之の言つ理由とは今から約50年前、初音島が日本帝国から独立したばかりの頃に起きた事件が発端である

新太陽暦20年人類が宇宙に進出して約30年が経過したころ宇宙だけでなく地球をも震え上がらせた事件が発生した、それはコーラシア連合では通称「ダルクスの災厄」と呼ばれたバイオハザード事件だ

それはある日突然起こつた、最初はL3コロニー群の1つのマンションから始まつた、ある朝幼稚園の送迎バスが到着した時園児どころか親すら誰1人居なかつた事から気付いた、警察と消防がマンションの1室に入るとそこにあつたのは住んでる家族全員の死体だったしかも傷跡すら一切なく直前まで生きていたことが手に取る様に分かつた、そして警察は全ての部屋を調べたが結果は全て一緒だつたマンションの住人が全員同じように死んでいたのだ、警察は当初こ

れは集団の一酸化炭素中毒による死亡と適当に判断した

しかし事件はこれは始まりに過ぎず続いた、次は近くに住む家族が死んでいた、その次はその家族の知り合いが同じように死んでいたそして死亡人数がコロニーの総人口の5%に到達した時によくやく違うと分かつたのだつた

遺体を詳細に調べた結果、未知のウイルスを検出したのんだった、そこからは爆発的に死亡人数が増えあつという間に1つのコロニーが壊滅状態になつたのだ、それを受けてL3コロニー群を管理していたN・A・UはL3コロニー群の閉鎖を決定した

しかし事件は終わらなかつた、次はL4コロニー群そしてL5コロニー群と続いて被害にあり、次は月に、そして最後は初音島が管理するL2コロニー群で事件は発生した

死者が続々と出るなか、初音島のウィルスの博士号を含めて複数の博士号を持つ芳野さくらをはじめとした研究者達は早急にワクチンの精製を始めた

そしてワクチンが完成すると朝倉音夢あさくらゆめはそれをツテを使い国際医療機関に送つた

それによりバイオハザードは3ヶ月で終息した、しかし当時のコロニーの全総人口の約4割が死亡した

その未曾有の大事件のなかほど被害を受けてないコロニーがあつた、それがL4コロニーのダルクス1～3だつた

それを知ったコーラシア連合は声高に『今回のバイオハザードの真犯人はコロニー・ダルクスのダルクス人共だ!!』と、もちろんそれは根も葉もなく根拠もない暴論だ

しかし世間は憎しみのはけ口を求めていたようで、コーラシア連合の暴論に世界は賛同した

しかしそれに待つたを出したのは初音島と日本帝国を含めたJEUだつた

理由は『コロニー・ダルクスには金屬精製技術及び研究機関はあるが、ウィルス関係の研究施設は存在せず、尚且つダルクス人には先天的

にウイルスに対する抗体が存在していた、更に彼らはウイルスに関する知識は乏しい』という理由だ、しかも事実であった

それによりN・A・Uとアフリカ共同機構は納得まではいかないまでも引いてくれたが、ユーラシア連合は引かずに寛容に判断を下したのだった

それは”コロニー・ダルクス生まれの者は姓を名乗るのを禁ず”と”コロニー・ダルクスは今後一切本国の政治に関わるのを禁ず”というものだった

しかもユーラシア連合はコロニー・ダルクス生まれ、所謂ダルクス人に対して苛烈と言える弾圧を行つた

当然ダルクス人達は猛抗議した、しかしユーラシア連合は一切無視した、それに業を煮やしたダルクス人はデモ行進を行つたそれに対してユーラシア連合は最悪の方法で対処したのだった、それは圧倒的武力によるデモ行進者の圧倒的殺戮だった

それによりデモ行進に参加したダルクス人の内9割が死亡した、しかもユーラシア連合はそれだけで飽き足らず、見せしめとして参加したダルクス人の親族を処刑したのだ

それによりダルクス人は報復を恐れてデモ行進を止めた

そして、それからはユーラシア連合は長年にわたりダルクス人を虐げてきたのだ、奴隸のように扱いともな人権すら与えず、ダルクス人というだけで殺したなどが日常茶飯事になつてている状況だそしてそれにより15年前に1回デモ行進があつたがそれも圧倒的武力により制圧したのだ

麻耶「本当にユーラシア連合は戦争をしたがつてるとしか思えないわね・・・」

義之「ああ、武装蜂起しようとしてるダルクス人の気持ちもわかる、それに今の初音島のアストレイタイプの開発には彼らが居ないと難航してたはずだしな・・・」

アストレイに使用されている発泡金属は独自の金属精製技術を有するダルクス人の協力が有つたからこそ成り立つたと言つても過言ではない

なぜダルクス人の技術が有るのかと言つと答えは簡単だ、ユーラシア連合の領地からダルクス人が初音島に亡命してきているからだ更にダルクス人は基本的に手先が器用で勤勉なために、練習や勉強をすればすぐに技術を習得するために初音島でも各分野に分かれて広くダルクス人は重用されている、もちろん軍でもだ
麻耶「でもダルクス人には”武力による報復はしない”って暗黙の了解があるよね？」

義之「恐らく我慢の限界が来たんだろう、それに武装蜂起したのは1部の奴らだろ？」

杉並「その通りだ、同志桜内よ」

義之は壁に寄りかかって一息つくと

義之「これから世界は一体どうなるんだ・・・・
と腕組みしながら唸るように呟いた・・・・・

激動の予感（後書き）

はい、駄作者による最新作です
気がついたら7500アクセス突破ですよ
読んでくれてる皆さんありがとうございますーー

ではここからは後書き「一ノナ一出擊せ！」
いく
けいゆうしき

作者「はい、ここからは私作者の京勇樹と！」
雪音「アシスタントの田原雪音でお送りいた
たばゆきね

作者「まあ、スタートはこゝまでにしどこで」

以前壊れた壁は修理済みです

美夏「呼ばれてきた天枷美夏だ」
あまかせみなつ

作者「では早速ですが」ちらりと読んでください。

美夏「ふん、一いつ切せが限一いつ切せ? 作者

雪音「はい、よろしくお願ひします!」

ではスタート！！

美夏「別にいいじゃないか、あんただけじゃないよ・・・、私に
だつて有つたよ帰りたい場所くらい・・・、私にだつてあつたよ・
・・・」

作者「はい、ありがとうございました」

新編・心ハトコたけ

美夏「なんか心に響くセリフだったな……」
作者「はい、これはある戦争によつて家族と家を失

のセリフです

美夏「戦争か・・・、美夏達にも無関係ではないな・・・」
雪音「うん、そうだね・・・、でも失わない為に軍人になつたんで
しょ？」

美夏「うむ、その通りだ！」

作者「では、今回はここら辺で」

全員「・・・また次回まで、さよならー！」

作者「珍しく壁が壊れなかつた・・・、あそつだ、相変わらず1通
もメッセージやこの後書きコーナーへの要望が来ないので寂しいで
す・・・、皆さん是非ともお願ひします！！！」

設定1の続き

(208訓練部隊編) (前書き)

設定1の続きです
多少ネタバレ注意

設定1の続編（208訓練部隊編）

織斑一夏、訓練生から初音島統合防衛軍特務隊ワルキユーレ隊所属になつた新任少尉、篠ノ乃箒と凰鈴音は幼馴染であり同期の訓練生、とある理由で初音島に男装して訓練生に紛れていたシャルロット・デュノアを女の子の姿に戻してあげたりと何かとフラグをよく建てる、一夏本人は知らないが208に所属している女子は全員一夏に好意を寄せているが本人が鈍感で朴念仁の為気付いておらず女子達は密かに一夏に「朴念仁オブ朴念仁」や「キングオブ朴念仁」などのあだ名をつけている、教官の織斑千冬は姉で時々千冬姉と言つてはシバかれる、コールサインはアストレア1で搭乗機は試験評価機体のアストレイ3型の近接戦重視にカスタムされたもの

篠ノ乃箒、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキユーレ隊所属になつた新任少尉、織斑一夏とは幼馴染で篠ノ乃家が嘗んでる剣道場の元同門、家が剣道道場のため近接格闘戦はかなりの腕前、織斑一夏にほのかな恋心を持つていて彼女の性格の為になかなか告白できないで居る、一夏に嫁宣言をしたラウラが来た最初は敵対心を持っていたが今は和解して友と認識している、コールサインはアストレア2で機体は一夏と同様近接戦闘重視にカスタムされたアストレイ3型

凰鈴音、訓練生から初音島統合防衛軍特務隊ワルキユーレ隊所属になつた新任少尉

織斑一夏に好意を寄せているが彼女の強気な性格が災いして告白できなくて居る、家族は3人家族で家は中華料理屋を経営している、自分の腕に相当自身があり時たま上から目線になるが基本素直、コールサインはアストレア3で機体は近中特化型にカスタムされているアストレイ3型

セシリ亞・オルゴット、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキュー隊所属となつた新任少尉

元々はイギリスの資産家の家の生まれだつたが両親はタイタン戦争の時に亡くなつており初音島に来た理由はメイドのチャエルシー・ブルンケットの助言でも有り両親から引き継いだ遺産を守るためだ、初音島に来たとき初めて会つた一夏に一目惚れしてしまい、一夏を追つて訓練生に志願したとちよつと不純な動機だが彼女の体力面は恵まれていて更に教官である織斑千冬おつばちかぶの教育もあって狙撃適性で開花した、コールサインはアストレア4で機体は彼女の狙撃適正に合わせたスナイパー・カスタムのアストレイ3型

シャルロット・デュノア、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキュー隊所属となつた新任少尉

本来はフランスの軍需企業のデュノア社の令嬢にあたるが彼女は本妻ではなく愛人の娘であり、母親はタイタン戦争で戦火に巻き込まれて亡くなつている、引き取られたのはタイタン戦争終結後半年経つてからで本人はデュノア社にはあまり興味は無かつたが1人で生きるのは到底無理であつたため引取りに来た父親の部下についていつた、しかし待つっていたのは義理の母親の激しい虐待と新型機体のテストパイロットという役目のみで父親とは1回しか会つていない、初音島に来た理由は父親に『初音島の技術を盗んでこい』という命令でその時になぜか無理やり男装させられた、一夏にバレたのは偶然でお風呂上りの時に見られてしまつたのが理由、最初は騙してごめんと謝罪して拳銃自殺しようとしたのを一夏に止められて一夏に『俺が居場所になつてやる…』と言わされたので亡命という形で初音島に移住した

そして一夏に恋した乙女のシャルロット・デュノアは一夏と共に生きると決心した、そして今の家は一夏と千冬の好意で一緒の家に住んでる

尚移住した際にフランスのデュノア社にはシャルル（男装時の名前）は訓練中の事故で亡くなつたと偽りの情報を流した（義之と杉並が計画して芳野さくらが結託した）コールサインはアストレア5で機体は彼女の器用な操縦にあわせて基本近中距離のマウントラックためにカスタムされた万能型アストレイ3型

ラウラ・ボーデヴィッヒ、元JEUドイツ軍特殊部隊シュヴァルツエア・ハーゼ通称く黒ウサギ隊の隊長でJEUでの階級は少佐だったが新太陽暦73年3月にコーラシア連合に攻め滅ぼされた後初音島に亡命して訓練生に志願した、志願した理由はコーラシアに復讐するためでありその為には手段は選ばなかつた、そしてその為に一緒に亡命した仲間さえも道具扱いしようとしたが、それを尊敬していた千冬に『そんなのではお前は一夏には勝てない』と言われたので一夏にMSで決闘を挑み最初は押していたが、一夏に無線越しに説教され尚且つMS戦でも負けた、そして保健室で本音で語り合つてから一夏に惚れた、その際にJEUの副官だったクラリッサ・ハルフォーフに間違つた日本知識を刷り込まれた結果が一夏に対する口付けと共に言つた『お前を私の嫁にする!』宣言である、そして一夏に仲間の大切さと力の意味を聞いて一夏に対する認識をいい方向に改めた、初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属になつた新任少尉となつた、コールサインはアストレア6で機体は基本近中距離だが遠距離用に肩にデュエル_{アサルトショットアウェイ}ASのシヴァを基にした折りたたみ式レールカノンを装備したアストレイ3型

更識簪、訓練生から初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属になつた新任少尉、ワルキューレ隊に姉の更識櫛無_{さらしきたてなし}が居る、最初は他の訓練生とは一定の距離を置いていて内気な性格だったが一夏の努力により他の訓練生との距離は無くなり、更に嫌いだつた姉とも和解できた、よくある勸善懲惡の子供の特撮物の戦隊物と魔法少女系のアニメが好きで見る、プログラミングや機械をいじるのも得意、

ラウラとは蕎麦のかき揚げでよく論議しあう（本人曰くタッpri全
身浴派かさつくり派で、因みに簪は全身浴派、ラウラがさつくり派
、コールサインはアストレアフで機体は基本遠距離からの火力支援
のMLRS（多目的ミサイルランチャー）が得意だがオールレンジ
対応のアストレイ3型

設定1の続編 (2008訓練部隊編) (後書き)

「はい、書きました!! そして気付いたらアクセス数8000突破しました!! 嬉しいですよ!!!!」

つてことで後書き「一ナーニャ参る……」

作者「はい、始まりました……」の「一ナーニャ」は私作者の京勇樹と一・
雪音「毎度おなじみアシスタントの田原雪音たはらゆきねでお送りします」

作者「はい! では今回のゲスト出でませ……」

純一「どうも、朝倉純一あさくらじゅんいちじゃ

雪音「はい、氣をつけて座つてくださいね?」

純一「うむ、ありがとうございます」

作者「では早速で、すいませんがこれをお願いします」

純一に紙を渡す作者

純一「ふむ、これを読めばいいんじやな?」

雪音「はい、お願ひします」

ではスタート!!!

純一「種は飛んだ……。これで良い……。オープも世界も……」
「……ヤシラのいいところはさせん!」

作者「はいーありがと!」やれこました……」

雪音「どうでした?」

純一「ふむ、凄い覚悟を感じたな」

作者「はい、それはガダムS.E.Dのオープ 合奏長国ごうそうなぐにの前代表
が自國と共に自爆する際に言つたセリフです、いやーあの瞬間は眼

が潤んだ

雪音「では今回せいいじまでです」

全員「「「また次回までわよーな~い~~~~」」」

選定試験前編（前書き）

ここから物語りは一気に加速します

選定試験前編

? side

? 「さて、これが最後の実技試験だ・・・・・」

俺、つちみりん土見稟は自分の機体の今は型落ちで主力機を譲ったM1アストレイの中でも駄目だった

とちょうどその時コクピット内に電子音が聞こえた

? 『2060-1より206全機! 試験開始まで後3分よ! 準備はいい?』

そう言つてきたのは部隊長の涼宮茜すずみやあかねだ、髪は肩の辺りで切りそろえて、それをヘアバンドで纏めてる活発な少女だ

? 『2060-2異常なし! 何時でも行けるよ! 茜ちゃん! !』

そう言つたのは、一応副長を務める築地多恵つきじたえだ、髪は背中半ばまで伸ばしてそれを後頭部で右側に髪留めで纏めている、時々変な方言が出るのが特徴で・・・・・若干百合気味だ

稟「こちちら2060-3異常なし、オールグリーン! 何時でも行けるぜ!」

俺は機体の状況と何時ものセリフを言つた

? 『2060-4異常なし、何時も通り! 支援は私に任せても』

と若干緊張感が抜けるように言つたのは大体俺と2機連携を組む柏木晴子しわきはるこだ、髪はショートカットで切りそろえており、身長は高めで結構スタイル抜群、運動神経も抜群で隊内のムードメイカーを勤める、割り切った性格も持ち併せている

? 『2060-5異常なし、何時でも行けるよ!』

そう答えたのは明るい性格の高原陽子たかはらようこだ、隊内では明るい性格で柏木と同じくムードメイカーを勤める子で、髪は腰まで伸ばしたのをポニーtailにしている

? 『2060-6異常なし何時でも行ける!』

そう答えたのは活潑さが風紀委員的な役回りの子で名前は、麻倉陽あやしゅう

菜で、通称ひなと呼ばれる、髪はベリーショートで切りそりえてある、少しクセつ毛なのか常に外に撥ねているのが特徴だ

晴子『で茜？ 香月教官に言われたことどりする？』

と柏木が涼宮に聞いた、教官に言われたことって確か・・・

茜『あー、確かに207を全滅させただけ？』

多恵『でも、207はあの神宮司教官の教え子達だよね！？あの狂

犬の！…』

狂犬つてのは神宮司教官につけられた2つ名だ、何でも鬼のようなシゴキに昔の訓練生がつけたあだ名らしい

稟「どうせまたクダラナイ賭けでもしたんだろ？」

香月教官と神宮司教官はなんでも昔からの知り合いらしくて時々俺達を賭けに巻き込むのだ、はた迷惑極まりない

陽子『あ～それありえるねー、確かに試験直前になんか2人で話し合つてたよ？』

陽菜『それで確定したね、完全に巻き込まれた』

やつぱりね、勘弁してほしいぜまつたく

茜『うーん、とりあえず当たった敵と片っ端から戦い続けて、お互

い生き残つたらやりあつてことで、OK？』

涼宮が薄く笑いながら言った、やれやれ涼宮の奴乗ってきたな？仕方ない

稟「それでいいんじゃね？』

晴子『異議なし』

多恵『茜ちゃんに従つよー』

陽子『右に回じく』

陽菜『それで行こう』

おお、全員一致しましたか

茜『んじゅ、全員行くよー』

全員『』『』『了解！』

そんじや始めますか！

? side

俺、白銀武しろがねたける

俺、白銀武は自機のM1アストレイの中で眼を瞑つて軽く眠つていたとその時、コクピット内に電子音が鳴り響いたので俺は眼を開けて姿勢を正した

?『20701より全機！試験3分前よ！準備はいい？！』

そう言つてきたのは眼鏡に少し太い眉毛が特徴の女の子だった、名前は榎千鶴えりせちづると言う俺は委員長と呼ぶ

?『20702機体は正常だ！何時でも行けるぞ！』

そう言つたのは勝気な瞳に少し古い侍みたいな言葉遣いが特徴の俺の彼女で御剣冥夜みつるめいやだ、俺は当たり前に冥夜と呼ぶ

?『20703オールグリーン！何時でも出撃るよ！』

そう言つたのはボーアイッシュな印象を与える小柄な女の子だ、名前は鎧衣美琴よろいみことと言う、俺は美琴って呼ぶ

?『20704機体正常・・・異常なし』

そう答えたのは不思議な雰囲気の女の子で、まるで孤高な猫を彷彿させる雰囲気をもつた子で名前は彩峰慧あやみねいだ、俺は彩峰と呼ぶ

?『20705機体異常なし、何時でも行けます！』

そう答えたのは猫を彷彿させる髪型に首に鈴をつけた小柄な女の子だ、名前は珠瀬王姫たませいみきといふ、俺はたまと呼ぶ

武『20706異常なし！何時でも行けるぜ！』

俺は機体の状況を伝えて何時ものセリフを言つ

とその時だった、メインモニターにサブウインドウが開きそこに映つたのは・・・

?『皆～お願ひ～夕呼ゆうかの部隊にだけは負けないで～！』

と言つたのは俺達の教官の通称狂犬こと神富司まりも教官だ、俺はまりもちゃんと呼ぶ、時々シバかれるが

俺達にとつては良き教官で厳しいが優しい教官で全員慕つてゐるが

武「まりもちゃんどうしたんだよいきなり？」

なんか様子がおかしい、いつもの凜然とした態度じゃないな

王姫『そうですよ～どうしたんですか？』

まりも『負けると、あんな格好で・・・・、うう・・・』

といつてまりもちゃんは頭を抱えた

それを聞いて俺は大体予想出来た、つまり・・・

武「また夕呼先生と賭けしたんですね？」

まりも『そうなのよ～、うう・・・有明はいや――――！』

有明つて秋葉原エリアと隣り合わせであるアソコか、あ～大体予想

出来た

冥夜『神宮司教官落ち着いてください』

武「そうそう要是俺達が勝てばいいんだからな！」

俺は右手の親指を立てながら言った

まりも『白銀君～お願いね～』

まりもちやんが両手を組みながら言つてきた

千鶴『それじゃ神宮司教官の面田を守るためにも勝つわよ～』

「『『『『了解！！』』』』

そんじや出撃ぜ～～

武 Side END

? Side

おじもらいちか

俺、織斑一夏は緊張しながらも白機のM-1アストレイの中では時計を見た

一夏「そろそろだな、・・・よし！」

俺は深呼吸してから無線のスイッチを押した

一夏「2008年より2008全機準備はいいか？試験3分前だ！」

?『20802機体正常！異常なし！何時でも行けるぞ！』

そう答えたのは腰まで伸ばした黒髪をリボンでボニー^{のまつりのまつり}テールにした侍を彷彿させる雰囲気を纏う俺の第1幼馴染の篠ノ之^の第¹筆だ、俺は第と呼ぶ

?『20803機体異常なし！何時でも行けるわよ！』

そう答えたのは小柄な体躯にツインテールが特徴の俺の第2幼馴染の鳳鈴音^{ファンリソイン}だ、俺は鈴つて呼ぶ、鈴鈴つて呼ぶはNGな、ちょっとトラウマがある、後は貧乳つて言うと羅刹のごとくキレる

?『20804機体に異常はありません、何時でも行けますわ！』

そう答えたのは腰まで伸ばした金髪と両前髪の縦ロールと青い瞳が印象の淑女と呼べる女子で名前はセシリ亞・オルコットと言つ、俺はセシリ亞と呼ぶ

?『20805機体異常なし！何時でも行けるよ！一夏！』

そう言つたのは肩で切りそろえて少しだけ伸ばした後ろの髪を髪留めで纏め、エメラルド色の瞳に中性的な顔立ちが特徴の女の子で名前はシャルロット・デュノアと言つ、俺はシャルと呼ぶ

?『20806システムオールグリーン！何時でも行ける！』

そう答えたのは小柄な体に腰まで伸ばした銀髪に左目の眼帯に右目の赤眼が特徴的な女の子で名前はラウラ・ボーデヴィッヒと言つ、俺はラウラと呼ぶ元々はJEUの特殊部隊隊長だ、時々間違つてる日本知識が出るのが困る、犯人は誰だ！（作者、クラッリサ・ハルフォーフだ！）

?『20807機体正常、不具合無し・・・・行ける！』

そう言つたのは水色の髪を肩のあたりで切りそろえているが少しクセつ毛なのか内側に向いてる、内^{いん}気^きな性格に眼鏡（伊達、小型ディスプレイらしい）が特徴の女の子で名前は更^{さら}識^{しき}簪^{かんざし}といつ、俺は簪つて呼ぶ

一夏「よし！全機確認した！今回の試験は絶対負けられないからなー！」

全員『わかつてる！（ますわ！）』『』『』『』

とその時メインモニターの真ん中に見慣れた顔が映つた、その人物は？『お前ら！何時も通りに行けば勝てる！いいな！！』

?『お前ら！何時も通りに行けば勝てる！いいな！！』

おりむらちふゆ

一夏「分かつてゐつて、千冬姉つと、織斑教官！」

千冬『ふん、今のは聞かなかつたことにしてもやる、織斑』

よし、セーフ！俺は心中で両手を広げた

ラウラ『教官！教官に勝利を譲譲します！』

「なにかいいやつでしょ

一夏&ラウラ以外 『 『 『 『 『 訓練の成果

總の結果を見ても、

おお 黒ビワの木で
されそば心休む

一 夏以外
一 夏ぐだかにたいじと並んでる(まわれ)

፳፻፲፭

なぜに!?

千冬 しかし今回の試験なんかありそうだな、
(ボソリ) 桜内大佐

の動きが今まで無かつたのが気になる』

ん？千冬姉なんて言つた？最後聞き取りづらかつた

千冬『とつあえず、お前ら最後まで氣を抜くなよー！いいな！？』

全員「『了解...』」

さて勝ちに行きますか！！

—夏 si d e E N D

? side

卷之三

私クラリッサ・ハルフォーフは機体内の時計を確認しながら呟いた

クラリッサ「21001より210全機準備はいいか!?」

?『21002機体正常何時で走行けます!』

そう答えたのは部隊最年少の子で名前はレティシア・ライゼンバッ

ハだ、今やラウラ隊長（元隊長だ！）も含めて部隊全員の誇りとなつてゐる眼帯を今日もつけてる

?『21003オールグリーン！行けますよーお姉さま！…』

お姉さまと呼んでくれたのは（妹ではないからな？）クリステイアーネ・ホーエンフュットだ、部隊内では年長者でよく私の副官を勤める

?『21004異常なし動けます！』

そう簡潔に答えたのはマルギッテ・エーベルハイトだ部隊内では年少組みだが冷静な判断力を持ち合わせており頼りになる

?『21005システム正常出れます！』

そう答えたのはエルトリンド・アーシュベルクだ、部隊内ではムードメイカーでよく部隊を盛り上げてくれる

?『21006システムオールグリーン行けます！』

そう言つたのはエルシア・ハーヴェンスだ、エルトリンドと一緒によく行動してて小柄なため部隊内ではマスクット的な役割だが広い視野を持つてるため頼りになる

?『21007オールグリーン動ける！』

そう若干男口調で答えたのはライラ・フリードリヒで、部隊をよく纏めてくれて私が居ない時はご意見番になつて頼りになる

クラリッサ「今回の試験は全訓練生部隊同時参加のバトルロイヤルだ！」

全員『…………はー！』『…………』

クラリッサ「今回の試験をなんとしても合格して我々を受け入れてくれた初音島に恩を返すぞ！！！」

全員『…………了解！！』『…………』

クラリッサ（今回ばかりは隊長といえライバルですよー！）

私はそう気合を入れて機体の中で試験開始の合図を聞いて

クラリッサ「210訓練部隊！出撃ぞー！」

全員『…………了解！！』『…………』

私は機体のスラスターを噴かして機体を進ませた

クラリッサ side END

? side

俺、桜内義之さくうち よしうきは機体から降りて廃ビルの屋上から電子双眼鏡で試験会場全域を見ていた

義之「おーおー、やつてるねー、なつかしいことで」

このバトルロイヤルは、MSや戦闘機、多脚戦車で全訓練生対象で行われる1大イベントだ

義之「お? 201が全滅したか、開始5分で全滅かーこりや1からやり直し確定だな、やつたのは208か、麻耶まや208のデータを」
俺はCPコマンドポストを勤めている恋人の沢井麻耶さわい まやにデータを送るように頼んだ

麻耶『了解、今送るね』

少ししたら手元に置いてあつた情報端末にデータが来たので俺は確認した

義之「ふむ、208は遠中近のバランスが良いな、部隊に入れてもそのまま運用するか」

俺は送られてきたデータを見ながら決めた、この部隊マジでバランスが良いな、逆に下手に崩したら逆にバランスが悪くなりそうだ
義之「さて、今回選んだ訓練生達はちゃんと生き残ってくれるだろな?」

そうじゃないと今回のサプライズ意味無くなるんだがね?

俺はそう思いながら戦況を見守った

数10分後

義之「む、202が全滅したか、やつたのは・・・206か、麻耶
206のデータを」

麻耶『了解、今送るね』

そして206のデータを確認した俺は気付いた

義之「ん？土見訓練生が囮役をやつてるな、しかも被弾0で撃破数
は3機か」

囮役は大体その部隊で腕が劣つてゐる奴が担当する、そういう意味で
は確かに土見訓練生は劣つてゐるが勘が鋭い、なるほど囮に適してゐ
る義之「で、2機連携を組む柏木訓練生は狙撃適正に視野の広さが売
りか」

俺は2人で動かすことを決めた

義之「さて、そろそろ準備しますか、ちょうど生き残つたのも選ん
だ訓練生くらいになつたし、時間的にもあれだし」

この試験は訓練生には知らされてないが実は残り時間が20分切る
と試験会場全域に強力なジャミングが発生して、スナイパーみたい
に強力なレーダーを搭載してないと100mくらいしか効かなくな
るのだ

俺は膝たち状態で待機モードにしておいた愛機エールストライクに
乗り込んだ

すると通信が入った

?『本当にやるんですか、兄さん？』
そう聞いてきたのは妹分の朝倉由夢だ
義之「おう、やるよ、何言つてんの？」

俺は言いながら機体を待機モードから立ち上げたすると画面に

General

Unilateral

Neuro-Link

Dispersive

Autonomic

Maneuver

の文字が映つた、因みに頭文字をとつてGUNDAMでガンダムと読む

そしてストライクは立ち上がった

そしてスイッチを押すとストライクの装甲が鉄灰色から鮮やかな赤青白の所謂トリコロールに変わった

義之「さてと、オーディーン1からワルキューレ隊各機準備はいいか！？」

みちる『オーディーン2準備完了行けます』

そう答えたのはMS隊の副官の伊隅みちる中佐だ、今回は俺とは別の機体と組んでる

水月『アテナ1準備完了、何時でも行ける!』

そう答えたのは今回伊隅中佐と2機連携エレメントを組んでる、速瀬水月だ

?『オーディーン4準備完了何時でも行けますよ』

そう答えたのはバスターに搭乗している橘菊理たちばなくじだ、今回はある3機と行動を共にしてもらつてる

?『ラウンズ1機体正常何時でも行ける!』

そう答えたのは腰まで伸ばした赤い髪をリボンで纏めてポニーテール状にしているリーダーシップとカリスマ性溢れる女性だ、名前は草壁美鈴くさかべみすずという

?『ラウンズ2オールグリーン!何時でも行ける!』

そう答えたのはラウンズ隊の副官を務める皐月駆さつきかけるだ、菊理と付き合つてゐる、髪は耳が見えるくらいで切りそろえてる

?『こちらオーディーン5機体はオールグリーン、何時でも行けるわよ～』

そう陽気に答えたのはショートカットに切りそろえた水色の髪で少しセツ毛なのか外側に撥ねついて不思議な雰囲気とカリスマ性と人を惹きつける二二かを備えてる女性で名前は更識楯無さらしきたてなしとい、機体は前大戦時に搭乗していた、ガンダムアストレイ・ブルーフレームを改修強化したガンダムアストレイ・ブルーフレームセカンド・

リバイだ

?『アイギス1準備完了、何時でも出撃る!』
でれ

そう言つたのは中性的な顔立ちに少し小柄な体にショートカットの黒髪が特徴の男性で、名前は如月修史きさらぎしゅうじという、重要なのでもう1回言つが”男”だ

?『アイギス2準備完了』

と簡潔かつ、無表情かつ無感情に答えたのはアイギス隊の副官の眞田設子まなだせつこだ、腰まで伸ばした紫色の髪に赤紫の瞳が特徴的な女性だが、かつては修史の敵として現れて戦つたが仲間と思っていた組織に裏切られた時に修史に助けられてそれ以来、修史の副官を務めている

?『アイギス3準備完了、何時でもいいよ』

そう陽気に答えたのは腰より少し高い位置で切りそろえた緑色の髪茶色の大きい瞳に右の八重歯が特徴の女性だ、名前は穂村有理ほむらゆりという、元々は別組織の諜報員だつぶんだったがトカゲの尻尾きりにあいそれを修史の養父の神崎恭一郎かんざききょういちろうが相手を脅して引き抜いた、情報収集が得意で、このアイギス隊の3人で通称くアイギスの3枚櫛さんまいく』と呼ばれてる

?『ウルド1準備完了している』

そう答えたのは左隣に待機している機体からで、機体は金色と黒色が混じつている機体で、名前はガンダムアストレイ・ゴールドフレーム天アマツである、パイロットは何時も被っている牛柄の帽子と同じ配色のヘルメットを被つている小柄な女の子で名前は天枷美夏あまがせみなつだ

由夢『ウルド3準備完了します』

そう答えたのは右隣に待機している由夢だ、機体は両手でハイブリットスナイパーライフルを保持している

そう今回参加した全員が言つと

麻耶『試験会場全域にジャミング確認!-!』

と言つ麻耶の言葉が聞こえたので

義之「そんじゃ、新たなエインフェリアとワルキューレの選定を始めるぞ!-!』

と並びと

全員『『『『了解！』』』

『『『』』』

と聞こえた

そんじや始めるか！－！

選定試験前編（後書き）

うーむ、長かった、ここから物語りは一気に加速していきますからね？

そして気付いたら9000のアクセス突破してました！

嬉しいです！…皆さんサンクス！！

さてここからは後書き「一ノ一」始まる！

作者「はい！ここからは私作者の京勇樹けいゆうきと！」

雪音「アシスタントの田原雪音たぱらゆきねでお送りします」

作者「では今回のゲストを召喚！…」

武「召喚された（？）白銀武しろがねたけるだ」

雪音「よつこそ後書き『混沌』『一ノ一』へ

武「なんか今嫌な言葉が聞こえたぞ…？」

作者「気のせいです」

雪音「では今回はこれね」

武に紙を渡す雪音

武「ん？これを読めばいいんか？」

作者「うむ！頼んだ…！」

ではスタート…！

武「その命は君一人の物だ！だから君だ！彼じゃない…！」

作者「はい、終了！」

雪音「どうだつた？」

武「なんか、こう心に響いたな、人は代用品なんて居ないってこと

だな

作者「うむ、その通り。」

雪音「では今回はここまでね」

全員「『また次回までさよーな』」

文才が欲しい・・・

選定試験後編

稟 side

俺達は少し混乱していた、なぜなら

茜『ちよつとどうなつてんのよー? ジャミングが発生するなんて聞いてないわよ! ?』

そうなのだ、恐らく試験会場全域なのだろう、ジャミングが発生しているのだ、おかげで大体100mくらいしかレーダーが効かない

晴子『茜いいから落ち着いて、これは恐らく予定通りなんだと思うよ?』

稟「俺もそう思つ、恐らくはこの状況下でも冷静に判断し、行動できるか検査するためだろ? な」

茜『そうね、じゃあこいつちは脱落した機体も居ないしこのまま行くわよ?』

全員「『』『』『』異議なし! ! ! 』『』『』『』

晴子『そんじや2時方向に進みましょ? う? 』

稟「ああ、そうだ・・・・・、つ! 柏木! ! ! 』

俺は右に居た柏木機にタックルを当てた

晴子『ちょ! ?』

茜『土見なにを! ? な! ! ! ? ?』

その瞬間、先ほどまで柏木機が居た地点を轟音をたてて弾丸が通り過ぎて廃ビルをに当たり崩した

多恵『な、なんだべ! ?』

あ、方言が出た

稟「全機ビルの陰に隠れろ! ! ! 』

俺の声を聴いて柏木機以外はすぐに隠れた

稟『間に合え! ! ! 』

俺は倒れてる柏木機の前に出てシールドを構えた

シールドを構えた瞬間シールドにビームが当たった

稟「柏木！早く隠してくれ！」のままでは保たない！」

晴子『わかってるよ！でもこいつなつたのは土見のせいなんだけど？』
稟「それについては謝罪する！それに仕方ないだろ！あれしか間に合わないと思つたんだから…』

俺は、返事をしながらも飛来してくるビームや砲弾をシールドで防いだ
稟「よつとー！土見も早く…』

稟「了解…！」

俺は柏木機の後ろに回つこんで隠れた

稟 Side END

義之 side

義之「ほー、今のに反応して回避して防いだか、なかなか良い勘してるね」

俺は素直にそう評価した

由夢『あれを良い勘で済ませますか？私がトリガーに指をかけた瞬間に反応しましたよ？』

由夢は呆れた表情で言つてきた

義之「俺はそう思つたが？」

美夏『桜内よ、今度美夏達とお前の機体の制御ログを比べてみる？』
今度は天枷まで

由夢『ええ、自分の異常さが分かるはずですか？』

義之「むう、普通だと思つんだがな？」

由夢＆美夏『いえ（いや）、異常です（だ）…』

俺に味方は居ないのか！？

義之「お？ビルを切つて煙幕を作つたか、今の判断は隊長機かな？」

美夏『どうする、美夏が切り込むか？』

義之「いや、俺が切り込む、由夢は引き続き狙撃を続行、天枷は由夢の護衛を」

2人『『了解』』

俺はその声を聴いたら愛機のスラスターを噴かして206に向けて飛行した

エールストライカーはこの2年で大気圏内では滑空しか出来なかつたのを改良して、大気圏内でも1級品の飛行能力を得ている

義之「さて、楽しませてくれよ！？」

義之 side END

みちる side

私は僚機の速瀬と共に戦闘している207を見ていた、すると速瀬から

水月『中佐、見てください！あの6番機なんですか？』

私は言われた通り6番機をズームして見た、なるほど

みちる「なるほど、独創的な動きが多いな」

水月『ええ、OSの姿勢制御関連のパラメーターを相当にじつてるんですね、あれは私達ほどではありませんが』

みちる「ああ、すぐに追いつくな」

私は素直に評価した、そして

みちる「流石は今2型に搭載される新型OSの基礎概念提唱者だ」

水月『ええ！？それってマジですか！？』

やれやれ、驚きのあまり言葉遣いが怪しくなってるな、まあ仕方ないが

みちる「本當だ、因みにこれは重要機密だからな？しゃべるなよ？」

水月『了解！』

さてと、どうやらあちらの戦闘も終わったようだし

みちる「そろそろ行くぞ？それと、間違つて殺すなよ？』

水月『了解、わかつてますつて！』

さて、始めるか

私は愛機のイージスのスラスターを噴かした

みちるside END

武 side

俺達は今危機的状況にあつた

武「くそ！なんだこの機体！？」

俺の前にはアストレイタイプの新型と思われる機体が居て攻撃を仕掛けてきてる

千鶴『白銀、無事！？』

武「なんとかな！彩峰！？」

慧『こつちも、・・・、ギリギリ！』

そう俺達はたつた1機の敵に押されてるのだ

千鶴『このままじゃ埒が明かない！御剣こつちに来れない！？』

冥夜『無茶を言うな！こつちの相手はイージスだぞ！？』

イージスだと！？ガンダムタイプじゃねーか！

王姫『こちらの攻撃が当たりません～！』

たまも相当パニクつてる

美琴『どうするの～！？』

おう美琴の眼が回つてる

千鶴『御剣達はなんとかこつちに合流して！珠瀬！あのアストレイ

タイプに1発撃つて！？』

なるほど、俺は委員長の考えを見抜いてビームサーベルを抜刀した

王姫『ええ～？でも当たりませんよ～！』

千鶴『いいから撃つて！相手が避けるなり防ぐなりしたらその隙に白銀に突撃させるから！』

武「おう！任せろ！！」

王姫『わかりました！でも止められるとしても数秒が限界です！』

武「わかるて、にしてもこの試験考えた奴相当どうだな！」

機体性能もそうだが、腕の差が激しいっての！

王姫『撃ちます！』

武「おう！！」

俺は機体を構えた

武 side END

水月 side

水月「あははは！なかなか楽しませてくれるね！」

私は自機のアストレイ3型のコクピットの中で笑いながら機体を操縦していた

すると少し離れた位置に居た訓練生の機体が71式狙撃砲を撃つた
71式狙撃砲は旧式のMS用狙撃砲で単発式だ、1発撃つたらレバー
一を引かないと薬莢が廃薢されない、その為1発撃つと少なくとも
数秒は隙が出来るけど、命中率は高い

水月「おっと！なかなか際どい位置を狙つてくれるじゃないの！』

私はペイント弾を最小限の動きで避けて、突撃してきた機体に蹴り
を当てる

弾はペイント弾だから致命傷にはならないけど、私の目標は義之に
勝つこと…当たつてやるもんか！！

みちる『やつてるようだな？』

おつと中佐からだ

水月「はい！中佐はどうですか？」

私は牽制を含めてEパック式ビームライフルを乱射しながら聞いた
みちる『ふむ、予想以上でな少々手こずつてるが、まあ問題ないだ
ろ』

確かに中佐は結構余裕みたいで

水月「そろそろ、本気出します？」

私は口端を上げながら言った

みちる『そうだな、やるか、速瀬もう一回言つが殺すなよ？』

水月「わかつてますつて！では行きますか！」

私は本気を出して訓練生達に突撃した

水月 side END

一夏 side

俺は目の前の機体、赤いアストレイタイプが繰り出した刀による斬
撃を紙一重で避けながら冷や汗をかいた

一夏「くそ！この機体なんだ！？」

俺達に攻撃してきた機体はアストレイに似ているがM1より赤いし、
なにより細かい造型が違う

簪『もしかしてガンダム！？』

おお！？あの簪が大声をだした！？つて！！？

一夏「マジか！これがあの！？」

簪『多分そうだと思う・・・確かアストレイの前にガンダムを基
盤にアストレイのプロトタイプを造つたらしいから・・・』

なるほど、それなら納得できる！－

シャルロット『簪！後ろ！－』

何！？あれは青いアストレイタイプ！？

青いアストレイタイプは見たことも無い大剣を簪に向けて振り上げ
ながら高速で接近してきた

「ラウラ『く！近すぎて撃てない！』

ラウラが悔しそうに歯噛みした

簪『く！』

そして簪は間一髪でビームサーベルで防いだ
鈴音『あーもう！なんのよ！』このアホみたいなミサイルの数は
！』

そう、実は先ほどからもの凄い数のミサイルが雨霰あめあられと周囲に飛んで
きては着弾しているから鬱陶しい！！

セシリ亞『な！？あれはガンダムですわ！！識別照合・・・・GA
T-X103バスター！』

第『バスターだと！？』

おいおい、あの青いアストレイタイプを含めたらガンダムタイプが
3機もかよ！？

一夏「全員！今まで以上に連携を重視！！なんとかバスターから落
とすぞ！」

全員『『『『『ア解！』』』』

絶対乗り越えてやる！！

一夏 side END

美鈴 side

私は自機のガンダムアストレイ・レッドフレームの中で機体を操縦
していた

美鈴「ほう、これを避けるか！？」

私は目の前の訓練生の駆る機体にガーベラストレーントの斬撃を加え
たが、避けられたことを驚きながらも喜んだ

美鈴「これは将来有望だ！？」

私は素直に賞賛を口走った

すると

菊理『美鈴さん、ちゃんと「クピットは外してくださいね?』と後方からミサイルを撃つている菊理に通信越しに窘められた
美鈴「わかっているさ、それよりもそろそろ予定通りそちらに合流するぞ?』

駆『了解! 流石に数が多いですね』

楯無『そうね、流石に7機は厳しいわね、それに簪ちゃんもかなり出来るようになつてたし』

そう言いながら楯無は軽くウインクした

美鈴「妹が居たのか?』

私は楯無の言い方から分かつた

楯無『そ、7番機ね?』

ふむ、あの機体か、火力支援を中心に遠中近距離対応出来るのか
駆『それでは俺も攻撃及び菊理の援護を開始します!』

美鈴「了解、楯無よ後退しながらやるぞ?』

楯無『了解』

では草壁美鈴押して参る!!

美鈴 side END

クラリッサ side

私達は今翻弄されていた

クラリッサ「我々がたつた3機に押されるだと!?』

そここちちは7機に対して相手はたつた3機なのに圧倒的に押され
てるので

レティシア『隊長こいつら相当の猛者ですよー』

レティシアが叫び声で捲くし立ててきた

クラリッサ「わかっている!!』

私は思わず怒鳴ってしまった、それほどまでに余裕が無いのだ
クリスティアーネ『お姉さま！マルギッテが…』
ちい！喰われたか！！

マルギッテ機が機能停止して廃ビルに機体を半分めり込ませていた
エルトリンデ『エルシア！離れすぎないで！カバーしきれない…』
エルシア『わかつてること…』

ちい！部隊間の距離がつまらうつに離されてる…援護しづらい
…

クラリッサ『ここで負けてなるものか…』
私は雄たけびを上げながら突撃した

クラリッサ side END

修史 side

修史『流石は元JEDIトイツ軍の特殊部隊だ！俺達と戦つてまだ損害
が1機だけか…』

俺はこいつらの評価を心中で改めた

設子『流石は修史だな、パイロットを氣絶させるとは

設子が薄く微笑みながら言つてくれた

有理『ふーむ、こいつら連携が凄いね～ここまで保つとは予想外だ』

有理が無頓着に言つた、本音かね？

修史『そんじや、ちやつちやと終わらせるぞ…』

2人『了解…』

俺は突撃してきた機体に蹴りを当てながら言つた

修史 side END

稟「くそ！なんて正確な狙撃だよ！」

俺は次々撃ち込まれて来る砲弾やビームを見ながら悪態を吐いた

400 ! !

なに!? そうか柏木の機体はスナイパー使用だから通常機よりレーダーが強力なんだつた!

西日本機種はわかる！？

晴子：機種特定……………GAT-X105「トライダ！」

と木乃が叫んだ瞬間に、ビルの隙間に元青白の機体がノーナード一ターゲットに映つた……あの機体は！！

茜「な!? ストライク！ ! ? ? 守護神がなんで ! つて土見 ! ? 』

俺は製作に専念する間に向けて機体を運轉させていた
裏「スマーライフは俺が卯三郎。京都市はスマーライフを

俺は右手に保持されていたペイント弾のライフルを投棄していく、

氣付いたらヒリュサヘルを抜刀していた

魔が身代きの魔術の力のからだ

ムサー・ベルを抜刀していくて、お互いのビームサー・ベルがぶつかりあ
い拮抗して激しく火花を散らした

晴子『私が土見を援護するから茜達はスナイパーをお願い！！』

アヌーノイニターライフの頃ががつてゐる

義之『なるほどあの時の君か』

と聞こえた、間違いない！あの時のバイロッジの声だ！

た
!!
!!

俺は叫びながら鍔迫り合いを続けていた

晴子 side

稟『ストライクは俺が抑える！涼宮達はスナイパーを！！』

そう言って土見はペイント弾ライフルを捨ててビームサーベルを抜刀して切りかかった

あの土見があそこまで感情を爆発させてるのを初めて見た私は少し放心していた

稟『ストライク！俺はようやくここまで来た！！』

更に土見は叫びながらストライクとビームサーベル同士で鍔迫り合いをしている、あの言い方は昔なにかあったのかな？

晴子「私が土見を援護するから茜達はスナイパーをお願い！！」
ようやく気を取り直した私はそう言いながらストライクに照準を合わせるために銃を向けて

茜達は私の言葉を聴いてくれて離れていった

稟『おおおおおおお――――!!』

更に土見の叫びが聞こえた、そうすると機体同士の額がぶつかったのが見えた、すると

義之『なるほどあの時の君か』

と聞こえた、土見の機体がくつついたから無線が混線したのかな？でもこの言い方はまるで守護神は土見を知っているの？

稟『やはり、あなたでしたか！あれから2年！ようやくここまで來た！！』

つて土見も知ってるの！？

晴子「よくわからないけど」

私はストライクに向けて照準を合わせた

晴子「狙い撃つ！！」

義之 side

俺は206を見つけてスラスターの出力を上げようとした
義之「おや？ 1機突っ込んでくるな？」

そう1機だけ俺に向かつて突撃してきた機体が居た、その機体は右手に保持していたライフルを放り投げて変わりにビームサーベルを抜刀した

義の一端う面出い!!無^ハでせるか!!」

といつの間にか俺と目の前の機体同士の額がぶつかっていた、とその時だった

卷之三

と竑たけひが闇こえて モ二タリに相手の顔が映った（俺の顔は向こうには見えない様に設定済み）、そしてその顔と声を聞いて俺は思い出した

義之一なるほどあの時の君か

俺はそう言いたい。思い出したよ。彼は2年前のタイタン戦争の時に日本帝国の光陽町で俺が助けた、あの時の少年か！

稟『やはり、あなたでしたか！あれから2年…』よつやけじまで来

では少し本気を出してあげようか！！ちょうど俺を阻つているスナ

イパーも居るがまあ余裕だ！！

俺は少年の機体を蹴り飛ばして

本氣を出した

第3者 side

結果的に言えば訓練生達は交戦開始してから10分で全滅した、が、その結果は義之達にとつては満足いく結果だった

そしていよいよ総合戦闘技術演習は最後に面接を残すのみとなつた

選定試験後編（後書き）

めつやへくここまでキタ！

そして気付いた最近の作者の口癖が「かつたる」になっている事に…！

気付いたら俺、純一になってきてるよ…！

戯言はここまでにして…

後書き「コーナー始まる!!」

作者「はい！始まりました！」このコーナーは私作者の京勇樹と…

雪音「アシスタントの田原雪音でお送りします」

作者「では早速今回のゲストよ力モン!!」

一夏「呼ばれたから来た、織斑一夏だ、ようじくな！」

雪音「よろしくね」

作者「では早速ですがこれをどうぞ…！」

一夏に紙を渡す作者

一夏「これを読めばいいんだな？」

雪音「はい、お願ひね？」

では

スタート…

一夏「俺は…・・・俺は死ない…！」

作者「はい、乙！」

雪音「どうだった？」「…」

一 夏「ああ、なんか気合入る言葉だったな」

作者「左様でしたか」

雪哉「では、今回せりふね」

全員 ま、また、次回までーさよーならー!ー

作者「気付いたらアクセス数がもうすぐ1万です!!嬉しいですが、未だにレビューが一つも来ないので寂しいです、どうか応援メッセージでも、この後書き」「一ナ一への要望でもアドバイス等で構いませんのでお願いします!!」(土下座敢行)

設定1の続き (206訓練部隊編) (前書き)

さてと、またしても設定です
そして祝1万突破ですよ

設定1の続き (206訓練部隊編)

涼宮 茜、訓練生から初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属となつた新任少尉

訓練部隊では隊長を受け持つていた、速瀬水月に憧れて水泳部にも所属したほどである、高機動での近接射撃戦闘を中心に近接戦闘を得意とする、コールサインはレー・ヴァ・ティン1
機体は高機動近接戦重視にカスタムされたアストレイ3型

築地 多恵、訓練生から初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属となつた新任少尉

訓練部隊では涼宮の補佐をしていたが涼宮曰く『何回貞操の危機を感じたか』と言わせるほどの百合っ子で、茜LOVEなのだ、パニックになつたりすると何処かしらの方言を口走る、コールサインはレー・ヴァ・ティン2

機体は茜と2機連携^{エレメント}を組むので高機動中距離重視にカスタムされたアストレイ3型

土見 真、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属になつた新任少尉

以前は日本帝国の光陽町に住んでいたが、タイタン戦争時に町は炎で焼かれて初音島に移住、その後、幼馴染の八重^{やえさくら}桜にも言わずに軍の訓練学校に入つた、最初は成績は最低のCランクだつたが本人の血の滲む努力によりAランクまで上がつた所謂秀才だ、勘が鋭く敵の攻撃を紙一重で避けるのを得意とする、尚タイタン戦争時に幼馴染の芙蓉^{ふようかえで}楓が死んだと思い込んでおり右腕の手首には楓の赤いリボンが巻かれている、志願した理由は無力な自分が許せなかつたから。

コールサインはレー・ヴァ・ティン3、機体は真の耐G体性に合わせて

力スタムされている高機動近接戦重視に力スタムされたアストレイ

3型

柏木 晴子、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキユーレ隊所属となつた新任少尉でよく稟と2機連携を組む、視野の広さと瞬間的な判断力は高い、背は稟と同じくらい高い、スタイルも抜群で性格はかなり気さく、訓練学校に入る以前の普通の学校ではバスケットボールのPGだった、弟が2人居るためか面倒見がよく、しおつちゅう暴走する多恵を落ち着かせることが多い。

コールサインはレーヴァティン4、機体は彼女のスナイパー適性に合わせて力スタムしたアストレイ3型

高原 陽子、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキユーレ隊所属となつた新任少尉、性格は明るく部隊内ではムードメイカーの役割を受け持つ、コールサインはレーヴァティン5

機体は彼女の得意な近接密集格闘戦に合わせて肩に3銃身式ビームガトリングを装備して手首にビームサーベルを固定装備しているアストレイ3型

麻倉 陽菜、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキユーレ隊所属となつた新任少尉、兄妹が男ばかりのため男言葉が少し目立つが優しく少し規律に厳しく学校だつたら風紀委員になつただろう、コールサインはレーヴァティン6、機体は彼女の得意な火力支援に合わせて両肩に2連装低反動250mmキャノン砲を装備しているアストレイ3型

設定1の続編（206訓練部隊編）（後書き）

祝100000アクセス突破！！

嬉しいです！！（号泣）

今回は土見稟の所属する206を紹介しました

ここからは後書き「コーナー押し通る…」

作者「はい、はじまりました！このコーナーは私作者の京勇樹けいゆうきと…」

雪音「アシスタントの田原雪音たはらゆきねでお送りします」

作者「まずは祝1万アクセスだ！！」

ドンドン！パフパフ…！

雪音「では、今回のゲストをどうぞ？」

稟「どうも、つちみりん土見稟どみりんだ」

作者「へい！いらっしゃい…！」

雪音「あなたは、どこぞの板前さんですか？」

作者の亡くなつた祖父は元すし屋でした

作者「では、今回はこれを読んでください」

稟に紙を渡す作者

稟「これを読めばいいのか」

雪音「はい、よろしくね？」

ではスタート…！

稟「人はな痛みと悲しみを知るからこそ、強く、そして優しくなれるのや」

作者「はい、終了！！」

雪音「どうでした？」

稟「なんか、心に響いた・・・」

作者「それは俺の命題の一つです！」

雪音「暴力を振るうのは人の痛みと悲しみを理解していない最低な屑のことよ」

作者「後は俺の心に刻んでる言葉は、力はただ力、人の心次第で善にも悪になる、って言葉がある」

稟「それも大事だな」

雪音「作者が格闘を覚える際に一番最初に覚えた言葉ね、時々格闘家が暴力事件を起こすけど、自分の力を理解してるとかしら？」

作者「俺達格闘家は自分の力を私利私欲で使ってはいけない、力は弱き人や大切な人を護るために使うべきなんだ！！」

稟「だな、武器を持つてからって強くなつた、強くなつたから弱い奴を攻撃していいって考える奴は人間のクズだ」
雪音「と、ここまでにしどきましょうか」

作者「うむ、では」

全員「「「また、次回までさよーならー！！」」」

設定1の続報 (207訓練部隊編) (前書き)

引き続き設定です
しつじくひすいません

設定1の続き (207訓練部隊編)

榊 千鶴、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となつた新任少尉、少し太い眉毛に腰まで伸びてゐる2房の三つ網の髪、眼鏡が特徴の女の子で気が強い、よく彩峰 慧とは口論する、委員長肌でそれが原因か不明だが白銀 武は委員長と呼ぶ、コールサインはバルキリー1で機体は彼女の得意な火力支援の為に両肩に3銃身式ビームガトリングを装備したアストレイ3型

御剣 冥夜、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となつた新任少尉、伸ばしたら膝辺りまである髪を一回後頭部あたりでわつか状態のポニーテールにしていて、家の教育のためか少し侍のような言葉遣いになつてゐる、彼女は本来、世界的大財閥の御剣財閥の令嬢なのだが、なぜか初音島の軍隊に居るどうやら日本帝国に深い縁があるのか日本帝国の刀術の無限鬼導流を免許皆伝で体得してゐる、体得した際に師匠から現在の愛刀、皆瑠神威を貰つてゐる、その為かMS戦でも近接格闘戦を得意としている、同訓練生だった白銀 武とは恋人同士である、呼称は武と呼ぶ、尚MS戦では白銀とよく2機連携を組みお互い息のあつたコンビネーションで支援要請の頻度はあまり高くない

コールサインはバルキリー2で機体は彼女の得意な近接格闘戦に力スタムされたアストレイ3型

鎧衣 美琴、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となつた新任少尉、ボーアイッシュな顔立ちにショートカットの髪に1人称は僕とまるで男の子の様な女の子、父親の影響かサバイバル技術が長けてゐること、かなりのマイペースで人の話をしおつちゅうスルーする、尚父親は諜報部の外務2課の課長で杉並の上司にあたり、初音島に居ることのほうが珍しい、コールサインはバ

バルキリー3で機体は彼女の得意な火力支援の為に両肩に8連装式M
ルキュー^マ
"多目的ミサイルランチャー"を装備しているアストレイ3型

彩峰 慧、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となつた新任少尉、独特な雰囲気と少し寡黙なため少し孤高な感じはするが身体能力はかなり高く、ナイフの扱いに長けている、少し独断専行が多いがそれは自分の感覺を頼りにしているためで本人には悪意は無い、しかしそれが原因で榊 千鶴としょつちゅう口論しているのが見受けられる、コールサインはバルキリー4で機体は高機動近接戦闘重視にカスタムされたアストレイ3型

珠瀬 王姫、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となつた新任少尉、本人と同じくらい長い髪をまるで猫みたいな髪型にしていて更に首には鈴をつけているのが特徴でかなりすばしつこい、家が弓道の道場を営んでるために狙撃の腕は当代随一だ、ただしアガリ癖があるため緊張すると体が震えるがそれは武と出会い一緒に訓練して克服した、父親は初音島の政府の外交官で王姫を溺愛している、コールサインはバルキリー5で機体は彼女の狙撃適正に合わせてカスタムされたアストレイ3型

白銀 武、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となつた新任少尉、副隊長の御剣冥夜とは恋人同士でお互い名前で呼び合っている、現在初音島統合防衛軍で正式採用されている新型OSの基礎概念を提唱した張本人、他人には真似できないような独創的な機動が特徴で機体の負担はあまり考えていないため"整備班泣かせ"で有名となつてしまつて、だがそのかいあつて機体制御ではかなり優秀な成績を誇つて、コールサインはバルキリー6で機体は白銀の機体制御と高機動に合わせてカスタムされてる高機動近接戦闘万能型アストレイ3型

設定1の続き（207訓練部隊編）（後書き）

引き続き設定です、今度はマブラヴでも有名な第207訓練部隊です

では後書き「一ナード！」

作者「はい、ここからは私作者の京勇樹けいゆうきと…！」

雪音「アシスタントの田原雪音たはらゆきねがお送りします」

作者「では早速今回のゲストよ力モン！！」

義之「ここでは2回目だな、桜内義之さくないぎしだ」

雪音「よろしくね？」

作者「では早速これを」

義之に紙を渡す作者

義之「今日はこれか…」

雪音「はい、お願ねいね？」

では、スタート！！

義之「思いだけでも・・・・力だけでも・・・・」

作者「はい、終了！」

雪音「どうだつた？」

義之「なんか、言つのに覺悟が必要なセリフだな」

作者「でしょうね、これは新たな力を得たがそれは強大な力で間違えば世界を滅ぼしかねない力だったから」

讃々「なぬせうば」

「では、今回はおめでたす」

設定1の続報

(210訓練部隊編) (前書き)

今度は210-IJと戻っ戻っコヅイシ軍の顔をみます

設定1の続き (210訓練部隊編)

クラリッサ・ハルフォーフ、元JEUドイツ軍特殊部隊シュヴァルツェア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊の副隊長、現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキュー隊の新任少尉、ラウラの副官を務めていた人物で祖国のドイツでは日本帝国の少女マンガを愛読していた、ユーラシアに敗れて復讐鬼となつたラウラを見て心を痛めていた、しかしそんなある日ラウラから好きな男性（一夏だが）が出来たと聞いて安心かつ喜んだ、そしてラウラに間違つた日本知識を植えつけた張本人である、尚シユヴァルツェア・ハーゼ隊内では唯一の20代の女性で10代ばかりの部隊の頼れるお姉さま的存在、コールサインはロスヴァイセ1で機体は基本オールレンジ対応に力スタムされたアストレイ3型

レティシア・ライゼンバッハ、元JEUドイツ軍特殊部隊シュヴァルツェア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊の所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキュー隊の新任少尉だ、ユーラシアに敗れた後ラウラとクラリッサの判断に従い一緒に初音島に亡命して訓練生に志願した、一時は復讐鬼になつていたラウラに恐怖を感じていたが信じて待つていた、尚これは部隊全員だが、左目に黒い眼帯を装着している、コールサインはロスヴァイセ2で機体は近接格闘戦に比重を置いたアストレイ3型

クリスティアーネ・ホーエンフェット、元JEUドイツ軍シュヴァルツェア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊の所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキュー隊の新任少尉、ラウラとクラリッサの判断に従い初音島に亡命してきた、クラリッサをお姉さまと呼び慕つている、部隊内では比較的年長者でクラリッサの副官的な立場だ、コールサインはロスヴァイセ3で機体は中距離戦闘

を主体にカスタムしたアストレイ3型

マルギッテ・エーベルハイト、元JEDUドイツ軍シュヴァルツェア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊の所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキュー・レ隊の新任少尉、ラウラとクラリッサの判断に従い初音島に亡命した、部隊内では年少組みだが年齢にそぐわない冷静な判断力を持つている、コールサインはロスヴァイセ4で機体はスナイパー重視にカスタムされたアストレイ3型

エルトリンデ・アーシュベルク、元JEDUドイツ軍シュヴァルツェア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊の所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキュー・レ隊の新任少尉、ラウラとクラリッサの判断に従い初音島に亡命して訓練生に志願した、部隊内ではムードメイカーの役割を担っている、明るい性格だ、コールサインはロスヴァイセ5で機体は彼女の得意な近接戦闘に比重をおいて力スタムされたアストレイ3型

エルシア・ハーヴェンス、元JEDUドイツ軍特殊部隊シュヴァルツェア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキュー・レ隊の新任少尉、ラウラとクラリッサの判断に従い初音島に亡命して訓練生に志願した、エルトリンデとよく行動を共にしており、戦闘でも2機連携を組む、部隊内でも小柄なのとエルトリンデと一緒に居ることが多いため部隊内ではマスクットキャラ的な扱いだ、コールサインはロスヴァイセ6で機体はエルトリンデと組むことが多いからか中距離に比重をおいて力スタムしているアストレイ3型

ライラ・フリードリヒ、元JEDUドイツ軍特殊部隊シュヴァルツェア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキュー・レ隊の新任少尉、ラウラとクラリッサ

サの判断に従い初音島に亡命して訓練生に志願した、家は軍人家系で父親は艦隊の指揮官を務めており、上2人の兄はMS部隊のパイロットだ、尚彼女の口調が若干男口調なのは男が多くつたのでその影響なのだ、身体能力も高いので白兵戦も得意としている、コールサインはロスヴェイセフで機体は基本オールレンジ対応にカスタムされたアストレイ3型

設定1の続編（210訓練部隊編）（後書き）

うーむ、設定ばかりですみません！！

ここからは後書き「コーナーデス！！」

作者「はい、ここからは私作者の京勇樹と！！」

雪音「アシスタントの田原雪音がお送りします」

作者「ではでは、今回のゲストよカモン！！」

駆「どうも、さつきかける皐月駆です、よろしく！」

雪音「よろしくね？」

作者「ヨロシク！！」

駆「なんか若干ヤンキーになりかけてる？」

作者「気のせいだ」

雪音「じゃあ、これを読んでくれる？..」

駆に紙を渡す雪音

駆「これで読めばいいんだな？」

作者「はい！」

ではスタート！！

駆「道連れにするのはここにある戦争と兵器だけにしておきましょう。」

作者「はい、ゴール！！」

白黒の旗を振る作者

雪音「あなたはレースのフラッガーですか・・・」

作者「で、どうだつた?」

駆「平和えの思いを感じた」

雪音「大切よね」

作者「では、今回はここまで!!」

全員「「「では、また次回までさよーならーー!!」」」

イメージ〇〇&アンケート（前書き）

今回は作者のイメージ〇〇を紹介します
あとアンケートに答えてくれると嬉しいです

イメージOP&アンケート

イメージOP曲

GジHネレー・ションスピリツの森口博子さん

「もうひとつ未来～ starry spirit」

まず最初に満天の星空が映つてすぐにイントロが入る

イントロが入ると同時に機動戦士ガンダム 英雄黙示録と文字が入る
文字は大体3秒くらいで砂みたいに消える

燃え盛る町の中を走る土見稟、八重桜、芙蓉楓の3人

突如3人の間に現れた6眼の四角い兜を被つた全長約20m近くの
タイタン

そのタイタンにビームライフルを打ち込みながら画面を横切るエー
ルストライク

ストライクが画面を横切つたら風景が変わり炎が消えて満天の星空
と満月が映る

満月の下1人グラウンドを走る土見稟

ランニングを止めて星空と満月を見上げる土見稟

そんな土見稟の後ろから走りよつて左右から肩組みして笑いかける

織斑一夏と白銀武（右に一夏、左に武）

そんな2人を見て笑う土見稟

そんな3人を離れて微笑みながら見てている同期の訓練生の女の子達
(206、207、208、210)

そして2階の教官室の窓から嬉しそうに見ている織斑千冬と神宮司
まりも

画面が変わつて広い部屋に居る30人くらいの軍服（イメージ的にはオープ軍の軍服）を着た男女（真ん中に義之、義之の右に麻耶、左にみちる）

更に変わつて和風な部屋の真ん中にある机、机から立ち上がり走り
よつてくる芳野さくら

そんなさくらを笑いながら見ているアイシア

画面と場所が変わって学校

授業中の教室、黒板に文字を書いてる紅薔薇撫子

それをノートに書き留めている天枷美夏と朝倉由夢

窓際の1番後ろの席に座つて同じようにノートに書き留めている桜

と楓

桜と楓がふと気付いたように視線をずらして桜の花びらの舞う窓の外を見る

桜の花びらが強風に煽られて勢いよく舞う

画面いっぱいに青空が映つて、次の瞬間火花が散る

エールストライクとM1アストレイがビームサーベルで切りあう画面が2つに分かれて左側にヘルメットを被つた義之、右側には同じくヘルメットを被つた稟

そんな稟を援護しようとする1機のスナイパーライフルを構えたアストレイ

カットインが入り真ん中にヘルメットを被つた柏木晴子

砲撃を後方宙返りして避けるストライク、避けて機体の方向を画面に向ける

画面にストライクが迫り、過ぎてストライクが消えるとアーケンジェルが映る

ブリッジが映つて艦長席に座つて指示を出す朝倉音姫

アーケンジェルが動いて左に舵を切る

そしてアーケンジェルが消えると初音島の全体が横向きに見えて、その上空に10枚の翼を持つガンダムタイプの影が見えて胸部から煙を出して一気に機体が上昇して太陽が映る

そして最後にもう1回機動戦士ガンダム 英雄默示録の文字が映る

はい作者のイメージOPでした、分かりにくかつたら「めんなさい」でここからはアンケートです

このようにOPは簡単に曲決め出来た作者ですが
EDがなかなか決まりません

ですので読んでくださいた皆さんに聞きます

この曲がEDに良い!と思つたらどうか教えてください!...
一応考へているのが同じくGジョネレーションスピリッツに使用さ
れている

森口博子さんの「それでも生きる」
なんですか?なんかしつくり来ないんです
どうかこのおバカな作者に入れ知恵を!!
それと後書き「一ノナーナーの要望も受け付けます! ドシドシお送りく
ださい!!
ご応募お待ちしています

イメージロゴ&アンケート（後書き）

今回は後書きコーナーは廻避します

機器の配置図と専念（説明文）

今日は後書きは割愛しますが宣伝があります

驚愕の配属日と再会

俺、土見稟は少し憤っていた

稟（俺に会いに来てくれた子達には悪いけど……）

それはつい1週間前の総合戦闘技術演習の最終日の面接の時だった

回想

義之（稟は気づいてない）「（若干低い声で）実は神界と魔界から君に会いたいと言つてる子達が居てね？ もし君が望むなら実戦部隊から外れて風見総合学園に通うことも可能だが、どうする？」
と言われたのだ、もちろん断つたが

回想終了

稟（それじゃ、なんの為に軍に入つたんだ！ 意味無いだろ！…）

俺は俯きながら歩いていた、すると

晴子「土見 なに暗い顔してるの？ 今から新しい配属先に行くんだからさ！」

そう言いながら柏木は背後から俺に寄りかかってきた

柏木の身長は俺と大差ないのでつま先が引きずる形になつてズルズルと音が聞こえる

そして背後数mには涼宮 茜達が居る、そう今俺達は昨日言い渡された第8機動軍に向けて歩いているのだ

そしてしばらく歩いたら

一夏「あ」

武「お？」

クラリツサ「おや」

なんと同期の訓練生（元）に交差路で出会つたのだ

稟「もしかしてお前達も第8機動軍か？」

俺は半ば確信を持ちながら聞いた

一夏「ああ、武もか」

武「おお、クラリッサさんも？」

クラリッサ「ああ、これは偶然か？」

稟「どうだろ？ そいやお前達ももしかして、所属不明の機体に襲撃されたか？」

俺は一応聞いてみた

一夏「ああ、ガンダムタイプが3機も居た」

武「3機！？ 俺達は1機だけだったな、あとはどいつも新型のアストレイタイプだった」

クラリッサ「私達は3機ともアストレイタイプだったが1機ずつ装備が違つたし、相当の手練だった」

稟「俺達は確か3機だったな、しかも1機は英雄、ストライクだった」

206以外全員「「「「英雄だと！？」」」

おお全員驚いてる

晴子「しかも、土見は英雄とどうも知り合いたいだよ？」

晴子と土見以外全員「「「「なに！？」」」

茜「ちょっと土見！ それ本当！？」

稟「ああ、そうだが、って近い！ 近いから！」

気づいたら俺の周囲は完全に囮まれている！ 悪いわ！！

武「どうやって知り合った！？」

稟「俺は元々は日本帝国の出身なんだよ、でタイタンに殺されそうになつた時にストライクに助けられたんだよ、でも直接的には面識は無いな」

全員「「「「なるほど」」」

シャルロット「ねえ、そろそろ行かないところな所で喋つてたら間に合わなくなるよ？」

一夏「そうだな」

稟「確かにこっちだったな」

俺達は歩き出した

武「あれー？　たしかこっちだったよな？」

稟「ああ、こっちで合ってる筈だ」

一夏「もうすぐのはずなんだがなー」

今俺達は若干迷子になりかけていた

シャルロット「ねえ、本当にシャレにならない時間なんだけどー！？」
一夏の隣にいたシャルロット（だつたか？）が時計を見ながら急か
している

一夏「わかってるけど・・・お？」

稟「どうした、一夏？」

一夏は人工島の岸壁の方を見ている、俺も視線を移動させた

稟「誰か居るな？あの制服は・・・整備員か？」

そう視線の先には麦わら帽子を被った整備員が岸壁に腰を下ろして、
手に釣竿を持って糸を海に垂らしていた

武「なあ、ここはあの整備員に道を聞かないか？」

稟「そうだな、確かにそろそろヤバい」

俺は時計を見ながら言つた

稟「すいませーん！」

義之（稟達は気づいていない）「（若干低い声で）ほいほい？」

整備員はこちらに振り向いた

一夏「ちょっと道を聞きたいんですけど」

義之「別にかまわないが、何処だい？」

稟「はい、第8機動軍です！」

義之「ああ、第8か、・・・なんなら連れて行つてあげようか？」

優しい整備員さんだな

シャルロット「ええ！ 悪いですよ」

シャルロットが遠慮した

義之「いや、第8には俺もちょつと用事があるからな、別にかまわ
ないさ」

そう言いながら整備員の人は釣竿に糸を巻きつけながら立ち上がった
義之「じゃあ、付いておいで？」

そう言いながら整備員は先頭に立ち歩き出した

稟 side END

第3者 side

義之「そういうえば君達は新人かい？」

義之は歩きながら聞いた

稟「はい、今期で新規に配属になりました！」

義之「なるほどね、その制服を見るにMSパイロットか」

一夏「はい」

稟達は質問に答えていく

が整備員の姿の義之を睨みつけている人物が居た、それは・・・
ラウラ（あの立ち姿に、あの気配は只者ではないな・・・しかもあ
の気配は整備員が出るものでは無い・・）

ラウラだった、ラウラは今居る中では数少ない実戦経験者だ
クラリッサ（隊長あの人物只者ではありませんね？）

どうやらクラリッサも気づいていたようだ

ラウラ（ああ、それと今の私は隊長ではない）

クラリッサ（そうでしたね、しかしあの気配は祖国でも放てるのは）

ラウラ（ああ、七英雄と死神部隊くらいだ、何者だあの男は？）

2人は小声で話し合っていた

そして

義之（ふむ、どうやら薄々感づいてるようだな、流石は元J.E.I.特
殊部隊の隊長に副隊長か・・・）

それは義之も同じだった

そして

義之「ここが第8機動軍の施設だ」

話しながら歩いていたから着いたようだ

稟「ありがとうございます」

義之「では、入ろうか？」

そう言うと義之はIDカードをカードリーダーに通した

そして開くと

麻耶「あー！ 義之！ 何処ほつつき歩いてたの！？」

義之「やべー？」

義之以外の新人「「「え？」」

みちる「そう簡単に本部から離れてもうつては困ります大佐？」

新人全員「「「大佐！？」」

義之「何時気付いた？」

麻耶「約10分前よ！ まさかマネキンにカツラと仕官服を被せる
なんて思いもし無かつたわ」

義之「むう思つたより早くバレたか、因みに今回の協力者はあちら
に居ます樋無少佐だ」

と義之は右の通路を指し示した

麻耶「え？」

麻耶が見ると

樋無「てへ」

と言いながら扇子を広げている更識樋無が居た（扇子にはドッキリ

成功と書かれている)

麻耶「もう、楯無少佐！！」

楯無「きやー」

逃走する樋無、そして樋無の扇子には逃走中と書かれている。・・・
・・何時の間に変えた？

仕事の間に窓ガラス

みちの「む？」
君達は？」

一夏「はい、自分達は本日付けで第8機動軍に配属することになつ

た、新任少尉です」

麻耶、第8機動軍？間違いないのね？」

武は言いながら麻耶に書類を渡した

麻耶一ふむ、本當ね、で義之！ いい加減に着替えなさい！！！」

義之「あいよ」

義之は着ていた整備員の制服を脱いで、仕官服を着た

稟 - !? ジの声 - !?

晴子「英雄！？」

他の新人達も、おおむね用意賛成の意見だ。

之、階級は大佐だ」

義之は肩の襟に縫い付けてある階級を指で叩いた

新人達の驚いた叫びがピロティー（入り口の広間）に響く

新人達の驚いた叫びがピロティー（入り口の広間）に響いた

所変わつて

義之「全員そろつたな？」

新人含めて集まつていたのは広大な会議室だった
人数は部屋の中央に居る新人含めて約60名ほど

義之「では、改めて自己紹介しよう、俺はこの特務部隊ワルキュー
レ隊部隊長の桜内義之だ、よろしく」

新人S「…………ワルキューレ？」

義之「うむ、因みに第8機動軍なんて存在しないからね？」

新人S「…………え！？」

義之「麻耶？」

義之は右隣に待機していた麻耶に声をかけた

麻耶「ええ、あ、そうだった私は義之の副官の沢井麻耶、階級は少佐よ、よろしくね」

新人S「…………よろしくお願ひします！」

麻耶「じゃあ、モニターを見てね」

そう言うと麻耶は手元に空中投影式キーボードを出すと操作した、
すると新人達の目の前に空中投影式モニターが出た

シャルロット「あれ？ 第7までならあるけど第8機動軍なんて書
いてない？」

シャルロットの言つとおりモニターには第7までなら書かれている
が第8機動軍なんて書かれていない

一夏「なに？」

セシリア「本当ですわね」

義之「当たり前だ、第8機動軍つてのはワルキューレ隊の隠れ蓑だ」
みちる「ワルキューレ隊は重要機密でな、名前が表に出てるのは隊
長の桜内義之大佐くらいだ」

麻耶「で、ここに特殊任務部隊つてあるわね」

麻耶はそう言いながら大總統の下を指差した
稟「はい、確かに書かれてますね」

義之「これが俺達、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊だ！」

新人 S 「「「「特務隊！？」」」

義之「おう、俺と麻耶は自己紹介したな、じゃあ右から自己紹介していけ！」

みちる「私はMS隊の副隊長の伊隅みちる、階級は中佐だよろしく」
みちるが敬礼しながら言つと新人達も全員で返礼した

まゆき「あたしは高坂まゆき、階級は中佐、よろしく」

新人 S 「「「「よろしくお願いします」」」

菊理「私は橘菊理です、階級は中佐です、よろしくね」

新人 S 「「「「よろしくお願ひします」」」

で自己紹介も終わり（俺&私達の登場はまだか！？ b y未登場の
キャラ一同）

義之「自己紹介も終わつたし、これからMS格納庫に行つて君達用
にMSをカスタムするか」

稟「え？ そんなことができるんですか？」

稟は新人を代表して聞いてきた

義之「出来るよ？ それじや着いて来て？」

義之はそう言つと扉に向かう

新人 S 「「「「は、はい」」」

新人達は義之について行つた

しばらく歩くと

義之「ほい、こじがMS格納庫だ」
ハンガ

MS 格納庫だ ハンガード

茜「あ！　あそこにある機体は！」

源宮茜は黒と金色の機体を指差す
多恵「仮面と交戦」こ幾本ご! ト

和達の立場に力根体た
義之「おお、そういうや言つてなかつたな、あれは俺達だ」

新人さんへえ！？」

二二八

涼宮が驚きながら聞いてきた

義のあが選定試験? かんたん

義之「ああ、この部隊に入れるかどうかのな」

新人達は全員茫然自失状態に陥っている

「うむ、それじゃあ、虚ひん！」

簪
え！？

虚さんはそう言いながら悲しくお辞儀をさしだす

義之「ああ、そうござば虚せんの嫁は」

虚・はい 布伽多は更語家の使用人家系なんですよ

義之が右の通路を見ながら大声を出した

「櫛無一あら、バレてた？」

・・どんだけバリエーションあるの?)

簪「お姉ちゃん！」

机無、やつほ、簪をやんこの前は力分強くなつてたみたいてお姐ちやんヅクリしちやつた

簪「え!? もしかしてあの青いアストレイはお姉ちゃんー?」

元
0
3
—
同

元208—同「」「」「」「」「なに」—?」「」「」「

義之「あー、そろそろいいか？」

義之が呆れながら聞いてきた

新人 s 「「「「はい！ すいません！」」」

新人一同一気に整列＆直立姿勢である

義之「うむ、では・・・・」

？「おほ！ かわいこちゃん発見！！」

義之「・・・・・」

義之が上を見ると、キャットウォークから某怪盗？世跳びでくる整備員の服を着たサル顔のバカが1名

バカ（扱い酷くね！？）「かわいこちゃん――ん！――」

義之「香里中尉！ 修少佐！！」

2名「は！」

義之が2名の名前を呼ぶと義之の両脇からすばやく影が走り

香里「天誅！？」

と巨大スパン（長さ1m）で活発そうな少女の本名、奈月香里^{なつきかおり}が頭を殴り

バカ「ゴフ！」

修「教育的指導！！」

眼鏡をかけて首にヘッドホンをかけた少年の本名、天見修^{あまみしゅう}が某街頭喧嘩の竜拳並のアッパーを腹部にクリーンヒットさせた

バカ「ガハ！？」

そして技を当てた2名は華麗に着地すると

バカ「ぐえ！！」

バカが頭から落ちた

新人 s 「「「「死んだ――！？」」」

義之「あー、大丈夫だ、何時ものことだから」

新人 s 「「「「日常茶飯事！？」」」

そんなやり取りをやつていると

香里「この、バカ匡^{ただ}！ あんたはサルなの！？」

修「それにお前は軍曹だろ、新人達は全員少尉だ、上官侮辱罪にな

るぞ？」

匡「お前ら俺に対する謝罪は無しか！？」

頭から落ちた匡こと照屋匡てるやただしは姿勢を正すと2人に問いただした

2人「「無い！…」」

匡「断言された！？」

そんな漫才をしていると

義之「照屋匡軍曹！…」

義之が腰に両手を当てて大声を上げた

匡「はい！」

匡は直立して固まつた

義之「今はまだ作業中のはずだが？」

匡「あ・・・え・・・・その」

義之「今戻るなら今回は見逃してやるが？」

義之は無表情で聞いた

匡「失礼します！！」

照屋匡はダッシュで作業に戻った

新人S「…（唖然）…」

新人一同茫然自失状態になつていた

義之「さてと、少し時間が掛かつたが本来の作業に入るか」

そう言つて義之は新人達1人1人に合わせてアストレイ3型をカスタムした（カスタム例は各部隊編の設定参照）

そしてカスタムも終わりまた広い会議室に戻つてきた一同

義之「さてと、では最後に君達の以降の「ホールサインと我が部隊の隊訓と上司の言伝を語つ」

新人S「「「「「はい！」」「」「」「」

義之「まず206は以降レー・ヴァーティンとする」

206「「「「「はい！」」「」「」「」

義之「次に207はバルキリー」

207「「「「「はい！」」「」「」「」

義之「次に208はアストレア」

208「「「「「はい！」」「」「」「」

義之「最後に210はロス・ヴァイセとする。」

210「「「「「はい！」」「」「」「」

そして言い終わると義之は周囲に居る全員に田配せした
義之「では、これから我が隊の隊訓を教える」

と語つと義之は目を瞑つて深呼吸して

義之「死力を尽くして任務に当たれ！」

大声でその言葉を言った、すると

みちる「先任復唱！」

とみちるが語つと

先任一同「「「「死力を尽くして任務に当たれ！...」「」「」「」
新人達を囲むように居た先任達が一糸乱れずに復唱し始めた

義之「生有る限り最善を尽くせ！」

義之が続けて語つ

先任一同「「「「生有る限り最善を尽くせ！...」「」「」「」

先任達は同じ言葉を繰り返し言い

義之「決して犬死するな！」

先任一同「「「「決して犬死するな！...」「」「」「」

お互いの絆を確認していた

義之「以上だ」

みちる「新任一同復唱せよ」

新人S「「「「はい！ 死力を尽くして任務に当たれ！ 生有る

限り最善を尽くせ！ 決して犬死するな！」 「

義之「その通りだ、その言葉胸に深く刻み込んでおけいいな？」

新人 S 「 「 「 「 はい！」 「 「 「

新人の顔は真剣そのものだつた

義之「では最後に上官の朝倉純一 大總統のお言葉を伝える」

新人 S 「 「 「 「 はい！」 「 「 「

義之「んん！ 『かつたるいから敬礼とか、敬語はなしで』 以上」

新人 「 「 「 「 はい？」 「 「 「

新人一同眼が点状態になつていた

義之「あれ、気付いてなかつた？ 僕に対しても敬語とかなかつたろ？」

新人 「 「 「 「 あ…」 「 「 「

新人一同は今日を振り返りながら思い出して声を出した

義之「隊内では一切敬礼とか敬語は無しな？ 因みにこれは芳野さくら大統領の命令である」

新人 S 「 大統領！？」

新人達はありえない名前が出て驚愕している

義之「そ、ここは大總統の直轄でもあるが大統領直轄もある、つて訳で本日はこれまで！」

全員 「 「 「 「 はい！」 「 「 「

義之「先任は解散して通常シフトへ以降！ 新人は全員こっちに来い」

全員 「 「 「 「 はい！」 「 「 「

先任は全員部屋を出て、新人が全員義之の前に集まつた

義之「えーと、どこに仕舞つたけな？ あ、あつた」

義之は大きい封筒の束を取り出すと

義之「ほい」

と机の上に置いた

稟「あの、これは？」

稟が新人を代表して聞いた

義之「ん？」自宅通勤許可書」

新人 s 「「「「え！？」」」」

新人達は驚いた、それはなぜかと言うと

シャルロット「自宅通勤許可書は本来佐官からの筈ですが「
そののだ自宅通勤は本来ならば佐官からしか許可されないのである
義之「ここでは許可されている、さくらさん曰く家族は仲良くしな
いとね、だそうだ」

新人 s 「「「「・・・・・」」」

新人達は一同呆然としていると

義之「はいはい、せっかく受け取つて今日は帰つた帰つた、俺はま
だ仕事があるんだ」

と義之が手を叩きながら言つたので新人達は1人ずつ封筒を受け取
つて帰宅した

第3者 side END

稟 side

稟「とはいえ俺に帰る家なんてないんだけどなー」

と俺は書類の入つた封筒を開けて書類を見ながら言つた

稟「はー、ん？まだ1枚入つてるな？」

俺は書類を仕舞おうとして中を見たらまだ1枚書類が入つてゐるのを見つけた

稟「えーと、なになに？土見少尉はこの住所に向かうこと？」

俺は首を傾げた、家を借りた覚えは無いんだがな

俺はちょうどよく近くに来た無人タクシーを見つけたので右手を上

げた

無人タクシーはスルリと近くに寄りドアが開いて紙を見ながら住所を入力した

そしてタクシーは発進した

稟「いこは・・・」

俺は呆然と目の前にある家を見た

稟「なんでこの家が・・・・」

その家は日本帝国の光陽町で俺と楓と幹夫みきおさんが住んでいた家だった

俺はただの偶然だとと思い表札を確認して驚いた

稟「芙蓉・・・・」

その名前を見て俺は2年前を思い出し、足が竦んだ

稟「いや、大丈夫・・・」

俺は恐る恐る呼び鈴のボタンを押すと家中から電子音が響き、その後足音が聞こえて

?「お帰りなさい稟くん」

俺の目の前に死んだはずの楓とずっと連絡を絶っていた桜が現れた

稟 side END

驚愕の配属日と再会（後書き）

このたび私、京勇樹は新しい小説を書き始めました
その為今まで以上に更新が不定期になりますが何卒了承の程をお願
いします

新しい小説はダ・カーポ?とリリカルなのはstriker-sと
オリキヤラのクロスです

題名はD・C?なのはstriker-s 漆黒と桜花の剣士
ですこちらもよろしくお願ひします

アクセス数1万5千突破記念雑談会（前書き）

雑談（混沌）会の始まり

アクセス数1万5千突破記念雑談会

作者「ここでは初登場の私作者の京勇樹です！」

雪音「こんばんわ、それともこんにちはかな？アシスタントの田原雪音です」

作者「と言つわけで今回はアクセス数1万5千突破記念の登場キャラの雑談会です」

雪音「それよりも、本編の執筆は進んでるの？」

作者「う、うむ、一応ゆっくりだが進んでる、読者の皆様どうかこの哀れな私にエールをください！！（土下座敢行中）」（プライド？ なにそれ？ そんなもの犬に食わせたわー）

雪音「まあ、いいけどあまり待たせないようにな？」

作者「うす！」

体育会系のノリで答える作者

雪音「はあ、では本日のゲストさんどうぞ？」

稟「どうも、土見稟です」

義之「よ、桜内義之だ」

麻耶「お久しぶりね、沢井麻耶です」

桜「えっと、こういうオマケ（？）では初めてですね、八重桜です」

楓「そうですね、私も初めてです、芙蓉楓です」

武「こんな大規模は初めてだな、白銀武だ」

冥夜「うむ、流石にここまで多いと壮観だな、御剣冥夜だ」

作者「今日はこの人達に来ていただきました！」

雪音「改めて考へると、この作品の未登場含めるとキャラ数つて相当な数よね？ どうして？」

作者「うむ、最初は今の数の3分の2くらいだったんだが、ちょっと構想を練つたら気付いたらこんな数になつてました・・・遠い眼をして明後日の方向を見る作者

雪音「要するに自爆?」

作者「うむ……（ズーーーン）」

作者の周囲に黒い影が立ち込めている

麻耶「えーと、なにかよくわからないけどがんばってね?」

作者の肩に手を置いて励ます沢井嬢

作者「ありがとう……」

義之「で、俺の立場（部隊の隊長）は結構最初に決まってたんだよな？」

作者「うむ、それは結構すんなり決まった」

稟「俺の設定と」

武「俺の設定もか?」

作者「うむ、結構すんなりと」

楓「私達（他の女性キャラ）の設定もですか？」

作者「おう、まあ多少悩んだキャラも居たが基本すんなりと決まつたね」

冥夜「しかし、私が初音島の軍隊に入つて大丈夫なのか?」

作者「なにが?」

冥夜「いや、御剣財閥の本家だが……」

作者「ああ、そちらも万事滞りなく決まっておりやすよ?」

冥夜「そうなのか?」

作者「はいな、もう少ししたらそれ関係の話にも突入しますから待つててね?」

冥夜「ふむ、それならば待つてやう」

作者「あざーす!」

雪音「それじゃ、作品関係の話はここまでにしておいて、ここからは少し作者の身の回り暴露といきましょうか?」

作者「ちょー?」

作者&雪音以外「「「おーーー」「」」

雪音「では、まず作者は基本いい加減ね」

桜「なんですか?」

雪音「ええ、机の上には本が山積みだし」

作者「待て！ それ以上言わせるよ！」

義之「お前は少し黙つてろ！」

作者「ぐおー！」

縄でグルグル巻きにされたあげく猿轡と田隠し及び耳栓された作者

雪音「えーと、こんな感じね？」

と作者の机の写真を見せる雪音

武「うわー、これでよく崩れないな」

雪音「作者曰く絶妙なバランスで保たれてるそうよ？ なんでも大震災でも大して崩れなかつたらしいわよ？」

義之「それは凄いな・・・」

雪音「むしろ崩れたのは隣の姉の机だとか

楓「どんな机なんでしょうか・・・」

雪音「こんなだけど」

また写真を見せる雪音

全員「・・・・・」

麻耶「足の踏み場もないわね・・・」

絶句して言葉が出ない子達に変わつて言うつ麻耶

義之「うおー、掃除してえ」

家事全般得意な義之はどうやら掃除したくなつてている模様

雪音「でこちらがそのベッド」

今度は別の写真を見せる雪音

全員「・・・ベッドの意味ない（ねー）！」

武「ダンボールで半分埋まつてて、さらに残り半分は洗濯物の山かい！」

雪音「実質、2人部屋なのに今は1人だけだそうよ？」

麻耶「お姉さんは何処で寝てるの？」

雪音「下の部屋のソファか、隣の部屋の空いてるスペースらしいわね、でこっちが作者のベッド（2段ベッドの上の段）」

全員「・・・こっちのほうがまだマシだ（です）！」

稟「3分の1は本で埋まつてゐるけど、まだ寝るスペースは確保されてるな（縦に）」

義之「お？ 僕達の原作本があるぜ？ ダ・カーポ？ が」

麻耶「あら本当」

武「おい、冥夜俺達の原作本もあるぜ？」マブリウのオルタネイティイヴが

冥夜「む？ 本当だな」

稟「お？ 僕達のもあるな、しかも桜が初登場のリアリイ？リアリイ！ が」

桜「本当だ！」

楓「これでは私は」「迷惑をおかけしましたね」

稟「なんの」

桜「いいよ楓ちゃん」

とその時だった

作者「だーらつしゃ————！」

繩を引きちぎつて作者脱出

全員「————引きちぎつた————！」

作者「火事場のクソ力つてやつだ！ つてかてめえら好き勝手やつてくれたな！！」

義之「ちい！ 繩じやなくて鎖にすべきだつたか！！」

作者「ここからはあのコーナーやるぞ！！」

マズは女性キャラからだ！

麻耶「期待してるわよ、未来の旦那様」

義之「…………（顔真っ赤）」

麻耶「お願ひだから、なにか言つてよー 言つたこっちだつて恥ず
かしいんだから！？」

義之「本望！！」

はい次！

桜「（上田遣い＆若干涙目で）お兄ちゃん？」

稟「！」は！？（吐血）

義之「これは・・・結構破壊力あるな」

楓「稟くん！？ 大丈夫ですか？！」

稟「我が人生にいつへんのくいなし！」

雪音「北 の拳！？」

もう一つちょ！

楓「私を好きになってくれてありがとうござります」

稟「普通にかわいい！」

桜「うう、私もこういつ普通のセリフ言いたかった・・・」

お次！

冥夜「人間を無礼^{なめ}るな——！」

武「なんか似合うな」

作者「しまった！？ 普通だつた！！」

お次は男性キャラだ！！

義之「お前の幻想^{おもい}は簡単には死はないぜ？」

麻耶「なんか似合う……（顔赤い）」

次！

稟「おら、起爆するぞー！ 全機伏せろ————！」

桜「お——！ かつ^二いい——！」

楓「似合^一いますよ稟くん！」

はい、ラスト！

武「これは死ではない！ 人類が生きる為の…！ 生きて未来を切り開け！！」

冥夜「男前だぞ！ 武…！」

はい終了…！

作者「はい、今回はここまで…！」

雪音「少し長いだけで結構疲れるわね」

稟「楽しかったな」

義之「おう、確かにな」

武「またやつてもいいかもな」

桜「うう、次は普通のセリフがいいな…」

楓「私もです…」

麻耶「恥ずかしかった…」

冥夜「こういうのも楽しいものだな」

全員「…お次は本編で会いましょう… セヨーーなら…
…」「…」「…」「…」

アクセス数1万5千突破記念雑談会（後書き）

後書きは割愛しますが、どうか今後もこの作品をヨロシクお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7601v/>

機動戦士ガンダム 英雄黙示録

2011年11月19日20時28分発行